

やまざと

会報5号 (96夏号)



金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

皆様お元気でお過ごしでしょうか。

金沢は毎日梅雨らしい天候が続き、先日は豪雨に襲われ、各地で土砂崩れ、河川の氾濫にみまわれました。早く梅雨が終わり、スカーッとした夏が待ち遠しいのは、皆さんも私も、同じ気持ちだと思います。

5月11日(土)、12日(日)にOB山小屋作業を計画しましたところ、沢山のOBの参加をいただきました。お蔭で山小屋周辺は見違えるようになりました。

登り口は踏み段も新しくなり、小屋の周りには昔のようにテントが張れるようになり、又、かまどの周りにはベンチを作り、ゆったりと食事や雑談ができるようになりました。心残りといえば、水場の整備ができなかったことです。

でも安心して下さい。今秋の山小屋作業には水場の整備が出来るようにと、水の取り入れ口、

ホースの設置ルートとホースの長さなどを完璧に調査し、現場写真も撮ってきました。今秋の有志諸君の作業でもって、素晴らしい水場が完成するものと期待しています。

山小屋周辺の整備が完成した後は、高三郎への登山道の整備、そして最終的には、白山へ続く道の整備へと、夢は大きくなります。20年前の金大ワングルの目標であり、そして数年間チャレンジした夢でもあったのが、「白山への道」です。この「決して実現できそうもない夢」を、いつまでも大切にもってきたいものです。

話は変わりますが、この山小屋作業の期間中に、地元の北国新聞夕刊に

「伝統の登山道復活を 犀川源流の高三郎山 金大ワングル部とOB会」

の記事が、写真とともに大きく掲載されました。その日はたいしたニュースがなかったためだったのでしょが、私めのコメントも載っていたので、非常に感動しました。

翌日山小屋へ行き、先発の皆さんに報告した

ところ、一様に感動を隠せませんでした。残念ながら、記者があたかも同行取材したかの記事のように私はうけとりましたが、実際の記者は机上でそれらしく書いていただけだったのです。

(梅君の説明で判明。写真も昨年の撮影で、北国新聞の月刊アクタスにも掲載されたもの) 北国新聞は昔からあまり好きではないので、

「バカヤロー、ちゃんと同行して書け！」と心の中で叫んだことでした。でも、私達の活動が、わずかでも世の中に紹介され、共感を得られれば、本当に嬉しいのです。

最後に、秋の山小屋作業には沢山のOB諸君の参加をお願いし、又、期待しております。

追伸)

現在山小屋には、ワングル創設者の某氏が、修行のため住んでおります。(半年ぐらいの修業ときいております。) 修行が満願成就しますようにお祈りします。

<表紙説明>

21期 竹中 敏

湿原で昼寝をしていると どこからかクマタカが飛んできた所です。

昼寝をしている人物は 草むらの中に隠れていて見えません。

でも 本人は 昼寝をしているので

クマタカが飛んできたことも知りません

2年ほど前に、八ヶ岳のふもとの小さな美術館で

辻 まことという人の画展がありました。

山の中を放浪することを、画文で描いた人です。

そんなものをかいてみたいなと思っています。

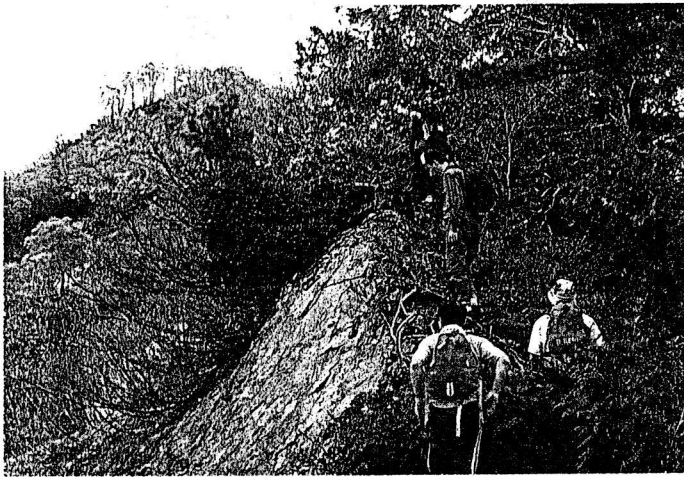


編者注；風のそよぎを頬に感じるような表紙、そして自然への優しい、温かい目を感じるイラストを何点も、会報のために送っていただきました。

丹念に描かれた表紙原画は、額に入れ、ワープロ打ちに疲れた目と体を癒すのに隠匿させてもらっています。(役得じゃ。文句あっか！)

「伝統の登山道」復活を

犀川源流の高三郎山



金大ワンゲル部とOB会

金大ワンゲル部とOB会は今夏から、金沢市の犀川源流に位置する高三郎山(標高一四二七)で登山道の整備に乗り出すことを決め、OB十七人が十一日、荒廃の現状調査

整備や小屋も修繕

まず現状調査に着手

などに着手した。高三郎山は同部が代々、山登りの修練を積んだ場所。OB会にとっては思い出深い山とされるが、近年は部員の減少で疎遠になっている。これに伴い登山道も荒れ、同部関係者らは「伝統の登山道」復活に全精力を注ぎたいとしている。

ブナ林などの原生的で豊かな自然に覆われた高三郎山は犀川ダム奥の二又川と倉谷川の二大水源に挟まれた形でそびえる。特にシャクナゲの群生が有名で、山登り愛好者には魅力的な山として知られる。

金大ワンゲル部は長年にわたり、高三郎山を訓練場として親しんできた。新入部員は先輩からテントの張り方や飯ごう炊飯の基礎を学び、リュックに石を詰めて斜面を登るといった修練を積み重ねてきた。山登りの慣れを知り、きずなを深めた場としてOBの心に残っている。

しかし、ひとこえは百人を超えた部員が三十人近くに減少し、北アルプスなどの名高い山を好む傾向も強まり、最近では中級とされる高三郎山を登る回数が激減した。これに伴い高三郎山の登山道はかん木で覆われ、歩くのが危険な場所も目立つてきた。

このためOB会は今年二月の役員会で話し合い、現役部員とともに高三郎山の登山道の整備に乗り出すことを決めた。十一日には大坂、福島、岐阜などから駆

け付けた人も含め、三班に分かれたOBが荒廃の激しいクラコシ尾根の現状調査やシャクナゲ尾根の山道の整備、倉谷にある小屋の修繕に着手した。

大島良治OB会長は「いろいろな山を登ってきたが、高三郎山はわれわれにとって一番思い出深い山であり、荒れた道を手入れしたい」と話している。



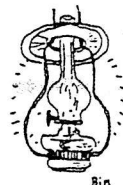
荒れた登山道を調べる金大ワンゲル部とOB会のメンバー

金沢市の高三郎山

OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(井は日時の確定していないもの)

- 12月井 製本手配 (北川)
井 会報4号発送 (久富他)
96年 (平成8年)
2月7日 OB会役員会通信N019発送
20日 金沢市予算折衝にて、高三郎登山道
に助成金がおおりる見込みに。
23日 OB会役員会開催 (辰野 舟田
北川 岡部 梶 鳥越)
26日 OB会役員会通信N020発送
会報号外・返信葉書印刷 (坂尻)
発送ラベル作成 (名倉)
発送人ラベル作成 (鳥越)
3月18日 OB会報号外発送 (舟田)
4月8日 OB会役員会通信N021発送
11日 金沢市スポーツ振興課へ挨拶
(稲葉 舟田)
15日 OB会役員会通信N022発送
16日 OB小屋作業の打ち合わせ
(辰野 舟田 岡部 現役主将老田)
21日 小屋作業道具購入 (岡部 椿川)
22日 小屋作業参加者へ最終案内 (舟田)



- 5月8日 最終打ち合わせ (辰野 岡部 舟田)
5月11、12日 第1回OB小屋作業
(19名参加 のべ32名)
21日 参加者へ写真送付と原稿依頼
21日 OB会役員会通信N023発送
6月5日 部誌BHの打ち合わせ (舟田 西馬)
6月14日 秋の小屋作業打ち合わせ
(辰野 舟田 岡部 椿川
老田 阪本 西田 後藤)
6月19日 スポーツ振興課より春の作業分
16万円受け取る
6月20日 田村さんBH滞在40日を経過
6月26日 OB会役員会通信N024発送
7月井 発送ラベル作成 (名倉)
井 会計報告・発送人ラベル作成 (鳥越)
井 一言通信葉書作成 (坂尻)
井 会報印刷 (中川)
井 製本手配 (北川)
井 会報発送 (椿川・久富)

OB会役員も無事に任期の半分を終えました。
任期前半の反省、並びに今後の方針について、
2月23日、話し合いました。

* 会報の発行について

「年2回と決めないで、年1回や、時には年3
回など、状況に応じてでもよいのでは」
「負担がかかるかもしれないが、年2回をベ
ースとして維持したら、OB会の基盤であり、
普通のOBは会報でやっとながっている状
態にあるし」
「経費的には年2回の発行ペースを維持してい
ける。それは、35周年の繰り越し金も含めた
残高から見て」

「会報経費の6割強が郵送料。現在残高で発行
ペースを考えるより、会費未納者からの入金
促進を試みるべき」

「現在の事務局が出していけるのなら、年2回
で進めていけばよい。その時の役員や事務局
がやれる範囲の中での判断でよい。」

…年2回の発行ペースで今後も進める。

* OB年会費について

「会員の6割が納入。ほとんどが1万円の一括
納入。年配OBや役員のいる代の期の納入率が
高く、若い代の納入が少ない」

「会計年度は総会から総会まで。第1回役員会

では、強制せず、総会直前には未納者に繰り返しお願いをしてみる…ということだった」

「年2回の会報を受け取り、最新の名簿情報が得られる点ではメリットを受けている。会計報告もきちんと行っている。郵送費に一番食われている点では、任意というより、もっと強めにお願いできるのでは」

「OBは忙しくて、ちょっと横に置いて忘れるとか、いくつも請求がくるから、どれを払ったのかわからなくなってしまう。絶対払いたくないというOBはいないと思う。未納の人には、未納であることをはっきり伝え、納入を促進する対策を講じてみたら」

「他の期のOBに催促しにくいようであれば、各期代表からもお願いするというので、さらにフォローしたら」

…丁度夏号は、振込用紙を同封する回。振込促進策は会計トリさんが、智恵を絞ることに。

*役員会・懇親会について

(10月の、OB役員と現役3回生合同の飲み会)
「半年、新人の育成にあたった3回生を慰労する趣旨はよいのでは。こういう時にでも顔を合わせないと、卒業してOBになっても何もわからない」

「現役の生の声を聞けるのは楽しい」

「現役にもそれなりの励みになってもらえたら嬉しい」

…継続します

*支部活動への援助

「東海ワングル会は、役員の旅費、役員分の会費、連絡費を援助した」

「関東ワングル会など、今後地域のOB全体によびかける世話人が出てくれば連絡費を援助したい」

…現時点では動きなし

*現役への補助金

1) 小屋作業

「93年には小屋修復金として別募集。94年、95年は、各5万円を小屋作業時に渡した」

…金沢市からの補助金について、全額を現役に回し彼等の士気を高めてもらう。OB側の出費はOB会費から出し、労力を奉仕するOBを、他のOBは会費で応援すると解釈する。

2) 部誌BH発刊への援助

「5年分原稿となると、今の現役だけの責任とは、いえない。これ以上の発刊延期は、次の代の士気にも関わる」

「BH誌を同封する時には、別に千円の振込をお願いするといったやり方もある」

…見積もりもでていない状態で、援助額を検討できる段階ではないが、発刊できる方向への援助をする。

*KUWV関係者とわかる ワッペン作成の件

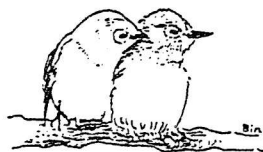
「あった方がよい」

「40周年事業にからめてみて」

…作成の方向へ。デザイン、費用検討の余地あり。

*OB小屋作業について

(この時は、第1回の日時や、段取りをうちあわせ。詳しくは、本号の特集中に紹介)



OB一言通信



*田村 昭夫 3期

謹賀新年

今年は私にとっては還暦の年です。

「友よ、われわれがこの世を去る時、生まれたときよりも世の中を少しなりともよくしていこうではないか」

(ハーシェル・英国天文学者・18世紀)

それには自分にしか出来ないことを実行することだと思います。

日本で唯一の世界に通用する大学、会津大学は創立四年目を迎え、いよいよ来年は第一期生を世に出します。数少ないロジックICの技術者である彼等の未来に栄光あれ。

「やまざと」4号大変興味深く読ませていただきました。会津大学WVの顧問に就任。

*北 正昭 3期

やまざと95冬号拝受。

編集諸氏の御努力に深謝致します。「月見の宴」楽しく読ませていただきました。小生も参加の意、強かったのですが、都合がつかず断念しました。仙田兄が来られた由、かえすがえすも不参加が残念でした。

来る年もOB諸兄姉にはますます御活躍されんことを祈り、小生も壮健の気をもって事に当たりたいと念じております。

*川島 勇 5期

「やまざと」楽しく拝見いたしました。最近時間的余裕も出来ましたので、山歩きを改めて楽しみ始めました。昨年は富士山、谷川岳、安達太郎山等歩いてきました。今年もいくつか楽しみに計画しております。

*亀田 武 5期

「やまざと」ありがとうございました。いつも編集の係の皆様にはたいへんご苦勞をおかけしております。

年に1度か、せいぜい2度の帰沢しか出来なため、OB会の活動に協力出来なくて申し訳なく思っております。

*富田 征也 5期

やまざと4号楽しく読ませていただきました。青春時代にもどると同時に、心の中はいつ迄も青春でいたいと思います。

皆様方のご健勝をお祈り致します。

*金岩 孜 5期

会報をお送り頂きありがとうございます。OB活動を少しも行っていないこと、申し訳なく思っています。

WV活動で得られた経験・ネットワーク等をボランティア活動にも役立てられるようになってはどうでしょうか。(口出すのみで、足が伴いませんが...)

*合津 尚 6期

「宴の記」を楽しく読ませていただきました。昭和38-9年の建設当時よりアクセスが不便になっている感じがして、驚きました。

マラソンは4時間5分でした。今年のシーズンにあと2回エントリーしていますので、今度は切れると思います。

*白井 勇 9期

会報4号ありがとうございます。いつものことながら役員の皆様にはお手数おかけ致します。

暫く山歩きから遠ざかっていますが、そろそろ再開をと思っています。

*森川 功 11期

城はなくなったが、金沢の香りがする「やまざと」ありがとう。

それにしても年2回発行はたいへんでしょう。自然体で長く続くことを期待しています。

*浅見 裕子 14期

「やまざと」NO4ありがとうございます。現役部員の数が少ないのに驚くと同時に、現代の若者の姿が反映されているような、何か寂しい思いが致します。先日20年ぶりに15期の坂尻さんと逢う機会があり、たいへん懐かしく我が青春の日々が思い起こされました。(彼はベテラン高校教師の素晴らしい風格でした。)

12・14期赤地さんの住所変更お知らせします。

*松林 知一 15期

あけましておめでとうございます。旧年中はいろいろお世話になりました。「やまざと」4号ありがとうございます。「月見の宴」の感想はがきをバスしてしまい、心苦しく思っています。

本年もアウトドアライフの復活に向けて活動を再開したいと思っていますので、せいぜい声をかけて下さい。家族ともども本年もどうぞよろしく願いいたします。



*坂尻 忠秀 15期

やまざと4号ありがとうございます。正月ののんびりした時間の中で読んでいます。

昨年は阪神大震災、同期の横井君の死、月見の宴、穴水で開いた恒例の15期会…。多くのことがあり、多くの人の心の温かさが身にしみました。本年もよろしくお願い致します。

*佐野 哲雄 15期

梅氏(19期)出演の花の百名山「白山」を、TV視聴しました。

身近に知っている人が出ているだけでうれしく思いました。

*舟田 節子 15期

字が下手なゆえに独学でものにしたワープロ(その御蔭でOB会もやってこれたのです)。柳の下のネズミならぬパソコンの方はそれだけの必要性がなく、今の所節税に貢献したのみ。それにしても、英語も読めぬ三男坊(小3)が

喜々としてテーマパークを拡大していく様を眺めると、髪を染めても、レンズを替えても、騙しきれない中身の老化をつきつけられてしまう。あせるか?それとも骨董の身を磨いて鈍く光る道を行くか?今はやっぱりあせて講習を受けに行く。

「次の可能性に手をかけておきたい!」…年頭の決意。

*川端 俊朗 16期

「やまざと」ありがとうございます。

金沢を離れ、はや20年が過ぎました。山歩きよりもネオン街をワンデリングする毎日です。

H7年は夏に1か月胆石で入院しました。その間横井先輩の死を知り、ベッドの上で祈りつつ命あることに感謝しました。またいつか白山を訪れたいと思い、忙しい日々に向かっていきます。

*藤野 達人 17期

過日は会報「やまざと」を有り難うございました。この度米国現地法人アライドシグナル・シドウシャキキコーポレーションに転職になりました。何か連絡事項がありましたら、今迄通り浦和の方へお願い致します。

追伸 会費をお払いしてありませんので、どのような支払い方法をしたらよろしいでしょうか。又、金額もお願いいたします。

(事務局より;郵便にて振替用紙をもらい、郵便振替口座 00780-3-14120

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会宛、ご送金下さい。年会費は2,000円ですが5年分一括(総会を区切りとする5年単位)1万円で、できるだけ願います。)

*井上 茂良 18期

去年、子供(小6、小2)の運動会で、ぱったり20期の松下君に会い、大変懐かしく昔話等をしました。

金沢に行く機会がなく、OB会の催しに参加出来ないのが残念です。

*佐野 吏 19期

大学のインターネットにワンゲルのホームページを検討してみてください。部員同士、現役とOB、OBとOBの意見交換や連絡に活用できると思います。

*竹中 敏 21期

冬になると、会社の近くに、ルリビタキが山からおりてきます。暖かい日には、その声を聞くこともあります。夏の南竜のあたりで聞いたことのある、あの声です。



*小林 正人 22期

住所：変わりました。
電話：変わりました。
勤め先：変わりません。
本人：相変わらず軟弱です。

OB会をひばっていった下さる皆様には敬服しております。私も福井に戻って4年目になり、ようやく子供を連れて白山に登れるゆとりも出てきました。10年振りにスキーにも行きました。皆さんに比べて軟弱で残念です。

*酒井 智治 24期

役員の皆様ご苦勞様です。

サラリーマンをしているだけで疲れてる私にとって、皆様のパワーには頭が下がる思いです。「やまざと」、通勤電車の中で、楽しく、懐かしく、読ませて頂きます。

また、OB会を通じて、思い出の金沢との接点を大切にしていきたいと思っています。

*荒戸 美雅 25期

日々の皆様のご活躍が「やまざと」を通して生き生きと伝わってきて、こちらの方も元気になってしまいます。

金沢には年に1度ぐらいしか帰省できないものですから、BHまで足をのばすには、事前に妻への根回しが必要です。ミッキーマウスでもいたら、子供も喜ぶかもしれません（ゴメンナ

サイ）。

そういえば、BHにいた強そうなアブはまだいるのでしょうか。

*中村 英治 25期

「エリー」のカレーセットを食べながら反省会をし、「信濃」のお好み焼き屋でドンチャン騒ぎをし、「赤玉」のおでん屋でしこたま飲み、「第7ギョーザ」のホワイトギョーザを買って下宿に戻った学生時代を懐かしく思います。

*益川 珠美代 26期

年末、当地では記録的な大雪（祖母が嫁いできても記憶にないという）に見舞われました。困り切っている周りの人達の中で、私と犬は大喜びでラッセル。雪山とは全く縁遠くなっている日常に、思いがけずプレゼントされたく感覚>でした。

今年雪山へ行かれる現役・OBの皆様の安全をお祈りしています。

*藤田 章三、靖代 26期

お忙しい中、いろいろお世話いただき本当にありがとうございます。

「やまざと」楽しく拝見させていただきました。金沢へ帰省する度、白山を眺めて懐かしむ私達です。

OB、現役の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

*二木 博子 27期

1996年1月2日、男の子を出産しました。名前は「大地（だいち）」です。おおらかな男の子に育って欲しいと思っています。

*土井 泰彦 28期

事務局の方々、本当に御苦勞様です。九州にいと金沢の情報もほとんど入りませんので、「やまざと」だけが頼りです。

先日、結婚式で金沢に行きましたが、大学の中へは全く入れず残念でした。

昔の若さを思い出しながら、仕事の苦しい時に励みにしている自分です。これからもよろしくお願いします。

*北村 久秀 28期

返事が遅くなりすみません。「やまざと」を読むたびに学生時代を思い出します。そして皆様の御活躍を知り、自分も元気づけられます。

*渋谷 敏行 29期

「月見の宴」の際は現役部員の皆さんや、準備にご尽力いただいたOBの方々には、大変お世話になり、ありがとうございました。

40周年記念山行には、私と同年代のOBが多数参加してもらえればと思います。

この11月にめでたく妻帯者となり、以下のとおり住所が変更となりました。

*野田 和裕 30期

最近パソコン通信やインターネットの普及で安価な情報交流が可能になってきました。

パソコンを所有しておられる方ならやっておられる人もあると思いますので、IDナンバー等を掲載するのでもいいかもしれません。ちなみに私はニフティサーブID RXU00614
アマチュア無線もあります。JK3RTO です。両方ともあまり詳しくないですが、導入の際は協力いたします。

*今井 未央 34期

いつも御苦勞様です。学校で年度末にクラス文集を作るだけでも非常に面倒くさいのに、いつも頭が下がります。(小学校教員のくせに面倒くさがり屋なんです。)この文があの会報に載るのかと思うと恥ずかしくて、いつも白紙でした。絶対に載せないで下さい。

(编者注…でも、載せてしまいました。デリカシーの無い編集人を責めて下さい。)

いつもただ慌ただしい社会生活の中で、のんびりと自由だったあのワングル時代を蘇らせてくれるこの会報を、大切に読まさせていただいています。本当にありがとうございます。

平成8年(1996年)3月27日(水曜日)

北 國 新 聞



移転のため撤去される「金沢大学」の石碑
＝金沢城跡の石川門前

卒業生の情しむ声も
金大事務局によると、「金沢大学」の石碑は昭和四十三年三月、二代目学長の石橋雅義氏が退任の際に贈った。観光客がたびたび写真に収めるなど、石川門と一体となつて金大の表玄関の象徴となつてきた。
このため金大は、城内から角間キャンパスへ移転後も石碑を現在地に残すことを決め、県に対して平成六年十一月、キャンパス跡地に継続して設置するよう要請したが、県では回答を保留していたが、城跡取得後の金沢城址公園の整備方針が面々のに従い、「公園の玄関としてふさわしい」と(奥土木部)と指摘する声も高まつてきた。
こうして、金大では、今月開いた学内の委員会で協議の末、石碑の移設を決め、二十六日に石川門前から撤去した。
金大卒業生の一人は「本来大学の敷地内に設置されるのがさびしいが、石碑のない石川門は何となくさびしい印象」と話している。

「紛らわしい」の声受け

金大のシンボル、石川門前の石碑 残留から一転、移設

金大のシンボル、石川門前にあった「金沢大学」と刻まれた石碑が二十六日、金大角間キャンパスに移設された。近々石川門が跡地を返却し、新年度から公園整備に着手するため、大側は石碑が観光客に紛らわしい印象を与えないと考慮し、移転を決めた。石碑は長く金大のシンボルとして親しまれてきたが、卒業生の間には移転を惜しむ声も出ている。

金沢市からの登山道修復補助金について

(紆余曲折、思い違い、変更部分をカットして)

* (伏線) 95年9月23日

月見の宴の集合場所小立野キャンパスにて。
「尾山祭」の挨拶を終えた山出市長が、わざわざ車を停めて、
「山ですか？」
と声をかけていかれる。この時、
「高三郎登山道の修復もよろしく」
とお願ひしたのが、きいたのかどうか…?

* 現役3回生との懇親会の直前

ナカオ山岳会代表林正一氏より、「登山道の修復に動いているような団体があれば、補助金を出してやるように」という声が、市長から、農林関係の部署にかかり、そこから自分に問い合わせが入った。こちらは医王山のナカオ新道以外に手を広げる気はなく、もし金大ワンゲルが高三郎の道に取り組むつもりがあれば、そのように口をきいてきてもよいがとのご厚意あり。
懇親会の席で現役に聞いてみると返事

* 10月25日 OB会役員と現役3回生の懇親会
「部も個人も万年金欠で、是非お願ひしたい」との返事。その際、上馬さん、楯さんからは自然環境特別保全地区であるが、そのあたりを金沢市が行政サイドで解決しておいてくれるのかの懸念あり。
林代表に返事を伝える。

* 96年2月20日
林代表より、高三郎に30万円がおおりる見込みとの連絡あり。
・補助金を出す部署はスポーツ振興課
・「どの地域に対して、どの森林組合が担当」と、請け負う団体を決める段階であった。地域と金額については、振興課が先に割り振り



してあるようだ。高三郎については、金沢市長より、指定地域に加えるよう特に指示があったらしい。

・窓口に來ているのがナカオ山岳会だったためか、担当者はナカオ山岳会と金大ワンゲルの連名での請負を主張。(全くのご好意での口聞きだったのに。この時、今回1回限りではなく、維持していくための酒代程度の継続援助も進言して下さったそうです)

* 4月11日

5期稲葉さんより、スポーツ振興課ということであれば、課長は自分の同級生。一度ワンゲルとして顔出ししてきましょう…とのことで、稲葉さん、舟田が市役所へ。

金子 衛課長は、稲葉さんとは中学時代の同級生。しかも5期山田 允さんに薦められて山靴を買い、一緒に医王山へ登ったこと、林 克郎さん他のOBもご存知なことがわかる。さらに、担当の尾崎 敬志主査は倉谷の出身ということで、「もしや、BH13号で取材した林業事務所の尾崎さんという方は…」「僕の親父ですよ」…(リラックスムード漂う)

ここで、名刺替わりの紙片<金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会事務局長 金沢ナカオ山岳会会計 舟田節子>を出す。
「ああ、これでわかった…」

(ようするに、折衝に来ているのは、ナカオ、
請け負うというのが金大ワンゲルで、どう繋が
っているのか、どう請け負ってもらえばいいの
かが、彼等の方もわかり辛かったものらしい)
「ワンゲルが学生だから困るとか、OB会が何
らかの組織として認められるものでないと困る
とか、そんな点での不都合があるんでしょう
かね」

「補助金は、本来は作業に出た個人に渡すもの
であって、何月何日に誰が出たのか、誰が責任
者となってお金の受け渡しをするのか、それら
の報告がなされればよい。書類についても、代
表者名が分かればということになるので、不都合
はない」

「スポーツ振興課としては、市民に手頃な(高
三郎?)ハイキングコースを推奨していくとい
う立場で、そんなコースを整備している人達に
草芥程度の補助金を出そう…がこのお金の趣
旨です」

「その程度の趣旨なので、もし営林署や環境庁
がからんでくるようでしたら、これまでワンゲ
ルがやっていたことだし、そちらで話をつけて
おいて下さい」

地図、写真を使い、高三郎の現況を説明する。

「これは一年ではとても無理ですね」

「これでは、これからも出していかなんね」
(やった!)

「今年は、まず旧道の方で、頂上まで行ける状
態にしてみして下さい。あとは状況を見ながら進
めてもらうことに」

稲葉さんの

「わしはもう馬力がなくて作業まで出れんけど、
いいがになったら、一緒に行ってみようや」

「ほうや、わしも歩けるうちに歩かんなん」
で、なごやかにしめくくる。

500名OBの存在がワンゲルの財産になれば
…の願いが叶ったような嬉しい一時だった。

* 5月小屋作業直前

梅さんより

営林署は、巡視の都合上は、整備してもらえ
とありがたい。書類にすると面倒なので、「口
頭で確認した」とするの返事だった。

環境庁の方は、一応書類がいる。しかし、保全
地区をさわるのは秋になってからであり、秋に
なってから、私が作成しておきますの返事。

* 6月4日

舟田、スポーツ振興課へ。小屋作業参加者名簿
を渡す。補助金額は30万円で決定。これは5000
円×60人で算定している額であること。案内板
については今年は出ず、秋にでも必要な箇所につ
いて報告を出して貰えば、次年度の予算に考
慮してみる。補助金は半額相当を今月中に渡し、
残りは、秋の作業後に渡す…等を聞く。

(林さんに聞いた話。普通補助金は申請額の半
額程度。それを見込んで申請したり、足りなけ
れば、次年度も申請したりする。この30万円と
いう額は、こんなケースでは、「よく出したな」
といえるだけの額らしい。ちなみに、登山道修
復の人夫賃の相場は日当11000 から12000 円。
その点では、日当5000円は半額程度のラインで
できた数字とみなせそう。)

* 6月14日

現役3年生と秋の小屋作業の打ち合わせ。補助
金が30万円で確定したこと。秋の小屋作業後、
全額を現役に受け渡す旨確認。

* 6月19日

尾崎主査、16万円(5000×32人)を届けにおい
でる。規定の報告用紙に、押印を集めておいて
欲しいとのこと。



山小屋酒場の会員登録について

(仮称 リフレッシュ会)

去る3月、会報号外にて、山小屋酒場（仮称 リフレッシュ会改め）への登録をご案内いたしました。もう少し正確にご説明します。

まず、OB会の活動は全OBに案内し、また事後報告も会報を通じて全OBにお伝えすることを原則としています。会報を年2回の発行としておりますのは、年1回では形式的な報告のみに終わり、「活動するOB会」の基盤になれないのでは？の懸念から維持しているものです。

山小屋酒場は、はっきりした討議をしているわけではありませんが、ほぼ、新緑がきれいで高三郎登山もできそうな5月頃と、紅葉の秋9月（正確には紅葉には早い。が、昼時間もほとんど、かつ連休が利用できる）の2回が、妥当なあたりとの感触を得ています。

特に、秋については、近年現役達の小屋作業が行われており、一緒に大がかりな作業を行えるメリットがあります。又、秋の連休あたりを＜ワンゲルウィーク＞としてワンゲル関係者が自由に入入りし、気楽に親睦できる祭のように育ててみないか？の提言もあります。

これらの企画や提言に対し、秋開催のものは、会報夏号でのご案内・申し込み受付で間に合います。しかし、春開催のものを冬号で案内となると、あいだに年度変わりもある、役員自身も会員各位もまだ予定がたてられない…で、難しいのです。

そこで、春開催のものは会報とは別に案内を出さねばならなくなり、この「案内」だけは会員登録者にのみ発送として、連絡費節減と、事務軽減を図ろうとするものです。

山小屋酒場は「参加者は労力奉仕、非参加者は会費で応援していただく」趣旨で運営します。決してOB会内に、別グループを作るものではなく、登録者の中だけで別情報を流すことはありません。

あくまで連絡事務軽減のためだけの登録である事をご了承下さい。次回会報で、もう一度登録の確認をさせていただきます。



「月見の宴」感想の追加

*平村 耕作 9期

拝啓 年賀状を書く時期になり、整理して思い出しました。月見の宴では本当にありがとうございました。現役の皆様、事務局の舟田さんはじめ、多くの皆様のおかげで、本当に楽しかった。ここ5年位、山へも行てなく、体力的にどうなのかなとも思いましたが、なんともありませんでした。(少しオーバーかな)
ベルクハイムが立派に維持され、当時の山小屋委員長としてとてもうれしかったです。次の機会にもぜひ参加します。 早々



登録希望者からの通信

○第1回に参加希望

*田村 昭夫 ○ 3期

「いつかある日」を読み涙が出た。
決心がついた！俺は山小屋番になる。

*大島 良治 ○ 13期

いつも頑張って下さり、本当にありがとう御座居ます。

*辰野 隆義 ○ 13期

月見の宴でふと思いついたことが、こんな大事になるとは思ってもみませんでした。ほんの数人でやろうと思っていたことが…。
でも、現役、OBの憩いの場として再びBHが蘇ることを願って、チーフをやらせてもらいます。

*吉田 穂積 ○ 13期

*南 梅子 ○ 13期

いつも会報をお送り下さりましてありがとうございます。今回は新しい企画、これからが楽しみです。

上記の件ですが、是非参加したいと思いますが日帰り希望です。当方田舎ゆえ、電車の便が悪く、こちらを始発に出ても、金沢着が8時過ぎです。駒帰行きのバスに間に合うでしょうか。それとも運良くどなたかの車にでも便乗させていただけるか？などなど心配な点多々あり…。参加者の方々の状況と照らし合わせて、ご迷惑をかけない程度に参加できたら…と思います。勝手なことを申してすみません。
金沢近辺在住の役員の方々にはいつもお世話いただき頭が下がります。今後共よろしく願います。

*吉本 良治 ○ 13期

登山道修復作業には、参加しないではなく、参加できない。体力に自信がありませんので。徐々に身体を慣らしていけば、そのうち参加できるようになるでしょう。

*上馬 康生 ○ 15期

天気が良ければ朝早く出発して高三郎のピークへ行きたい。一緒に行く人いませんか。

*坂尻 忠秀 ○ 15期

新年度の日程が確定せず遅くなりました。よろしくお願いします。

*舟田 節子 ○ 15期

「金大？フン」の二男坊が、センター試験の結果金大受験に。無事合格。それなら…「ワンゲル？フン。アホか!」。かくして、40周年にむけて傀儡政権をうちたてる「野望」はついえる。現役を増やすのってホントに難しい。みなさん！大名山行も、奥方山行もできません。我身を鍛えるのみ。

*北川 隆次 ○ 16期

*山上 正彦 ○ 16期

ただし、登山道作業は日程による。上馬さんの

意見を聞いて、犀奥にも文化圏を作りたいと思っています。

*清水 重仁 ○ 16期

全く根拠なしですが、会の自由さに甘えて参加にしました。

BHに電話線とパソコンを設置してもらえば、在宅勤務(?)もできるかもね。最近インターネット(もっぱら閲覧のみ)で裏も楽しんでます。(NIF ID BYR01544)

*椿川 利弘 ○ 18期

実は、4月5月が事務所として大きな仕事があり、最も忙しい時なので、できるだけ協力しますが、今回はサブチーフということでお願いします。



*野田 和裕 ○ 30期

もし、仕事の都合上、参加出来ない場合は、出来るだけ早く連絡します。(可能性有り)

*石川 明弘 ○ 36期

就職場所は未定ですが、今年1年は金沢にいます。どうぞよろしくお願いします。

*仙田 厚太郎 1期

回答遅れて申し訳ありませんでした。同時にご案内したとおり、今回転居しました。やっと少し落ち着いた所です。なお、田村氏より慰心碑の銘板のごことでご相談あり、できれば銅板にしたいと思っています。少し費用がかかると思いますが、5月11、12日の会の時にOBの皆さんに一応話をしてみして下さい。費用によってはOB各位に少しばかりご協力をお願いせざるを得ないかと思っています。大変申し訳ないと思いますが、OB各位のご意見をお聞き頂きたいをお願いします。

*安土 忠義 3期

*岸楯 進次郎 10期

近年、山に登るという気力が湧いてこない。体力もないが…。

作業当日、学会にて参加出来ず。皆様によろしく。

*木津 治男 10期

失念しておりました。ごめんなさい。封筒内の葉書に気がませんでした。

先日、舟田様の連絡いただき、小生でも何か協力できることがあればと、登録することにしました。しかし、日曜、祭日といえど、必ずしも休めない自営の身。都合が良ければ、という条件付きにてお願いします。

*矢崎 利哉 11期

拠点のあるワンダラーの成功に期待を。部員の増減を気にせず地道な活動、広報活動を。

*柴田 茂樹・訓子 13期

嬉しいお便り有り難うございます。当方実は、5月12日(日)、千葉にて姪の結婚式とのことで、そちらへは伺えないことになりました。

6月9日(日)15周年(公文式教室)で、落ち着いた日々です。

*奥名 正啓 15期

心身共に疲れ切っている現在です。どこかでふんぎりをつけて、リフレッシュしたいと思っています。

*松縄 宏 15期

昔、秋の4、5日間高三郎手前に幕営し、登山道整備したことが懐かしく思い出されます。今会の企画の意義に十分賛同するものの、残念ながら時間の余裕もなく、遠くから声援を送るのみです。OB先輩の皆様のご活躍をお祈りします。

*間所 新一 15期

毎回OB会からの便りを拝見する度に、昔のことを懐かしく思い出しています。今回もちょっと行けそうにありませんが、山小屋のニュース楽しみに待っています。お手数ですが、山小屋通信の送付、お願いします。

*渡辺 純久 15期

家の前の雑草を刈って、代替とさせて下さい。

*恵比寿 泰子 17期

OB会のお世話、いつもご苦労様です。日頃の忙しさに紛れて、山とは無縁の生活を送っていますが、いつかまた山へ登りたいと思っています。今、手をけがして作業には参加できませんが、いつの日か、お役にたてる日があればと思っています。

*井上 茂良 18期



*坂井 尚登・尚美 18期

今現在ではまだ余裕がなく参加できそうもありません。?年後(1年後かも)に参加できることを願って、れんらくだけ下さる様お願いします。いつもお世話をかけるばかりで恐縮です。

*石地 隆司 23期

大変遅くなってしまいました。子供が生まれたばかりで当分参加できそうにないですけど、チャンスがあれば参加したいと思っています。

*酒井 智治 24期

県の補助金が出る程活動が本格化し、皆様ご苦労様です。在学中嫌だった高三郎ですが、いずれ登りたいという気持ちになっています。遠方で参加できませんが、いずれ何らかのお手伝いをしたいと思っています。

*酒井 教雄 26期

高三郎に登ってみたいと思っています。

*山口 雪枝 26期

歩荷トレのつもりで(?) 8ヶ月の赤ん坊をおぶって家事をしている今日この頃です。活動に参加できる見込みがありませんが登録してもらうのもしかたとは思ったのですが…。できればお願いします。

*石倉 昭彦 31期

仕事で行けませんが、よろしくお願いします。

*奥出 俊一 33期

高三郎の道に補助金…と聞いて、はじめギョッとしました。補助金を使って林道開設、などという仕事にこの一年でもうウンザリしていたので。機会あらば参加したいと思います。

爺ヶ岳の春合宿に向かう現役生に、松本駅で、ワイン3本を差し入れしたのが3月17日昼過ぎのこと。その3時間ほど前に、彼等が予定したのと同じコースでICUパーティーの一人が巻き込まれる雪崩があったことになります。(金大パーティーは信濃大町駅で登山中止を勧告された。)

振り返ってみれば紙一重だった、というところから何をどう捉えるか。もどかしいけれども、自然が相手の場合、それを繰り返すしかないのでしょうか。信毎と朝日の新聞記事コピーを同封します。(部室用にも送付済)

*金田 学 34期

今年の4月から下記に住所変更します。

*樫村 美智子 35期

連絡が遅れて本当にすみません。参加したいのですが、修士論文の都合でまだ未定ですので、一応×ということにします。

*立川 健吾 36期

大変意義あることだと感じますので、是非長続きするような形で行っていただきたいと思います。



非登録者からの通信

○第1回参加希望

?…確定せず

*高島 誠 ? 3期

都合つけば、前もってTEL して参加します。

*島林 仁司 ○ 10期

ただ旧道を歩くだけ。つりを含め。

いろいろ迷いましたが、一度昔の地を訪れてみる事にしました。定年後の目指す生活には近いものもあり心は動きますが、物理的な距離があってなかなか入会とまではいきません。「いつかある日」に誘われた一人です。

*村井 匠 ? 23期

5月11日近くになり参加できそうな場合、混ぜて下さいと連絡を入れます。その折りはよろしく。今後もしよろしく。

*西尾 皓史 3期

*安藤 道子 3期

下菊橋から見える山の名がわかっただけならいいなァと思いながら眺めています。

*北野 倫子 3期

*森島 稔 4期

号外拝見しました。ほんとうに「リフレッシュ」の言葉がぴたりです。リフレッシュ休暇を使いたいところですが、地元行事の為、又の機会に…。よろしく。

*川島 勇 5期

遠方で参加出来ず、近くの山歩きを楽しんでいます。

*影近 憲一 5期

協力は難しいが陰ながら成功を祈っております。

*亀田 武 5期

体力の衰えを気力でカバー出来る確率が年々低下する今日、自宅近辺の散歩でどこまで維持可能か…に期待しつつある現在です。

*金岩 孜 5期

遅くなって申し訳ありません。

*大崎 進 6期

残念ながら参加できません。

*石橋 毅 6期

Bergheimの写真のコピーを一度、会報に載せて下さい。お願いします。

*合津 尚 6期

遠方であり参加できませんので、よろしく。

*大磯 岩雄 7期

ご苦勞様です。

*沢田 孝雄 7期

高三郎の麓に山小屋を作ろう。初代の石造り小屋を建てたのも僕達ですが、何故か後輩の方々の話にのってゆけない。もう、山に対するこだわりがなくなったのかもしれない。

*四十万 利之 7期

皆様の御健康と御活躍を祈ります。相変わらず都会のジャングルにてWANDERING しています。

*永谷 洋三 8期

特になし

*黒崎 史平 8期

金沢の山々に思いを馳せつつ、神戸からはなかなか行けそうにありません。

*神原 恒昭 8期

ゴルフ、テニス、エアロビクスなど金を掛けたいわゆるバブル精神の余暇に疑問を持たれたのか、はたまた飽きられたのか、以前の者から見ると、当然と思われる本来のリフレッシュ活動が発足し、羨ましく思います。登録出来なくて残念です。これから長い活動になるよう祈ります。

*篠島 益夫 8期

いよいよ春です。西中国山地の山々に今年も挑戦。主な山は、昨年と今年で走破予定です。

*山中 重夫 9期

*伊藤 博道 9期

*寺本 典生 10期

4/1より西日野養護学校勤務となります。これからは若干時間がとれそうなので、一度高三郎や大門を訪ねたいと思っています。

*芝田 真・照美 11期・12期

寂しいけれど、もうBergheimには行けないのかなあ。遠くにいますので…。

(別便から)

さて、私も寄る年波に相応な山をみつけて登っております。

5月には大型サイクリングを2回やりました。連休に、自宅から南アルプスを「中央構造線ライン」にそって南下して、静岡県まで行くのです。自転車というのは意外とはかどるもので、このコースを2泊でこなしました。もう1回は、自宅から荏崎の方へ下り、夜叉神峠から北岳直下の広河原に入り、北沢峠を越えて高遠に下り、自宅に戻ってくるもの。1日半のコースでした。

南アルプスは麓に、深い谷や知られていない集落が多いですね。我々には茶畑が新鮮です。こちらに住んでいると、本当に行く所には困りませんね。

さて、インターネットをやっていますか？うちのHome Page に寄ってみて下さい。

www.root.or.jp/shibataです。

*杉森 和義 11期

OB会及びOB会員の活性化の為、御尽力ご苦労さまです。新企画にも賛同いたします。残念ながら、諸々の理由により参加できませんが、今後の隆盛を祈ります。

*伊藤 純治 13期

仕事の都合上、実質的な応援は出来ないと思いますが、金銭的には少々の応援が出来ると思いますので、必要な時には御連絡下さい。

*神林 博 13期

(インドネシア赴任中)

*仁藤 早苗 14期

みなさんお元気ですか。「号外」楽しく読ませてもらいました。村(ヤマギシズム実顕地)では今、卒業。春休み、新入生がやってきたり。転校生が出発したりとまた、新しいはじまりの時です。

*祖父江 直久 15期

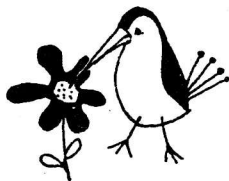
OB会の積極的な活動にはいつも感心しますし、影ながら応援します。私にとって「やまざと」のパワーを読むのがリフレッシュです。

*佐野 哲雄 15期

参加したいのは「山々」なれど、愛知からでは。

*金井 澄 15期

お誘いありがとうございます。でも行けそうにありません。節ちゃんを通じて何か差し入れます。GWにはカナダの山を見に行く予定。



*鈴木 良紀 15期

*山田 容子 16期

*小島 敬・幸子 17期

*大家 慎一 17期

なにぶんにも遠方のため、あしからず。いつも連絡をありがとうございます。

*渡辺 和文 17期

「やまざと」ありがとうございました。遠隔地のためなかなか行けそうにありません。いつの日か行けることを願っています。会の盛会を祈っています。

*森 博彦 18期

住所変更しました。

*佐倉 正樹 19期

高校教員で、土、日は部活や模試でつぶれます。皆様には申し訳なく思いますが、頑張りに敬意を表したく存じます。

*佐野 吏 19期

「しない」ばかりですみません。山小屋なつかしいですね。現役当時、改修作業に参加でき、幸せでした。近くの方は幸せですね。リフレッシュ頑張ってください。

*横山 寿人 20期

*広瀬 隆 20期

ワングルOB会活動にはほとんど顔を出していませんが、嫌いになったわけではなく、いつも「参加して、もう一度やりたい」という気持ちがあります。空間的に、時間的に、壁が厚いのですが、頑張って取り除こうとしています。

*加藤 万里子 21期

*黒崎 敏男 22期

小屋作業はたいへん懐かしい思い出となっております。いつも行事に参加できなくてすみません。

*足立 美津江 23期

いつも通信をありがとうございます。忙しい日々の中、フッと懐かしさに浸ったりします。地理的に遠く、なかなか金沢の方へ行くことができず、残念です。

*宇野 寿洋 23期

ごめんなさい。

*興井 隆 23期

プランそのものは魅力的ですが、現在私が持ち合わせている金と時間を注ぎ込む余力は無さそうです。数年後には仲間に入れて下さい。

*高橋 智米子 23期

*辻 政孝 23期

休日の関係で参加できません。(火・水休み)現役時代に屋根のペンキ塗りや木材をダムより運んだことが思い出されます。

*神谷 明延 24期

*樋口 隆樹 25期

OB会事務局の方々御苦労様です。遠方につき不参加とさせていただきます。現役時代、高三郎はヤブ山で好きではなかったが、5回生の夏に単独2泊3日で倉谷を完全遡行した思い出があります。今思えば、記録をワングルに残せばよかった。

*荒戸 美雅 25期

10年以上も高三郎には行っていないので、具体的なことは言えません。ただ、私たちワングル仲間だけでなく、多くの一般の方も行きたいエリアとなればよいと思います。



*辻村 善徳 25期

ワッペンの特、賛成です。今でもどこかですれ違っているかもしれませんが、あのキスリングでないでしょうか…。できればテントもそれとわかるものがあるといいですね。

*金山 裕之 25期

御苦労様です。遅くなり申し訳ありません。

*藤田 章三・靖代 26期

毎回ていねいな通信ありがとうございます。なにごぶん遠隔、多忙のため参加できません。申し訳ありません。

*外村 雅治・美佳 26期・27期

*益田 珠美代 26期

登録しない…です。申し訳無い。です。

*土井 泰彦 28期

28期佐原君の連絡先をお知らせします。いつもお疲れ様です。ありがとうございます。

*加藤 薫 28期

*北村 久秀 28期

諸般の事情により不参加とさせていただきます。御成功をお祈りします。

*中道 正樹 29期

4月末に結婚を控えているので、今回は登録・作業参加とも見送らせていただきます。

*寺島 祥文 33期

*宮崎 耕輔 35期

就職で、福岡県北九州市に配属となり、金沢から遠く離れてしまったため、今回はご辞退したく、ご了承のほどお願いします。

寺崎さんからの返信

昨年春の毛勝山遭難の折には、舟田さんを始め、金大ワンダーフォーゲル部OB、現役の方々に色々御面倒や御心配をおかけし、申し訳ありませんでした。あらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。私も元気で頑張っております。

(中略)

さて、私の方は遭難後しばらく山の方は謹慎しておりましたが、最近女房や友人との低山歩き、スキー、キャンプなどを再開しました。女房は以前には絶対といっていたくらい山には行きませんでした。が、搜索活動で何度か山麓に入るうちに山の魅力が理解できるようになったのか、何度か私と同行しています。

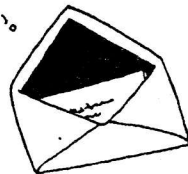
そうそう、それから6月2日(日)に念願の毛勝山に登ってきました。遭難後「寺さん、いつか一緒に登りましょう」と言ってくれる友人が沢山いて、その連中と登りました。

6月2日は奇くも1年前に救助された日で、それだけに登頂の気持ちは、また格別なものでありました。当日は雲一つない快晴で、360度の眺望を堪能しました。特に本当の毛勝山山頂から見る大明神山には感慨無量なものでありました。パーティーは健脚の若い人ばかりでピッチが早く、最近高い山に登ってはなく、下界でのトレーニング不足の身としては、登り、降り共つらく、アゴを出した山行でしたが、今もまだ残っているフトモモとフクラハギの痛みが、一年前の毛勝山(?)と一昨日の毛勝山をほろ苦く思い出させてくれます。

これからも安全第一に登山を楽しんでいきたいと考えています。

金大ワンダーフォーゲルの皆様方にも是非よろしくお伝え下さい。

--- (後略)





第1回OB小屋作業 (実行記録)

(_____はダムへ車を入れる人)

5月11日(土)

*午前6時半 工学部前集合 登山道補修A隊 (BH-新道-高三郎-旧道)

CL岡部 伸一(18期) 上馬 康生(15期) 山上 正彦(16期)

島林 仁司(10期) 新道700m付近まで。あと釣り。BH戻る。)

(椿川 作業道具を積んでダムサイトへ。道具配布後、B隊に合流。5時まで作業後、帰宅)

*午前8時 工学部前集合

登山道補修B隊 (BH-旧道-800m付近まで 5時にBHへ戻る)

CL椿川 利弘(18期) 坂尻 忠秀(15期) 舟田 節子(15期)

田村 昭夫(3期) 個人装備搬入にダムとBH間を往復)

小屋作業本隊 (BH周辺、階段補修)

CL辰野 隆義(13期) 吉田 穂積(13期) 吉本 良治(13期)

北川 隆次(16期)

*個別入山

梅 典雅(19期) 梅 陸美(21期) ダムからBHまで資材運搬後下山。

清水 重仁(16期) 中野 淳一(16期) 出島で本隊と合流。B隊に参加。

5月12日(日)

*日帰り隊 金沢駅8時発

CL鳥越 伸博(23期) 南 梅子(13期)

*個別入山 大島 良治(13期) 10時BH着



新道、旧道とも作業可能区間(後は残雪の下で不可)は11日で完了。12日は、全員でBH周辺を整備。階段補修、水場確認、小屋周辺伐開、整地、残材区分、焼却。ベンチ作り。作業道具の跡始末。小屋の掃除。

10時半 早帰り組(島林 山上 清水 中野)下山。田村---ダム事務所へ挨拶

2時 全員下山

*お食事

買い出し、食当CL舟田

(13人分)

11日(土) 夕食

岩魚の骨酒(島林さんの釣った大物)

天麩羅(たらの芽、こごみ…現地調達) うど、薩摩芋

カタクリ、ワサビも揚げて食べてみた

味噌鍋 白菜、ネギ、豚肉、味噌 その後煮込みうどん

他…花ワサビの醤油漬け、ウドのきんぴら

蛸のワサビ醤油、ホタルイカとワカメの酢味噌和え

イラクサいため(上馬さん推奨の なかなか食べられない山菜)

おつまみ多数 お酒も多数



12日(日) 朝食

ご飯 味噌汁(ネギ ナメコ) 丸干し鰯 梅干し 漬物 ふりかけ

昼食 パン きゅうり ハム ウィンナ チーズ マヨネーズ 紅茶

*BH常設作業道具

両刃ノコ 2	アナ引ノコ 7	ナタ 5
金槌 2	カケヤ(中) 1	大槌 1
鍬(ステンレス) 2	剣コップ 2	スコップ 2
ツルハシ 1	ペンチ 2	
ステンレス針金 60m	釘 大 中 小	
ポリバケツ 3	タッパーウェア(中3)	砥石 2
草薙鎌 5	ローソク 20	トレペ
荷作りヒモ	赤布	スプレー錆止め
鍋 4	やかん 1	
包丁 2	お玉 2	まな板 2
携帯コンロ 2	ガスボンベ	救急箱
背負子(辰野)	トランシーバー(舟田)	
チェーンソー(田村)	カメラ(上馬 舟田…補助金報告書用)	

差し入れ—— ありがとうございました ——

3期 高島 誠様 金封	5期 稲葉 正己様 金封
10期 島林 仁司様 金封	13期 辰野 隆義様 罐ビール
15期 金井 澄様 ビール券	16期 清水 重仁様 罐ビール
26期 山口 雪枝様 ジョニ黒	

山小屋酒場の提案

13期 辰野 隆義

昨年秋の「月見の宴」で久しぶりにベルクハイムに行きました。その時の印象として感じたことは、今のワンゲルにはあまり必要のないものなのだろうか？という疑問と、寂しい気持ちでした。

私達が現役の頃、丁度大学は70年安保の最中で、大学はロックアウトされ、当時ノンポリだった私は時間を持て余し、よく仲間を誘ってはベルクハイムに泊まりに来たものでした。そんなこともあってなおさら、ベルクハイムへの思い入れがあるのかもしれません。

最近の現役はきっと忙しすぎるのでしょう。だから、ベルクハイムに目を向けてくれないし、もっと他のことで目一杯なのだろうと思います。別にそれを責めるつもりはありませんし、それが時の流れなのかなと思います。

でも、ベルクハイムはなくしたくない。もっと言えば、より良くしたい。そして、ふと思いつ出した時、現役、OB関係なく気持ちを休める場所であって欲しいのです。そのためにもベルクハイムをもっと整備し、食料とシュラフだけを持って行けばいつでも泊まれるようにしたいと言うのが目的なのです。

また、もう一つ感じたのは「月見の宴」の時、私達は「愁心の碑」を再築するという作業をしました。確かに、準備や運搬などきついものがありました。でも、自然の中での作業はとてものすがすがしいものがあり、楽しかったのです。ただ予定された行事に乗っかって、一晩泊まって帰るだけではなく、何かに参加するという満足感なのかもしれません。

こんな事もあり、ふと思いついたのが、この「OBで山小屋作業をやろう」と言うことでした。そのための前提としては、「決して力まず」だと思っています。



「無理せず」「楽しく」「迷惑かけず」をモットーに長続きできればと思います。

こんな単純な趣旨ですが、もしご賛同願えるならば、今後ご都合の良い時にいつでも参加して下さい。

この会の名前をいつまでも「山小屋リフレッシュ会」（仮称）としておくわけにもいかないので、言い出しっぺの私が

「山小屋酒場」

副題は「お代はあなたの労働です」

という名前を提案したいのですが、いかがでしょうか。別の提案があれば出して下さい。

さて、これからの作業予定ですが、以下のことを今後時間をかけて少しずつやれればと思います。（思いつくままに列挙してみました。）

- 1) 川原からの登り道の整備
- 2) 小屋周りのゴミの撤去
- 3) 便所の増築
- 4) 水場の整備、増築
- 5) 靴入れの新設
- 6) 道具収納箇所の新設
- 7) 囲炉裏の再築
- 8) かまどの再築
- 9) テントサイトの確保

- 10) 屋根のペンキ塗り
- 11) 傷んだ箇所への補修
- 12) その他

この中から今回は1)、2)を中心に、とりあえずやってみようということになりました。全部やれなくてもいいんです。とにかく気楽にやりましょう。

この中でも特に3)、4)は大事なのですが、簡単にはいかないと思います。今回は下見だけですが、しっかり設計しないと実行には移せないでしょう。また、現役の助けもいると思います。

以上、この会の趣旨と目的を、何の脈絡もなく羅列してみました。

要は、「楽しくお酒が飲めれば」それだけです。

(編者注；上記は、第1回OB小屋作業の現場で配布されたものですが、OB会報もこのままで結構とのご了解を得ています。)



第 1 回 O B 小屋作業登山道補修隊報告

参加メンバー A隊----島林(10期)、上馬(15期)、山上(16期)、岡部(18期)
B隊----坂尻(15期)、舟田(15期)、清水(16期)、中野(16期)
椿川(18期)

※ 2日目(5月12日)は小屋作業隊といっしょに小屋周辺の整備を行ったので省略いたします。また私(岡部)はA隊に参加した為A隊の行動を中心に報告します。

A隊(登山道偵察)

その日のうちに高三郎登頂、BH帰還ということで、出発を早め(6:30工学部集合)にした。(現役時代ならたいした日程ではなかったと思うが、今では・・・) ダムまでのアクセス道路の変貌ぶり、またダムサイトに新たに出来たコンクリート構造物のヘリーポート(後で上馬さんより教えてもらった)にびっくりしながらBHに向かう。ダムサイト沿いの道は思ったより整備されていて(山菜採りの人が多いせいかな?)とても歩きやすく感じた。途中高桑君(19期)の碑に一礼し、先を急ぐ。9:25頃、15年ぶりの我がBHに着く。建て替えて20年も経つと言うのに、どしりと建っているBHに、『久しぶりに会いに来たよ。』と声をかける。

これからが偵察隊の本番と再び気を引き締めて出発。新道登り口より、いよいよ開始。ここもダムサイト沿いの道と同様よく整備されていて、また、赤布等の目印も数多く付けられていて、作業の必要性はあまりない様に思われた。足に自信のあるOB精鋭隊も久しぶりの新道の急登にはアゴが上がったが、イワウチワ、ショウジョウバカマなどの山花に励まされ、登り続ける。(10期の島林さんはこの時点でBHへ戻り小屋作業隊と合流することとした。)750m付近より残雪が次第に多くなり、登山道偵察が出来ない状態となった。(10日から2週間ほど遅れていると思われた。)成ヶ峰分岐まではロボット雨量計が有るということで、作業の重点地区からは外してよいと思われた。

この分岐からクラコシ尾根に入ってから道は一変してブッシュ、ブッシュ。途中枝払いをしながら登ることを試みたが、作業も中途半端で頂上にも登りたいので、1時間程で切り上げた。昼寝岩付近の尾根の痩せ方は物凄く、登山道ごとコシアゲ谷に滑り落ちている所が数箇所あった。分岐へ着くと一面の雪、登山道偵察をあきらめて、高三郎山頂を目指す。

やっとの思いで山頂に着きあらためて雪の多さにびっくり、我を忘れて、『ボー』としているうちに雨が降りだしたので、帰路につくことにした。分岐直後のガレ場の荒れ方は激しく、ロープを張ってはいるが、登り降りには苦勞する所、補修作業には頭を痛めそうな所である。1059

ピーク、951ピークとも雪で覆われていて道は見えず、800m付近で修復隊の跡を発見した。以後作業の終わった歩きやすい道を下ることになるのだが、足膝が思うようにならず、転ぶこと度々、足腰の弱体化を痛切に感じるばかりであった。

倉谷川に下りたところで補修隊と会い、久しぶりの再会を確かめつつ、いっしょにB Hへ向かった。

B 隊（登山道補修）

小屋作業本隊といっしょに、食糧、小屋作業の道具、それに今夜の宴用のアルコールと老体には酷なボッカとなったが（？）、無事昼前にB Hに着く。昼食をB Hでとって、旧道登り口へ向かう。手には鎌、ナタ、ノコギリを持ち、慣れない仕事に戸惑いながら、それでもなんとか750~800m付近まで進む。ここからは登山道が雪で覆われていて作業にならないので、今回はここまでとし、作業を終了した。（休憩のビールがとても美味かった。）倉谷川の河原まで降りたところで、後から降りて来た偵察隊と合流、いっしょにB Hへ向かった。（18期椿川の報告より）

今後の小屋作業（登山道補修）

登山道整備は継続性が必要です。平地のアスファルト道の様に永続に使えるものではなく、自然主体の山の一部を我々人間が山道として借りていて、それを毎年々手入れするという考えで行わなければいけないと思います。

ワンゲルの小屋作業の意義について

1. ボランティア 活動の一部として-----一般登山者の利用の便を図る
2. 自分達の活動区域を明確にする。-----犀奥、白山は金大ワンゲルの主な活動区域（地域性）
3. ワンゲルの活動をアピールし、その社会的存在価値を認めてもらう。

（少しおおげさかも知れませんが。？）

最後に、現役部員、OBも交えた小屋作業を毎年続けることが必要であることをもう一度強調しておきます。（文責 岡部伸一）



OB小屋作業

15期 舟田 節子

「決心した。小屋番になる」の返信…私は楽しいジョークだと思っていた。小屋作業参加希望者に最後の連絡を送り、一段落。と、田村さんから

「先に、家財を送ったので、預かっておいて下さい。」

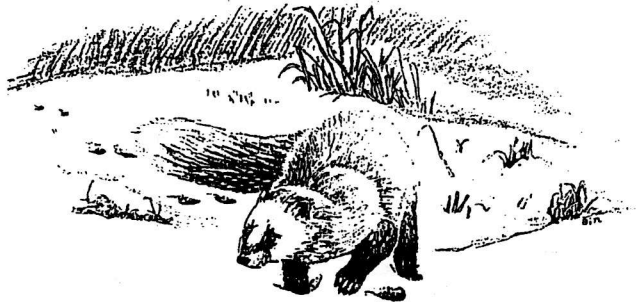
の電話。まさか、まさか…。コンテナが届く。中は、チェーンソーに、発電機かわりのモーターに、投光器？？前日さらに海外旅行用のトランク！！この企画は田村家を破壊したのではないのだろうか？彼のいわくに奥様は

「こんなうれしいことはない」

とにこやかに送り出して下さったのだそうである。私は、ワンゲル教祖様を、変人だの、奇人だの…そんな恐れ多いことなど口にはできない。だって、どの発信に対しても、即達筆で返信を下さる方だもの。そんな単純な事が、いかに「心」がなければできないことか…。だから、？？や！！がわきあがる度に、かえって常識を厚化粧のようにはりつけてしまった我が身の方を反省させられてしまうのだ。

ともあれ、11日の朝は来た。大先輩は小立野キャンパスでゴロ寝されているはずだったが、結局はちょっと寄った昔の下宿のおばさん（つまりは、おばあさん）と盛り上がってしまったそうで、二日酔い気味でご登場になった。

頂上への偵察も兼ねたA隊（CL18期岡部、10期島林 15期上馬 16期山上）は約2時間前に出発している。二階建てのヘリポートのできた犀川ダムで、運ぶ荷物を並べてみると、作業道具に炊事関係、食料…にコンテナ、トランク。何か背を越す大荷物になってしまい、OBの篤志も現実の重量には負けそー！であった。ちょっとたじろいで、「そのあたりのボートは？」と浮気を考え、実際SCLの18期椿川さんが、ダム管理事務所に入っていった。と、所長は彼



のよく知っている方で、OKだったが、あいにくとボートはみな出払っているとのこと。観念して担ぐ…。

今年は雪解けが遅い。これまで見たこの時期の高三郎では一番に白かった。A隊は難渋しているか？それとも楽勝になってるものか？はるかな稜線を目で追ってみる。道の方は春先だから、まだブッシュがでていない。柔らかな土の匂い、優しく揺れるキクザキイチリンソウなどの可憐な花々。そして湖面の向こうの山々は新緑をはじめ様々の色相の緑が重なり、盛り上がりだばかりだ。何も夏までじっと北アを待っていることなんかない。残雪と花の世界は、麓から始まっていくのだ。

見慣れた赤い吊橋の手前で一服。出島からのガレ場がどれだけ崩れているものかと思ったが、昨秋と変わらず、ほぼ落ち着いたとみなせそう。ここで16期清水さんと、中野さんが追いついてくる。清水さんは今朝は滋賀県の実家から出てきたそうだ。その出発時間が、県内穴水からの坂尻さんとたいして変わらなかったのにはびっくり。卒業以来の中野さんが、寡黙なのは昔のままだと思いかや、彼の方は（手記によれば）この時、皆の余りの変わりように声も出なかったというのが本当の所だったらしい。

（事務局長の方は、この苛酷な仕事柄、25年分は瞬時に記憶映像を修正できるようになりました。20年、30年分などもメモリ増幅しておりますし、誰と誰が同期であるかなどのデーターも豊富です。よって、参加にあたり誰も自分を知

らないのではないか？判別してもらえないのではないか？の懸念は不用です。）

倉谷部落に入った所で、引き返す梶さん夫婦に逢う。午後から町会育成委員の行事があってとボッカだけやってくれた。小屋にはA隊のザックが入っていたそうで、あちらも予定どおり行動している様子。

小屋にザックをドウと降ろし、昼食。サブザックにカメラ、ノコ、カマを入れて、B隊（CL 椿川 坂尻 舟田 清水 中野）発。

道々思い出してみた。現役時代、私はちゃあんと毎年小屋作業に出ていた。あの頃は「強制」以前の「当たり前」のことで、「それは強制なんですか？」と訊ねさえもしなかった。やっぱり皆単純だったんだな。それに、毎度飯炊き女だった。ヘルメットをかぶってクリを取りに行き、その皮をむくだけで明け暮れていたような…。本当の実働部隊なんて初めてで、それをしかもOBになってからやるなんて、ほんとに何ていうのか、アホ極まるといったあたり。皆もそうみたいで、アホ同士が集まっている楽しさに朝から浸っている。

BHへ引き返す島林さんに逢った。新道の雪が出てきたあたりで引き返し、イワナを釣っていたとのこと。見事な戦果を見せてもらった。「BHには小屋の補修隊（CL辰野 吉田 吉本北川）がいますから」と交差したが、こうやって高三郎の麓で、往来してるのがワンゲル関係者ばかりというのが、また楽しい。

旧道上り口に着き、作業開始。ススタケも私の半端な力でとなると、カマより鋸の方が刈り易い。カメラというのは、作業前、作業後の比較写真を撮るため…だったのだが、実働をしない監督ならともかく、作業に夢中になると忘れてしまう。早い話がほんの上り口で撮っただけで、後は遅れをとり、皆の健闘ぶりは撮れなかった。OBでも修復作業に出ようっていうのはバワフルぞろいでも登りながら作業ってのは馬

力のごまかしようがない。しゃあない、より美しく…に方針を変える。鉋の斜め切りを「おお危ない！」と地表すれすれ、まっすぐに切り直したり、これから小枝が伸びる分も計算し、より控えてもらうべく補正をしていった。

そのうち私は、先行部隊が「男」ばかりであることを思いしる。彼等は樁を切っていないのだ。「きれいだから」の寛容が将来の禍根になることが、彼等には分からないのか！「だから男っちゅうのは…」バッサリ。「そういう半端



をやるから」バッサリ。「ヤブになるんよ」バッサリ。そのうち、枝の3-4本を切るより、根元からバッサリの方が効率がよいと気づく。たわわに葉を茂らせた樁の根元は意外に細いのだ。「こんな細い足して」バッサリ。何か根拠が怪しげになってきたみたい…バッサリ。

もう徹底的に遅れ、どうせ引き返してくるんだからと、こだわりだけで作業を続ける。それでも白雪姫ならぬユキツバキちゃんを抹殺する継母の太腕もそろそろ痺れ、樹相も変わってきて残酷物語もおしまい。あ、ポツツときたかな？と思ったら、皆が降りてきた。800mから上は雪で仕事にならず、A隊を待っていたが、もう引き上げ時刻に近くなったからとのことで、その雪で冷やしてあったビールを出してもらった。おいしい！そう、現役だった頃は作業してすぐビールなんてなかったよ。真面目一途だったものの。

おなかもキューと痺れて、下山する。手かかりにする枝もないと自賛しながら、河原に降りつく。あたりにはおいしそうなコゴミが茂っていて、坂尻さんが手慣れた鎌で刈り取ってくれた。と、A隊が降りてきた。今回のためにわざわざ軽登山靴を買い直した岡部さん…ということは、今もやってる白山3時間半往復はズックでやっていたんだ！やっぱり卒業以来の山上さ

ん…威厳をつけるのに口髭はやしたんだ！そして同期の上馬さん…それこそ同期で顔を会わせる機会が多いけれど、山で会える嬉しさは格別。ワッと話に花が咲く。彼等も700m付近まで作業しながら進み、そこからは雪になったので登山に専念したが、頂上は2時になったようだ。トランシーバーは間に合わなかったのだが、雪の上に足跡が残っておりB隊が引き返した地点はすぐ分かったそうだ。きれいに刈り開けてあるのにびっくりしたと言ってくれたので、私はうんうんと満足していた。

小屋に帰りつく。階段が見事に補修されていて感激。そしてバケツの中の雪で冷やされていたビールがまたおいしかった。ここで椿川さんがお帰り。忙しいのに、SCLということで、日帰りでもフルに作業していつてくれた。

明るいうちに少しでも…と夕餉の支度にかかる。小屋まわりに伸びていたタラの芽も天麩羅の材料に加わる。みんなあいかわらずよく働き、ツーカーで、パッと連携動作ができていくのは本当に気持ちがいい。先のコゴミ、タラノ芽、ウドノのトンボ（先端）、サツマ芋を次々に北川さんが揚げていく。イワナ釣りの次には植物採集もやっていた島林さんは、上馬さんにお伺いをたてては、揚げてみて試食。イワナが焼き上がり、3べん間酒を回した後で身はつつ

くもんだ…とか、OBになってからの雑学がワイワイ飛び交う。ウドのキンピラ、花ワサビの醤油漬け、ホタルイカとワカメの酢味噌和え、蛸のワサビ醤油と、持ち込みの肴も、BHの床狭しとばかりに広げられた。これまで知っている人はなかなかいないと、上馬さんのイラクサ炒めもさらに加わる。

山小屋酒場のいよいよ本番。ダムに残してきた荷物を無事回収してきた田村さんの、倉谷ユートピア計画に、島林さんの「いつかある日」の詩に感激して下さった話…。あとは昔ながらにダラ話で笑い転げて、定かに思い出せない…何か…清水さんが「天皇家の3人の子供。あれみんな美智子はんの生んだ子やと思いますか？」とやってたような…。昔の張談とは一味違う。皆、結婚もし、人の子の親になり、そして社会での矛盾にもいきあたりながら…何か皆、穏やかに優しくなった。思いがけず持てたこの時間をグラスの中にあるがしながら楽しんでいるような優しい雰囲気漂っていて…35周年にしろOB会にしろ、この小屋作業にしろ、どこかにまだわだかまりの残っている私にとっても、あよかったと素直に酔えた時間だった。とはいえ、朝からの重労働に徐々に沈没…。外は雨…。



12日。さわやかな雨上がりの朝。干鰯を焼き、ネギとナメコのみそ汁、漬物、梅干し。そう、OB小屋作業は、「真の贅沢を問う」がサブテーマなのだ。さて、今日は…。早帰り組もいるし、登山道の方は雪が出てくる所まではやってしまったし。16期組は小屋までの道の仕上げにかかり、他は小屋周りの整備と水場の下見にかかる。クマ笹を刈り開けると、やはり昔のテン場の跡が出てきた。あと二段、テン場にしてあったはず。持ち帰る予定だったホースもかなり重い。燃やしてみたらちゃんと燃えた。焼き場は穂積さんの担当。余熱で乾かしながら、次々焼却処理。その間に吉本さんは残雪を確保にいかれて、山小屋酒場は冷え冷えビールでメインテーマをまっとうする。

コーヒープレイクの後、早帰り組島林さん、清水さん、中野さん、山上さんと、ダム事務所に町着を預ける田村さんが出立。代わりに大島さんが到着。辰野さん、大島さんの水周りエキスパート組が水場を偵察。ついでに配管ルートをざっと刈り開ける。この時の岡部さんの猛然パワーは、さすが白山3時間半往復を納得させるものだった。私か例の如く「おお危ない」とスス竹の切り直しに専念していると、「このルートはちがう」の声。エーッ！仕方がない。ダイエットダイエット。

続いて南さんと鳥越さんが登場。昨秋月見の宴に参加しているトリさんは、登り口の階段にも、広々した小屋周りにも感激したそう。そう、やればできるんよ。

トリさんは午後8時頃に椿川さんから掛かってきた電話で、閉店ギリギリのスタンドへ走り、どうにかチェーンソー用の混合ガソリンを購入できたとのこと。坂尻さんによれば、チェーンの過熱止めにもう一種オイルがいるのだが…でも、田村さん一人で危ないものを使われても…何か皆曖昧な笑みを浮かべて黙ってしまった。

彼がもう一つ「下界」から運んできてくれたのが、昨日の夕刊で、小屋作業のことが意外に大きく出ていた。取材の経緯は拇さんから聞いていた（林さんから紹介された記者が、拇さんの所へ取材に来、写真も借用していったこと）。記事になっているのが、嬉しいような、しかし見にもきていない人が去年の写真で、でかでかの記事にしているなんて…いやはや。

昼食後はベンチ作り。木を切り倒し、皮をはぎ、切り込みをいれて脚部と組む込ませる。上馬さんが

「こういった小屋作業を自分達の代だけがやるのではなく、若手OBにも伝えていかなくては」と言い、私も同感だったが、強制できないものをどうしたら？



登山道は行政に押しつけているだけでは維持できない。その道を「愛する」人達が、継続して補修していくことが大事なのだ。私は百名山を走り回るような人達にも言いたいのだ。そんなに山が好きだったら、どこか一本の道でいいから整備してみませんか？それが山を愛することでしょう？

作業具を清め、錆止めを吹きつけ、床を雑巾掛けして出立。降りた途端、岩魚釣りにきていた12期大出さんに会う。そして引き返してきた田村さんにも。あの話好きな田村先輩、一人で大丈夫かしら？

楽しかった小屋作業は終わった。事務局長としては、早くも「次は？」「どうしたら？」が湖面のゆらめきと重なるのだった。

「山小屋酒場」雑感

10期 島林 仁司

BH周辺を訪ねたのは、30年ぶりだったでしょう。天候にも恵まれ、御蔭様で楽しい一時を過ごすことができました。BH行きのキッカケとなったあの詩…。そしてOB会をここまでもってこられた皆さんの情熱と努力に深く感動致しました。筆不精の私が一言感謝の気持ちを伝えようと思っているうちに先を越されましたね。（編者注；感想の原稿依頼があったこと）

写真と分県ガイド、有り難うございます。写真を見ながら読んでいとわくわくしてきます。膝が回復すれば、近畿外の山へもボチボチと考えていましたが、これで第一候補になりそうです。

「無心」となれば、時として意外な結果を得る。今回のイワナ釣りもその一例でした。アマゴなら天然ものを含めて釣ったことはあったんですが、イワナは全く初めて…。それに水面を見た時、こんな所にニジマスがおるんかいな…



？それにしてはきゃしゃだなあと思ったほどの奴。足下まで釣り上げた時、糸がプツン…。魚に夢中で竿は身代わりとなって水の中へ消えました。

その魚は皆さんの前でヒレ酒となって歓迎してくれました。身を呈したイワナに感謝して頂いたことは言うまでもなく、不必要な殺生をしなくてもすんだ事に思いを寄せて…。もちろんホタルイカ、花ワサビの醤油漬け、山菜の天麩羅等々。とても山奥の酒場とは思えないくらい豊かな酒の肴があつてのことでした。本当に濃やかな心遣いにつつまれた「山小屋酒場」でした。

ふと思ったこと

わずかな期間に生命を育み、思わず手をさしのべてみたくなるようなカタクリの花。御一緒した上馬さんに道々、山菜など草花を教えてもらった中に、そんなカタクリの花がありました。

以前倉谷の集落が残っていた頃は沢山あったが、それも樹木が茂れば消滅するとの事。学生時代に全く記憶がないので…当時を思うと残念です。BH周辺でやっと4株見つけたのに、それも葉を1-2枚残して天麩羅の材料にしてしまい心配です。

そんな訳で、BHの前でカタクリを育ててはどうか！と。もちろん自然保護上問題がなければです。上馬さんからカタクリの繁殖について



は聞いてなかったのですが、もし秋に球根を植える必要があるのなら、早速今秋にでも田村さんを訪ねる時に予定します。この時が現役の小屋作業と一致すればいいのですが、現在のところ、未定です。

それでは「愁心」の碑を心のよりどころとして、又の日を…。

お誘いに応えて

自然の中に溶け込み太陽のもとで息する

まるで田村さんのような姿を描いて
大阪の地で人混みの中で

うめき、ため息、ねたみ、うらみ、そしりを遠ざける日々…。
一体何を求め、何の為なのかもわからず
毎日を息する。

自らの息を感じる時、

ふと我が身をふりかえる
遠くの友、古き人、未知の世界。

1996. 5. 26



ホオジロ

酒を飲むコンディ ション作り

16期 山上 正彦

山小屋に入る楽しみの一つは、夜半まで酒を飲みながらよもやま話することなのだが…。入山する前の日は睡眠時間が3時間という強行軍、おまけに高三郎のピークまで偵察に行ってきたため、疲労困憊、フライングして酒を飲み始め、いつのまにか高酔。目が醒めたらもう11時近くで、皆寝支度。小生一人目がバッチリではしょうがないので、再び酒を流し込んで、シユラフにもぐった。

次回こそ十分な睡眠をとって、仕事量も程々にして、良好なコンディションで酒を飲むぞ。つまみも牛スジか何か作って持って行こうかな。変なものを食べておなかを壊しても、大丈夫。

小生が診てしんぜよう。ただし15歳以下に限る。

《編者蛇足…上記は精神年齢を含むと拡大解釈をしましょう。》

* 13期 吉田 徳積

BHにたどりついてまず一杯、昼食時にまた一杯、小屋作業を終えてはまた一杯…と、たっぷりの休憩（私だけかもしれないが…）をとりながらも、一応BHへの登り口の整備を終えることができた。

夕食は舟田さんの手によるタラの芽の天麩羅はじめ色々な山菜料理、はたまた島林さん即席手製の釣竿による岩魚の骨酒など、今まで経験した事のない「味わい深い」山小屋作業でありました。皆さんに感謝します。

山靴も、ニッカボッカも、ザックもどこかへいつてしまったけれどシュラフだけは宝物のように大事に保管してあった。今、そのシュラフの中で約20年ぶりのベルクハイムの夜を迎えようとしている。周りの寝息を聞きながらシュラフの中にうずまっていると懐かしい思い出が次々に蘇ってくる。雨で何日も沈殿させられた夏合宿の聖平、その沈殿明けの朝に峠から息を吞んで眺めた富士山、寒くてガタガタ震えて夜中に何度も目を覚ました春のシゲジ、そして何時も馬鹿でかつこ悪くて気のいい仲間達。もっと昔のみんなに会いたくて、昔の馬鹿な自分に戻りたくて、ずずーっと深く潜り込むタイムマシーンの中。

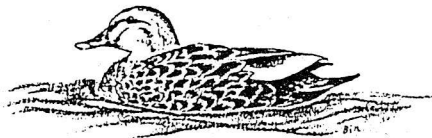
突然の清水からの電話に条件反射的に「俺も行く」と答えてしまい、週末は山小屋作業に参加することになってしまった。だいぶ前に案内文書が来ていたのを思い出した。どうしようかと迷っているうちに返事をだすのを忘れていた。そのうちにすっかり記憶から消えていた今回の催しへの参加が電話一本で決まってしまうのだから相変わらず単純な男だ。さあ、それからが大変だった。卒業以来、山から遠ざかっているため山道具が何も無い。靴はどうしよう、ズボンは、ザックは。シュラフだけは愛妻(?)がクリーニングに出して大事に押し入れに仕舞っておいてくれてサンキュー。靴は通勤用に買った980円のテニスシューズ、服は会社の作業着、ザック代わりはディスカウントで1980円で買ったアルミの背負子という不格好な姿で出かけることになってしまった。それにしても前の日の夜、興奮してなかなか寝付けなかったのは私だけだろうか。

「こんにちは」と挨拶したけれど何かおかしい。遅れて出発した清水と私は休憩中の先発隊に追いついた…と思った。でも知らない人達のような気がする。向こうも何か不思議そうな顔をしている。一瞬、焦ったがその中によく北川の顔を見つけて一安心。20年の歳月は恐ろしい。美男も美女もこんなに変わり果てた姿になろうとは。

昼食後、夜の酒代かせぎの一仕事。ナタと鋸を腰にぶら提げて旧道整備へいざ出陣。急勾配に喘ぎながらもナタを振り回し、鋸を引きまくりの縦横無尽の大仕事、久し振りに良い汗をかいだ。800m付近からはまだ雪が残っていて作業ができず今日の仕事はここまで。天然冷蔵庫で冷やした極楽ビールの味は格別だった。

山の朝の空気はやっぱり美味しい。夜来の雨も上がり天気は回復の兆し。「よし、行ってくるか」とスコープを肩に、ロール紙を手にとって久しぶりの雉撃ちに出かけた。倉谷川の流れを前に、前方の山を眺め、朝日を浴びながらの雉撃ちは一発大狸だった。

ダムからの高三郎を何度も振り返って眺める。今回は残念ながらその頂には立てなかったけど、無事なおまえの姿を見て安心した。秋には必ずまた来るからその時まで達者でな。俺もがんばるよ。



*

13期 南 梅子

25-6年ぶりのBH。懐かしさと不安の入り混じった複雑な気持ちで山小屋酒場に申し込みました。もう随分と歩く生活から遠ざかっており、道も相当荒れていると聞いていたので、歩くのはダムからではあっても、やはり不安でした。

案の定、一人ではとても行けない所を、人間複数になれば心強いもので、同行して下さった鳥越氏のおかげでたどりつけたようなものです。手とり足とり導いて下さったからこそです。

(こんなおばさんにもかかわらず…)

前日の雨で道はぬかるんでいたものの、よい天氣に恵まれ、ダム湖の青緑や、若葉の木々を抱いた山々は20数年前と同じで、目を楽しませてくれました。

BHの登り口の階段には驚きました。丁度よい歩幅高さで上り易く、前日のご苦勞を感じながら、一步一步踏みしめ上りました。

今回は日帰り参加で、BHにいたのはほんの3時間足らずでしたが、何よりよかったのは、ワンゲル仲間の雰囲気浸れたこと…。初対面のOBの方とも、もう何年も前からの知り合いであるような、ワンゲル独特の空氣に触れられたことでしょうか。

しばし現実の世界から離れ、タイムスリップしたような時間を過ごし、タイトルの仮称どおり「リフレッシュ」させていただきました。お世話下さった役員の皆様、ありがとうございます。

*

13期 吉本 良治

わずか2時間余りで25年前にタイムスリップできる場所、それが我がBergheimである。20数年ぶりに訪れた昨秋とは異なり、今回はダムサイトからBergheimまでの道のりは昔のように軽やかであった。

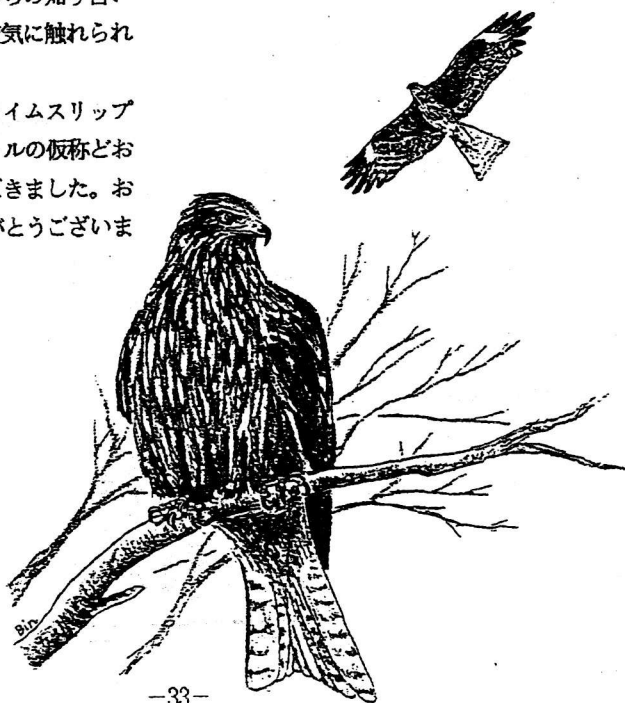
昨年は例年以上の積雪であったため、修復した「愁心の碑」の狀態が気掛かりであったが、無事であり、ひと安心した。

好天に恵まれ、小屋作業は順調。それ以上に苦勞して荷揚げした差し入れのビールは最高の味であった。鮮やかな新緑、労働の汗、採れたての山菜、冷えたビール。まさに「山小屋酒場」の最高条件であった。

秋には「カサカサ」と落葉を踏みしめて歩くことができることを楽しみにして、また参加させて頂きます。それに秋の味覚と「お酒」を期待して…。

そして数年後には、昔のように「かまど」で飯を炊き、「囲炉裏」を囲んで語り明かすことができることを夢見て…。

氣長にのんびりとやりましょう。



*第1回OB小屋作業に参加して

23期 鳥越 伸博

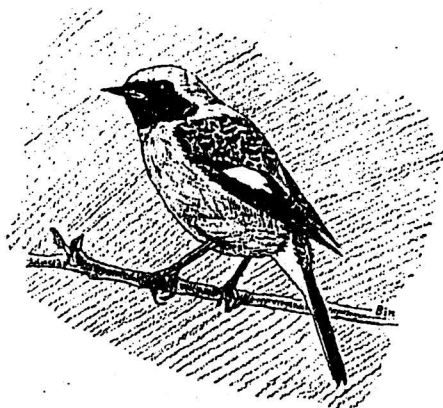
2日目だけの参加で、途中で水上谷の増水等もあり、BH到着が11:00頃となったため、ほとんど作業らしきものもせず、今回の記事が載っている新聞と田村さんがお使いになる予定のチェーンソーの混合ガスリンを持っていっただけでしたので、感想といっても「ウン」といったところなのですが。

ただ、逆に言うと、今回の私のような参加の仕方でもどうぞと認めてくれる、ほのぼのとした雰囲気の中で気長に続けていけたらいいんじゃないか...というのが、率直な感想かもしれません。

こういうことを書くと、上の方の方々からは大変なお叱りを受けると重いますが、少なくとも私達(23期)ぐらいから下のOBにしてみれば、BHというのは既に出来上がっていた存在であり、先輩方が全て1から作ったのだよと教えられても、自分達という愛情みたいなものに今一つ欠けてしまうという面は心のどこかにあるような気がします。

ですから若手(?)OBの一個人的な希望としては「BH修復」「高三郎登山道整備」を大上段の目標ではなく、OB会の活動の輪を広げる一手段として位置付けていただけたらなあと勝手ながら思います。

私自身としては楽しい集まりでしたし、今後とも都合がつく限り参加したいので、よろしくお願いします。



北国新聞 夕刊

平成8年(1996年)4月3日 (水曜日)

(2)

昨春、仲間と高三郎山へ登るため、犀川上流の旧倉谷にある小屋に泊まった。夕食に付近で採ったカタハヤウドといったなじみの山菜に加え、ウバユリの茎もスライスして出した。実は自分自身、初めて食べたのだが、恐る恐る口に運んでいた旨の評判も上々。サクサクしてぐにびったりの食感であった。

山菜考



数年前に地元の出版社から出した「山菜・木の実ガイドブック」も、そういった趣旨で作った。

梅 典雅
(すかんぽの会・県環境政策課専門員)

の時代にはよく食べられたというから、(存在)の方も多いはずだ。近頃は人気のある山菜は乱獲気味というところもあり、これらの忘れられつつある食用野草にも親しまうようになっていく。

たものだ。たゞ有名な山菜でも希少なものは省いたかわりに、身近な野草を多く取り上げ、全部で百種以上を紹介している。あまり知られていない山菜を正しく識別し、創製と主夫でおいしく食べるとも一興であろう。

もちろん、植物の生育にダメージを与えないに変わりはなく、人間の食物のほかに他の生物の命を奪うことには得られないことも事実である。春を待つて懸命に伸びようとする若芽を折り採るときに感ずる小さな心の痛みといったような感性を、今、とても大切に思う。

(金沢市)

ワイン酒多飲日記

(シュタイン)

3期 田村 昭夫

1996 5/12 (日) 晴れ、小雨のち晴れ

(就任の辞)

今日からBergheim小屋番となりました3期の田村です。この倉谷が「安らぎの里」になることを望み、残りの人生をこれにかけます。

5/13 (月) 朝のうち雨、のち晴れ

「カメ虫の命と人間の命の優劣について」を半年かけて考えてみたい。午後金沢の町に出かけ、村田さん(7期)、小林君(3期)に会う。小林宅で泊まる。

5/14 (火) 晴れ

午後3時半帰小屋。

5/15 (水) 快晴

4時起床。ワイン飲む。飯食う。のち洗濯。炭焼小屋跡調査(数カ所確認)。午後金沢工大電気科3年室井宗晴君小屋を訪れる。岩魚0匹。

5/16 (木) 快晴

靴置台製作。岩魚1匹。瞑想。

5/17 (金) 快晴

Chain sawの作動せず。分解修理必要。岩魚0匹。

5/18 (土) 晴れ

午前、金大文学部鹿野教授(金大山岳部顧問)夫人、小屋を訪れる。金沢工大学生室井君来る。7pm頃大出徹氏(12期)BergHeim到着。3人でdrunken und schlaff。

5/19 (日) 快晴

大出氏、室井君高三郎に向かう。(5:30 am) 午後岩魚大小2匹持参。大をサシミに小を骨酒



に。鹿野夫人4pm頃小屋を再訪す。イタドリのお煮物、ナツメ差し入れあり。

5/20 (月) くもり時々雨

酒と素粒子論。クォークが究極とは思えない。超磁理論でクォークを説明できれば究極理論の完成である。正午ダムサイトまで出。舟田女史にTel。夜来雨漏りあり。

5/21 (火) 晴れ

聖書を読む。午後金沢へ。舟田女史に会う。夜半雷雨。雨漏り2ヶ所らしい。

5/22 (水) 曇時々雨

素粒子論を学ぶ。午後松田樞六著「うるしの話」を読み、感銘する。

5/23 (木) 朝晴れ のち曇 午後晴れ

本日から日本酒を主食とする。1食100cc。但しパン等は副食とす。ワイン、ウィスキーは適時飲む。午前9時、便所4本柱建前。午後ダムサイトまで。途中危険箇所2ヶ所に安全ロープ。岩魚0匹。

5/24 (金) 晴れ時々曇のち晴れ

便所建設開始。午後ダムサイトまでの道危険箇所の足場切り。4時pm帰小屋。飲んで寝る。

5/25 (土) 晴れ

正午頃、理学部生物学科植田先生以下17名小屋到着。午後学生達が山にでかけている間に、便所建設完了。夜、皆で廃材でキャンプファイヤー。

5/26 (日) 晴れ

午後2時半学生達小屋を去る。又静かさが戻る。

5/27 (月) 晴れ

小屋まわり整備。洗濯。散歩。

5/28 (火) 晴れ

6時起床。金沢の街まで出る。途中山道整備。食料購入。葉書出し、ワングル部室訪問。生物学科表敬訪問。どうでもいいが、大学を何故あんな山中に移転したか。日本一不便な大学と言われる由縁である。ワングルと山岳部が同居しているのもおもしろい。いっそ昔のように「山の会」に戻したらどうか。新名称は「金沢大学山野漂泊の会」なんてのはどうだろうか。ドイツ語ならさしずめKanazawa Universität Bergsteigen und Wanderung Velein(K.U.B.W.V.)とでも云うところか。

5/29 (水) 晴れのち曇

ダムサイトからBerg Heimに至る道の危険箇所の足場切りやロープ張りほぼ完了。今後とも継続して修復は行っていく。約20日間の山小屋生活から感じたこと、それは今、日本人の多くが捨て去った山村生活にこそ至福の生活があるということである。21世紀の日本人の生き方としての提言だが、若者は海外へ出て発展途上国の海外協力隊員となり、現地の人と結婚して彼の地に骨を埋めること、定年を迎えた人達は山村に戻り、父祖の地を復興させること。これが日本人として活力を取り戻さす一策と思うか如何に。



5/30 (木) 晴れのち曇

ダムサイトまで電話を借りに行く。午後素粒子論を学ぶ。私の思い上がりか知らないがクォークは超磁で説明できる気がする。アインシュタインの式 $E=mc^2$ も面倒な相対生原理を使わなくともエネルギーの式から誘導できる。とすると俺は宇宙をつかんだことになる。時間は宇宙の表面積である。ニュートンは時間をアブリオリなる直線(0次元)と考え、アインシュタインは時間を距離(1次元)と考え、田村は時間を面(2次元)と考えた。つまり時間 t は $4\pi r^2$ である。但し r は宇宙半径。

5/31 (金) 曇

カメ虫と人間についての問題の解答が出た。カメ虫を人間が嫌うのは臭いからである。故にこの対抗策として人間がカメ虫に嫌われる匂いを出せばよい。つまり小屋にカメ虫の嫌いな匂いのする塗料を使うことである。今日も無為な至福の一日が暮れる。

6/1 (土) 曇

宮沢賢二の「雨ニモマケズ」の最後の方の一節「ヒデリノトキハナミダヲナガシ、寒サノ夏ハオロオロアルキ」が今までその意味がはっきりしなかった。それは百姓の気持ちになると云うことだ。早魃にならぬかと心を痛め、冷害にならぬかと心配することだったのだ。俺には百姓の気持ちは今までわからなかった。工学なんて学び、プラスチックの物性なんてばかりやっていたからだ。BHに住みつきはじめて、山村の人達の心がわかった。人生にはわからないことが多い。その立場になって初めてわかるものだ。

聖書マタイ5章3節も日本語の聖書では「心貧しきものは幸なり。天国は汝のものなればなり」もどうもしっくりしなかった。しかし英文の聖書を読んではっきりした。それには
Happy are those who know they are spiritually poor; the Kingdom of heaven belongs to them!

「心が貧しい者」ではなく「心が貧しいと自覚している者」であったのだ。

6/2 (日) 快晴

午後、岩魚釣りに来た南保さん（NTT勤務）を小屋に呼び込み、3時頃まで談笑す。炭焼きの件には同感を示された。協力を約束して帰る。夜10時満月を見る。一隅照顧、脚下照顧。

6/3 (月) 曇

旧道補修7:30am-3:30pm。高三郎まで行けず途中で引き返す。バテた。酒と天麩羅油を交互に飲み、あられを食ってたら腹が立った。「おとなの味」なんて書いてある。誰が大人になるものか。我、永遠に緑なのだ。大人になると云うことが人生のはかなさを知ることなら、俺はいやだ。人生は永遠のものだ。神の御手にあるものにとっては。サミエル・ウルマンの詩にもあるではないか。

6/4 (火) 曇時々雨

空模様があやしいので山道作業は中止。屋根雨漏修理。素活深考。質素な生活をし、物事を深く考える…私の造語である。贅沢すると人間は物を考えなくなる。満腹だと眠くなる。粗食して空腹でいると神経が研ぎすまされる。したがって頭脳が鋭くなる。

6/5 (水) 晴れ

旧道補修 7:30am-4:00pm。1089mpeak から一旦下った窪地の残雪の地点まで。雪で道が不明な為、登山道以外の木を切ったかもしれない。

山道で学生時代の俺に出会った。

「今なにしているんだ」

と学生時代の俺が聞くから

「いろいろあったが、今小屋番をしながら山道の整備をしている」

と答えた。

「ふーん」

と不審そうな顔をして、学生の俺が尋ねてきた。

「昔の理想はどうなったんだ」

今の俺は

「歌の文句じゃないが、富も名誉も恋も、遠き憧れの日のことさ。今は一隅を照らすことに専念することにした。お前にはわからないと思うが、やがてわかるさ。さようなら。Bergheimで待っている」

と答えた。

小屋に帰って昔唄った歌をハーモニカで次々に吹いた。何故か涙が出てきた。「栄光、我をば去りぬ」か。

6/6 (木) 晴れ

新道修復7:30am-5:20pm。砺倉分岐から約300m、きつかった。28,9年前工学部工業化学分析化学教室の上田教授、山本助教授を工科大学院生吉野君（ワンゲルOB）と小生で、高三郎に案内したことを思い出した。当時の上田教授と現在の小生の年齢はほぼ同じ。先生にとってさぞきつい登山だったに違いない。帰りにオロロの猛攻撃には両先生も参っておられた。

夜10時頃カベ板の隙間からヘビ侵入。追放。



6/7 (金) 曇のち晴れ 夕刻雨

新道補修7:40am-5:10pm 昨日に+100m伸びたかな程度。大都会のサラリーマンと同じく、現場に到着するまでにエネルギーを使い果たし、ろくな仕事ができない。山道を作った人の苦勞がしのばれる。彼等にとって山道は生活道路だったはずである。自分達とは事情が異なる。したがって意気込みが違う。前進基地を設けるべし。

6/8 (土) 曇のち雨

素粒子論学。ダークマターの量が未来の宇宙がこのまま拡大するか、または縮小するかを決定すると云う。そもそもダークマターなるものは一体何者か。自然とは知れば知る程不可解なものである。学問とは疑問を生む為のものとも云える。そして自然(神)の偉大さを知る手段でもある。

6/9 (日) 雨のち曇

小生の還暦まであと80日。8月28日まで一日二合の日本酒で頑張ってみる。聖書と相対性理論研究で暮らす。

6/10 (月) 曇のち雨

ワンゲル現役にアイルランド出身の女子留学生が居ることを思い出し、便所に西洋式便器を設置した。彼女に使用感想を聞き、改善するつもりである。現役達よ早く来い。

酒に酔い、ウグイスの声を聞く。自分がこの世に実在している確かな証拠である。夢でなく現実である。デカルトは疑って、疑って、疑いぬいて自己の実在に達したが、私は現実があるがままに受け入れ、実在を認める。人生の目的とは、神の世、私の極楽浄土をこの世に実現する為に、各自相応に努力することである。

鳥獣達は既にこの世を楽園としているが、ただ人間だけが、知能という生きる為の手段に振りまわされて、この世を住みにくくしている。愚かなるもの汝の名はHomo sapiens。人類の祖先はアフリカの草原に下り立った二人の女性(男性数は不明)に端を発する。したがって皆血縁なのだ。それなのに国だ、民俗だ、宗教だなどといかみ合っている。これが愚でなくて何だろう。繁殖しすぎた人類よ。人類の適性な人口密度に戻れ。それは1kmに1.4人である。(東工大本川達雄先生の説)

6/11 (火) 雨

本格的な梅雨の到来。これもまた良し。昨日



から固形物のない食事。酒、塩分、水、これで生きれるはずだ。横山大観の傑作「生成流転」は酒によって画かれたという。ワサビを醤油に溶いたものをなめながら、酒をチビリチビリ。これが真の贅沢と云うものであろう。

6/12 (水) 晴れのち曇

朝、白い花が散っていて初霜の様だった。朝日と新緑と白い花。これが妙源郷である。高級ブランディー-Remy Martin 入りの紅茶を飲みつつ山を見る。このような幸せがあってよいのか! 晴耕雨読の生活こそ理想的な生き方と思うので、考えた結果、Hütte の南側を畑にすることにした。

6/13 (木) 晴れのち曇

相対性理論を田村式で展開した。昨夜一晩中夢と現の中で計算した。Einsteinと結論は一致した。ついに俺は「ワイン 酒多飲」となった。(このノートの初めの所に書いた)

炭焼実験窯の設置完了。畑作りは困難である。竹の根がはりめぐらされているのには参った。ばちばちやることにする。素粒子論を学ぶ。

6/14 (金) 曇のち晴れ

正午頃ぶらりと小屋を出たら、元倉谷に住んでいた夫婦に出会った。二人とも昭和11年生まれ。私と同年齢である。テント張りの小屋で御馳走になり、みやげまで戴いた。今、小立野3丁目に住んでいる方達である。あさって日曜日にまた来るからおいでと云われた。有り難い、ありがたい。

6/15 (土) 雨、曇、晴れ、曇、雨…つゆ空
皆が俺が無事にいるかどうか心配しているよ
うだから、どっこい生きている証拠を見せに金
沢の街へ出る。小林君宅で風呂に入れてもらい、
カツオの刺身の御馳走になる。長男が額を出し
に来た。立派な青年に成長していた。

6/16 (日) 曇のち晴れ

午前8時頃小林宅を出る。小林君は寝ていた
ので、そのままにしておいた。舟田節子女帝宅
に行き、女房からの小包をもらい、手土産まで
いただいた。

午後1時頃倉谷に着く。羽場さん夫婦は私の
帰りを今や遅しと待っていて下さった。上井得
三郎(ドンソ)、山崎隆(キュービー)…工化
30年入学…と羽場さんは同級性と分かり、ます
ます意気投合す。そして上井、山崎等と似たこ
とを云うことにも同級生を感じた。

6/17 (月) 曇時々雨

ドアの修理、鎌研ぎ、etc…で一日暮れる。
夜、素粒子と超磁について考える。深夜聖書を
読む。

6/18 (火) 曇のち晴れのち雨

駒帰まではがきを出しに行ってきた。途中ダ
ムサイトの道を昨日研いだ鎌で、笹やススキを
払いながら。4時にBergheimに着いて飯を作っ
ていると雨。俺はラッキーに生まれついた。途
中桑の実を食いながらの良き一日であった。

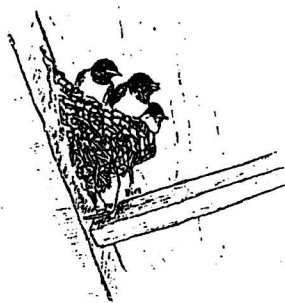
6/19 (水) 雨のち晴れ

西田幾太郎著「善の研究」を読む。学生時代
に読んだ時とは別な感想を持った。若い時に興
味のなかった宗教についての西田の考え方に共
感を覚える。これは年齢のせいかもしれない。

6/20 (木) 曇

還暦を迎えるにあたり、今まで考えていたこ

とをまとめてみた。「時間、存在、超磁につい
て」である。ワングルの諸君に読んで欲しい。
今後は超磁理論の展開を進めたい。



金沢に出る。舟田女史と昼食後、角間の大学
へ行く。驚いたことは学生部ではなくBHに何時
の間にか浮浪者が住みつき、行方がわからなく
なった>と話題になっていたことだった。学生
部に顔を出して

「浮浪者は私です。お騒がせしてすみません。」
と詫言ておいた。

前田先生、村田女史に会い、楽しく語り合っ
た。小林君宅に泊めてもらうつもりだったが、
ガッポリ小屋管理手当が入ったので、ビジネス
ホテルに泊まる。

6/21 (金) 雨のち曇

工学部へ行き、電気鈴木教授(ワングルの
B4期)に会い、久しぶりに歓談。次回彼と飯
でも喰いながら、続きを話すことにする。物質
工学の中本教授とは漆や木炭の重要性について
語り合う。5時頃帰着。

6/22 (土) 曇

朝ブランデー入りのカプチーノを飲みながら、
一昨日舟田女史に提出した超磁についての説明
に不備な点があることに気付いた。早速金沢の
街に出ることにする。そして正国君宅に泊まり、
私の初めての論文について討論しよう。

6/23 (日) 晴れ

金沢からの帰途、羽場さん夫婦に会う。サンマ三匹もらう。飯を炊くのが面倒だから酒にする。サンマと酒。何と幸せな贅沢な夜食よ。それにしても正国君の生活を見て考えさせられた。大学教授とはなんと余裕のない生活なのかと。自分の好きな研究をして、若い人を相手に出来るうらやましい職業と思っていたが、実情は違う。雑用ばかりらしい。自分の好きなことを考え、行動に起こせる、私の現在の生活が一番めぐまれている。神に感謝。無論、人にも感謝。全てに感謝。食って、飲んで、寝る。

6/24 (月) 曇のち雨

鳥のさえずりに目覚め、さわやかな気持ちで酒を飲む。すると頭にひらめいた言葉がある。それは、時間のもう一つの定義。「時間とは、エントロピーの増加を表すための媒介変数（パラメーター）である。」これの方が「時間とは宇宙の表面積である。」よりカッコがよい。7月1日金沢の街へ出た際に舟田女史に伝えよう。山に居ると頭が冴える。当分山から下りられない。

6/25 (火) 大雨

“rain cats and dogs”昔高校で習った“ドシャ降り雨”が降る。河原に放置してあった洗濯物の入ったポリバケツと大型ポリタンそっくり流されてしまった。被害物件は次の通り。山シャツ1着、半袖シャツ1着、厚手靴下1足、薄手靴下2足、パンツ1着。（以上私物）ポリタンク1個、ポリバケツ1個。（以上ワッゲル備品）備品については弁償させていただく。



“Nature”又は“American physical society”に投稿する為に原稿を書き始める。

現在午後2時半、雨は絶え間なく降っている。天が汚れた人間社会に洗礼を施す様に。清められよ、人の世よ。そして甦れ！午後5時、倉谷川の濁流はものすごく、下の遊歩道まで流れが入っていた。金沢の街の無事を祈る。

私が大学に入学する前年昭和29年には、浅野川が氾濫したことがある。BHでは洪水の心配はないが、自分のみ無事であれば良いというノアの心境にはなれない。

6/26 (水) 曇のち雨（降ったり止んだり）のち晴れ

今日も至福のTwilight Time が訪れた。下手くそな英文による「時間と存在」「エントロピーと超磁」の原稿を書き終え、今紅茶にブランデーをたらしたやつを幸せ一杯で飲んでいる。明日もし晴れたら、水平道（ダムサイトー倉谷）の危険箇所を修復しよう。

「超磁理論入門」と「聖書」を読む。私の60年の人生を振り返ってみる時、もの心がついて以来、心配事、悩みのなかった時はなかった。今は違う。毎日が晴天である。あたかも鳥や動物が、明日を心配せず、今日という日を精一杯楽しんで生きて居るのと同じである。それは今、自然の中で暮らし、神を受け入れたからである。皆に伝えたい。意識を変えればそこに天国があることを。

6/27 (木) 曇のち晴れのち曇（心は晴天）

午前中、河原で洗濯していて悶いた。「時間は宇宙の表面積である」と仮定して誘導される力は、現在物理学上の大問題である四つの力、すなわち「重力」「電磁力」「強い力」「弱い力」を統一する力ではないか？と云うことである。神に乾杯、真理に乾杯。

6/28 (金) 曇時々雨 (心は晴天)

昨日に続き「統一の力」を考える。エントロピーは超磁の数 (Σs) を意味する。統一の力を作り出す要素である。

$$F = \Sigma s \cdot \frac{\Delta \omega}{\Delta l} / 4 \pi R^2$$

の式の Σs がエントロピーである。

($\Delta \omega$; 超磁重量 Δl ; 超磁長さ R ; 宇宙半径)

我々は宇宙半径やエントロピーを見ることが出来ない。したがって時計というものを作り、時間をパラメーターにして、見ることの出来ないものを計測しているのである。"Big Bang" で神は空間とぶっしつを創造した。人間は時間を考え出して、その時間によって苦しんでいる愚かしい存在である。

神は私に宇宙創造の秘密を打ち明けられた。

今こそ、日本酒の抹茶割りで神をたたえん！乾杯！"我々の神とは天地之に由りて位し、万物之に由りて育する宇宙の内面的統一力でなければならぬ" 西田 幾多郎。

6/29 (土) 晴れ (心も晴れ)

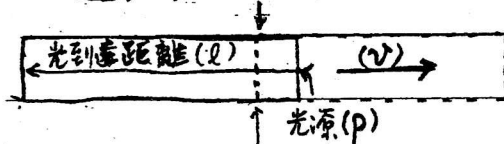
午前中、ダムサイト方面に道の状態を見に行く。沢の入り込んでいる箇所は何処も相当崩れていた。丸木橋を架けることに方針を変える。

6/30 (日) 雨曇りのち晴れ (心は無論晴れ)

明日は工学部中元教授、舟田女史に会いに金沢に出る。超磁理論を学ぶ。必ずマスターする！一世一代の論文 (英文) を書き終える。もう死んでもよい。生きたあかしが出来た。乾杯！神に栄光あれ！

相対性理論 ワイン多飲

運動系観測点 (0)



静止系観測点 (0)

走行中の車輛の進行方向の先端に光源を置き、車輛後尾に観測点を置き、 t は車輛速度 (v)。アインシュタインは光の光源への伝播を考え、ワイン多飲は光の片道を考え単純化した。云々子でもなく時計は静止系、運動系とも同時に合わせた。静止系の時刻を t 、運動系における時刻を τ とする。

$$t = \frac{l - vt}{c} \rightarrow t = \frac{l}{c + v} \quad \text{--- ①}$$

$$\tau = \frac{l}{c} \quad \text{--- ②}$$

$$\text{① ② から } \frac{\tau}{t} = \frac{l/c}{l/(c+v)} = \frac{c+v}{c} = 1 + \frac{v}{c}$$

(I) なって運動系における時間では $\frac{v}{c}$ だけ静止系よりゆくり経過する。

静止系での測定による車軸の長さも l_0 とすると

① から $l_0 = (c+v)\tau$ ——— ③

運動系での測定による車軸の長さも l' とすると

② から $l' = c\tau$ ——— ④

③ ④ から $\frac{l'}{l_0} = \frac{c\tau}{(c+v)\tau}$

比をとる為 $\tau = \tau$ とすると $\frac{l'}{l_0} = \frac{c}{c+v} = \frac{1}{1+\frac{v}{c}}$

(II) より、運動系に於ては長さ l は静止系の長さより
(v/c だけ) 短くなる。

運動のエネルギーの式 $\frac{1}{2}mv^2$ (m : 質量
 v : 速度)

これを次元で表わせば $E = \frac{[M][L^2]}{[T^2]}$ となる。

運動系に於ては時間 $[T]$ が大、長さ $[L]$ が小。

運動系速度 $\frac{[L]}{[T]}$ が静止系で測定したより小くなる。

(III) エネルギー E は一定であるから、運動系の質量 m は
静止系の質量より大となる。

以上結論はアインシュタインと同じだが、ワイン酒
(I)(II)(III)

多飲は酔、ばりいながら、光の片道しか考えに入れな
が、たがう 時間、長さ、質量の増減率の精度
には保証しかない。これも酔狂と御容赦願いたい。

Bergheim にて 1996.6.13

Akio Weinstein

[$E=mc^2$ について] ワインスタイン

アインシュタインは彼の^{最初の}論文にミンコフスキーの式
 $x^2+y^2+z^2=c^2t^2$ を使っている。

この式からすぐわかることは 光速 $C = \frac{x^2+y^2+z^2}{t^2}$
 3次元で表現すれば $C^2 = \frac{[L^2]}{[T^2]}$ である。

エネルギー $E = \frac{[M][L^2]}{[T^2]}$ であるから $E=mc^2$ となる。

こんな簡単な中学生でもわかることを何故にも、て
 まわった様な式をこねくりまわしてKのかわからない。

彼の犯した大罪はこの式を使って米大統領に原爆
 の製造を示唆したことにある。ドイツの原爆製造を
 恐れたからかと思うが、皮肉なのはドイツ降服の後
 に日本で使用されたことである。

晩年、彼は反省して平和運動に力をつけたが彼の
 罪はヒトラーの罪と同様、永遠に消えない。



A. Weinstein

Bergheim 1996.6.14

「時間とは宇宙の表面積である」

($\sigma=4\pi R^2$ ワインシュタインの式)
 (但しRは宇宙半径)

時間をニュートンは0次元とし、アインシュタインは
 1次元とし、私はこれをアインシュタインは2次元とした。

Cf: エディントン(英国物理学者)曰く、

「物理学で最も大切なことは次元を充分に
 考えることである」

[エントロピーと超弦]

エントロピー S の次元は $\frac{E}{T}$ (E =エネルギー
 T =温度)

として知られているが

温度 T は $\frac{E}{N}$ エネルギーを粒子数で

割ったものである。

したがってエントロピー、 $S = \frac{E}{\frac{E}{N}} = N$ となり、

エントロピー S は粒子数 N の意味になる。

エントロピーの増加は粒子数の増加
 に言い換えられる。

現在、素粒子はクォークとレプトンが究極の素粒子とされているが、もしこれ等の素粒子が超弦と呼ばれる長さ(10⁻³⁴cm)の紐からなるとしたら、この宇宙はビッグバン以来、紐の増加過程と云えよう。

(cf: 超弦は日本人物理学者南部陽一郎の発想である。)

「存在とは何か」

ワインスタインの式 $\sigma = 4\pi R^2$ を使ひ
宇宙に散在する物質の状態を式で表は
せば $\frac{\sum \Delta \cdot \Delta W}{4\pi R^2}$ 但し $\sum$: 超弦(物質)の数
 ΔW : 超弦質量(M)/[L]
R: 宇宙半径

力Fは

$$F = \frac{[M][L]}{\sigma^2} = \frac{[M][L]}{[L^2]^2} = \frac{[M]/[L]}{[L]^2}$$

$$\frac{\sum \Delta \cdot \Delta W}{4\pi R^2} = \frac{[M]/[L]}{[L]^2}$$

$$\therefore \frac{\sum \Delta \cdot \Delta W}{4\pi R^2} = F$$

(cf: ヒュッセルの式 $H = \frac{\sum i}{4\pi r^2}$
但し H: 磁場, $\sum i$: 電流の和, r: 回路半径)

結論: 存在とは力也。

全ての存在が宇宙の力を形成するの

南としている。拡大してゆく宇宙で

異なる事象は同じようで、同じではない。

時間が矢ではなく球面とすれば、くり返し

起る事象を説明出来る。歴史認識の

一助となれば幸いである。

以上が「歴史を迎えるにあたり」

今まで考えていたことをまとめ
てみたものである。

世界は単純なもの、フラクタルに
構成されたものであると云う信念
にもとずいて考えてきた。

山小屋にあり、40日、このような機会と
与えて下さった金木ワシロOB会事務局長
舟田節子さんに心より感謝をこめ、又
この地に眠る高桑弘親君の霊に
これを捧げる。

Bergheim 1996.6.20 ワイン酒亭



続ワイン酒多飲日記

7月1日(月) 曇

舟田女史に会い、一方的にしゃべりまくって
申し訳なかったが、人と話す機会がしばらくな
かったもので、つい度を越してしまった。反省。
工学部で元井教授と雑談して、帰りに氷室饅頭
をもらう。金沢らしい伝統はここにもまだ生き
ている。喫茶店「ばたん」は開店50周年で我々
の学生時代のコーヒ一杯の価格50円でサービ
スしていた。学生の客はない様だった。時代の
流れを感じさせられた。

7月2日(火) 曇

うるしかき道具を送る為に金沢に出る。食糧
類と偶然見つけた竹内均著「哲学の歩き方」を
買う。7時頃小屋に着す。10時半頃ふと目を
覚ますと外は満月。寝るには惜しい。酒を片手
に小屋の外で月見の宴としゃれこむ。万感胸に
迫り、昔山でよく唱った歌 "When the moon
comes over the mountain" を唱った。そろそろ
梅雨明けかもしれない。

「倉谷の沢音高き月の夜に 重ねし酒杯に
夜も眠れず」 晩風

7月3日(水) 梅雨晴れのち曇のち雨
(梅雨型天候)

「哲学の歩き方」竹内均著によれば
「科学における第一級の仕事は、大胆な仮説の
提案である。あとになってそれが実証されれば、
その分だけその科学が大きく飛躍する。観察や
実験によって反証されないで残った知識の全体
が科学である。科学は真理であることを主張す
る知識の体系ではない。それよりもむしろ、偽
りであることが立証されていないために、偽り
であることが立証されないうちは支持され、ま
た信頼される知識の体系である」
これ程私に勇気を与えてくれる言葉はない。私
の初めての論文を竹内先生が支持してくれたと
云っていい。竹内先生にも私の論文を送ること
にする。(竹内均氏は四高出身であり「物理の
傾向と対策」で高校時代にお世話になった。)

7月4日(木) 曇

遊歩道(倉谷ダムサイト)の道路整備。11
am-5 pm。中間点にあたる沢迄。丸木橋の材料
になる木を切る。

7月5日(金) 雨

英文の論文の結論(3)の不備に気付いた。
Conclusion
(3) The time measured by watch deserve to
only parameter in order to express
universal(true) time and entropy.
これが最後の訂正だと良いが。

7月6日(土) 曇のち晴れ

10時-14:30 時迄、倉谷ダムサイト間遊歩
道整備。一昨日の残り、中間点の沢からダムサ
イト迄。行きに一人、帰りに一人に出会う。ツ
ユも明ける頃、夏山シーズンの到来か。山道の
整備も始めねばなるまい。疲れて酒を飲んだら
気分が良くなり、何か書きたくなった。物理学
者の寺田寅彦は「好きなもの イチゴ、コーヒ
ー、花、美人、懐手して宇宙見物」とってい
るが、私は最初だけ違う。私は「好きなもの
ワイン、同じ」である。久し振りに夕焼けがき
れいだ。明日は来客があるような予感がする。

7月7日(日) 曇

今日は聖日、たなばた祭。朝早くから、日本
酒の麦茶割に第Ⅱ物のハチミツを入れ、マリー
ムをなめなめ幸福感を味わっている。哲学や物
理、数学のテーマを頭に入れ、そのテーマの熟
成をゆっくり待つ。あたかもワインが出来よう
ように。至福の人生に乾杯。ここ倉谷が街の暮ら
しに疲れた人達の憩いの空間に、Berg heim が
酒と学問を愛する人達の梁山泊になればよい。
心からそれを願う。予感的中。昼頃大出徹君、
小屋に到着。越冬できるくらい大量の食糧をも
らう。感謝。二人で金沢に下る。

7月8日(月) 曇

金沢のビジネスホテル シマノで泊まり、午後1時頃帰着。ドアにコーヒー、酒のツマミ等の入った袋が掛けてあった。金山谷に居る向井氏の所に居た工学部化工45年卒の後輩からのものだった。感謝。留守にして申し訳ない。

7月9日(火) 曇

今日も又、おだやかに暮れてゆく。紅茶にたらした日本酒の香りがたまらない。蚊取線香のききめバツグンである。

論文に又も付け加えの二ページを書いてしまった。舟田女史には御迷惑なことと思うが、お許しを乞うしかない。

「カメ虫ホイホイ」を製作すれば売れる。又、アルコール入りアイスクリーム、アイスキャンデーも作ればホイホイ売れること請け合い。何と素晴らしいアイデアであろうか。山の水と空気が発想を豊かにする。

7月10日(水) 晴れのち曇のち小雨

一日中読書。こんなことで良いのかと自分を疑う。もう一人の自分は今こそじっくり考えて次の大飛躍に備えよと云う。私には大きな仕事がある。この倉谷をユートピアにすることだ。その為のマスタープランを今練ることである。道を整えることである。読書ばかりにふけてはならぬ。ツユ明けとなったら戸外に出よ。そして皆の為の道を整えよ。あせらず、少しずつ。今は晴耕雨読で良いではないか。聖書を読み。そして祈れ!

7月11日(木) 曇

朝6時半日本酒のコーヒー割を飲みつつ、我決意す。"70才迄にこの地上に神の国を建設し、80才で逝く"まずその第一歩は倉谷から。神よ、我にその力を与えたまえ!

糸吉 書翰

- (1) 存在は力を生ずる。宇宙の中心に発生する力は宇宙を拡大する力となる。
- (2) この力は他の4つの力「重力」「電磁力」「弱い力」「強い力」を統一するかもしれない。
- (3) エントロピーは超磁の数のことであり、時計によって計られた時間はエントロピー(超磁の数)増加のパラメーターである。
(超磁の長さ10 cm以下)

[Pray to Lord]

Our Father which art in heaven,
Hallowed be thy name.
Thy king-dom come,
Thy will be done in KURATANI, as it is in heaven.
Give us this day our daily bread.
And forgive us our debts, as we forgive our debtors.
And lead us not into temptation, but deliver us from evil;
For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever.



経典売ワイン酒多飲日記

7/12 (金) 晴

朝9時小屋を出る。金沢論文追加を提出することと、先祖の墓参りである。父方と母方の墓地へ行く。泊まりは例のビジネスホテルシマノ。8月3日の会津から出てくる家族の為の予約をしておいた。午後8時街へ散歩に出る。「ぼたん」でコーヒーを飲み、「リリー・マルレーン」で久し振りにドイツ語と英語でリリー・マルレーンを唄う。山形県米沢出身のアルバイトの女子大生と知り合う。

7/13 (土) 晴

金沢で久し振りに自由軒のカレーライスを食べる。昔とちょっと味が変わった。もっとカラかった気がする。年齢のせいかな。味覚が変わったのか。遊廓の跡が茶屋になっていて、そこで抹茶アイスを飲んだ。昔の廊の面影を偲び、若い女性達の観光客が、かつての娘達が春を売って生きていた事実を知ってか、知らずか、外人女性まで来ていた。時は確実に過ぎてゆく。午後7時前に小屋に帰着。

7/14 (日) 晴

今日も又至福の夕暮を迎える。橋を架ける為の流木を二本、倉谷川吊橋を渡って最初の沢まで運ぶ。帰り道、倉谷川にドンブリコと浸かり汗を洗い流す。屋頃、親子三人に河原で出会う。小屋で一服するようにと誘ったが、山賊とでも思ったのか、小屋に来なかった。彼等にはわか雨に会っている筈である。人を信ずれば良いのに。

7/15 (月) 曇のち晴

夕刻5時頃、英文の時間論の「概要」と「謝辞」を持って金沢に下る。舟田女史の郵便受けに入れ、天神橋の卯辰山側にある無料休憩所で泊まる。この休憩所は2間×3間の広さでBerg

heimと同じである。違うのはその材料の立派さである。太い柱に、太い梁がつ使われ、図書棚まである。その中の柳 宗悦の民芸論を読み、浅の川の川面の風で夕涼みとは、何とオツなものぞござんしょう。

7/16 (火) 晴

まだ暗いうちに掃除のボランティア婆さんがやってきた。次に早起き会の爺さん連中の集まりが休憩所で開かれた。寝ているどころではなくなった。私も爺さんの仲間に加わり、ワイワイやった。八十才の爺さんとはやはり話が噛み合わない。屋頃小屋に帰着。

7/17 (水) 快晴

八月三日に金沢に来るという娘達にそれぞれ便りを書いて、ポストに出しに駒場まで下る。途中65才の元倉谷の住人と知り合う。市役所に定年まで勤めた由。

7/18 (木) 快晴

今日も何事もなく穏やかに暮れてゆく。下界はどうなっているか、私の関知しないこと。マタイ伝18章に次のようなことが書いてあった。弟子達がイエスに「天国では誰がもっとも偉いのですか」とたずねると、イエスは子供を呼びよせて皆の前に立たせて云った。「あなた達が変わり、この子供の様にならなければ天国は受け入れない。天国で一番偉いのは、この子供の様に、自分を何も知らない、無知なものである」と。島林君が聞いた泣いて喜ぶ言葉だ。大人になれないなどと嘆くことはない。いつまでも子供の心を持ち続けることが偉いことなのだ。

7/19 (金) 快晴

流木を切って丸木橋の材料とする。直径20cm長さ3mは少々運ぶのに力と時間が必要。今日は切るだけ。午後は丸裸で倉谷川で水浴。いい

ものだ。俺は捨てた。世を捨てたのではなく、古い自分を捨てた。あとは自然に、倉谷川の流れにまかせて生きるだけだ。神にこの肉体を提供したからには、人間とは単純で簡単なものをわざと難しく考える性癖がある。この世を天国にするのは簡単だ。意識を変えればである。物は人類皆平等に分かち合い、エネルギーの消費を少なくする。この世から飢えと戦争を追放する。これ等はすぐ出来る。出来ないのは愚者が多いからだ。

7/20 (土) 晴

午前中倒木を切る。これも木橋の材料。ゴリを取りに来た人に会う。大学は既に夏休みに入ったはず。小中高の夏休みも近い。丸木橋の建設を急かねばなるまい。午後、大統一理論について考えた。論文に書いた「統一の力」は万有斥力 (Repulsion) と名付ける。竹内 均の「哲学の歩き方」と西田 幾多郎の「善の研究」を読み感じたことは、「あらゆる真実は人間のものであり、真理は神のものである」ということである。したがって真実は無数にあり、真理は唯一つ。

7/21 (日) 快晴

今日はかなり山に入った人がいた様である。小屋を訪れた人はなかった。午前中は昨日と同じ、倒木を切る。午後はジョン・バロウ著「宇宙が始まるとき」にのっていた4つの力の分かれる先の不明になっていたところに、私の万有斥力 (Repulsion) を書き込み、明日、舟田女史に提出する予定。真夏の太陽が輝く河原で寝そべりながら幸福感に浸った一日だった。これからの人生は、何時死んでもいいような生き方をしたい。まだ見ぬ明日よりも今日を充実させよう。山道を整備すること、聖書を読むこと、それが私の義務である。仕事である。神の国の建設の為に。



「夏はオロロカ出るんですよ！」

「でも、昔は人が住んでいたんでしょ。それなら暮らせんことないですよ。」

と、田村先輩は颯爽と、マウンテンバイクに跨がり、倉谷へ戻られるのでした。

補助金を受け渡しにおいてたスポーツ振興課の尾崎主査 (小3まで倉谷に住んでいた) に、羽場さん夫婦が一番上の姉であること……

「ほやわいね。そんなくもの好きな所へ行くモンな、昔住んだったモンくらいしかおらんワイネ。」

を確かめた後、

「アノ……オロロカはどうしておいでたんですか？」

「そんなモン。パチンと叩くだけやワイネ」……愚問でした。

さて、梅雨があげ、猛暑とオロロカの夏……修行はいよいよクライマックスを迎えようとしています。

こんな折りに、田村先輩は還暦を迎えられることになりました。会津若松から、ご家族が、お祝いと偵察におみえになります。キリストには、マリア様が、田村さんには、昭子夫人がいらっしゃるのです。(求道者の蔭にさらに偉大な母性あり！)

8月3日の晩は、リリー・マルレーンにて<軟弱グループ>と酒宴を張り、4日の昼は前田顧問、大島OB会会長、他と、BHで炎暑の宴を張る予定。ご家族の方は、田村先輩が担ぎこまれた蚊帳の中で倉谷の夜を過ごされることになっています……。

平成五年から始まった同社の「分県登山ガイド」シリーズ第十八巻、白山をはじめ、宝達山、医王山など、本格的な登山から手軽なハイキング向けまで、計五十二の山について、詳しく



『石川県の山』出版
能登から加賀まで県内の主な山を紹介する「石川県の山」『写真』がこのほど、山と溪谷社から出版された。金沢ナカオ山岳会の林正一代表ら、ベテランメンバー四人がまとめた。カラー写真をふんだんに使い、見やすい登山ガイドとなっている。
A5判、百十一ページ、定価千七百五十円。
いコースや所要時間、注意点を解説した。
今回の登山ガイドについて、林代表は二年がかりで調査した最新のデータを掲載した。フナ林の美しい石川の山への関心が高まればうれしい」と話している。

掲載写真は、山麓からの紹介山岳、山頂を示す写真の2点を必ず入れた上に、展望写真、登山風景などを1コースにつき4-6点提出となっており、人物が写っている方がよいとの補足もあったということだった。

分県登山ガイド 「石川県の山」

15期 舟田 節子

ナカオがこの仕事をうけたと聞いたのは93年初めだったように思う(ワングルの35周年記念総会をやった年)。夏には執筆メンバーの4人が決まった。私が選ばれたのは「女性の視点」もあった方がと、会の原稿については意地にかけて(学習塾稼業で、子供に宿題を課す立場)早出しを努めてきたからなのだろうが、林代表がどのような「勤務評定」をされた結果なのかまでは知る所ではない。

52コースの選定基準は

- a 登山やハイキングの対象として、地元で親しまれている山
- b 登山道、遊歩道など、コースが比較的に整備されていること
- c 展望や日の出、桜などの花の山など、何らかの特徴のある山
- d 家族向きのハイキングに敵している山となっていた。

山の選定においては、及ばず道がなくカットされてしまい、大門、赤兎など県境の山は石川県からは道がない。県境の山を含め、すべて編集担当と打ち合わせのうえ、選定されていた訳だが、その過程において再認識されたのは「山と溪谷社は、一つの企画として分県登山ガイドを打ち出したものであろうが、いわゆる県民に推奨できる登山コースの視点を持つ時、石川県の山はあまりにアクセスが不便で、道標等の整備も行き届いていないということだった。そのことは、近年私達も「北陸の100山を登る会」での登山指導や、「白山眺望の山・泰澄大師ゆかりの山」の企画などで県外の山に登る機会が増え、気付いていたことでもあった。私個人も、年寄りが動けなくなってから押し込める施設をデンと建てるより、気軽に自然に触れ合い、眺望を楽しめる登山道整備や、アクセス整備の方にお金を使ってほしい、心身共に健康な老後の為にも山を見直してほしいと思っている。

ともあれ、「社会性ある登山」「生涯登山」

の会のスローガンに沿うものとして、この企画を受け止めたし、請負仕事ながらもそれらの願いはこめて、世に送り出したつもりでいる。

93年晩秋、52コース中きっちり4分の1の13コースが割り当てとなる。北は輪島岩倉山から、南は大聖寺の寺尾観音山まで、低山や歩行距離の短いものが主体になる。

「どうもお心遣いいただきまして。」

と言ったら、

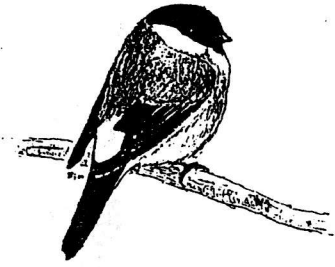
「短いから楽というわけではない。行程の長い山なら、右へ行って左へ行ってとそれだけでガイドが書けてしまう。短い山の方が何を書くかが難しいもんや。」

と言われた。

ただ、低い山の方は、選定に入ったからには歴史や、文化財、寺社、記念碑など何らかの種の種は持っている。本来、欄外に書くべきことを本文中に混ぜてしまえば、書けないこともなかった。もちろんわずか一行の確認のために出直したことも再三ではあったけれど、「事実通り」は厳しい反面、気楽でもある。それ以外に書きようがないし、実際には規定行数に納めるために添削の「削」の方が必要だった。ガイド文については、いざとなれば傘をさしてでも確かめに行くわ！の開き直りもできた。

たいへんだったのはなんといっても写真。カメラを持たない山行などありえないが、これまではわざわざ高いリバーサルフィルムを使う気まではなかったし、使うとすれば無人になってからシャッターを切っている。要するにストックなど無く、全部を撮りに行かねばならないということだった。晴天（霞がかかっておらず、青空の日）と休日が重なる確率がまずネック。さらに、地理的に石川県の山は、比較的晴天の見込まれる午前中が逆光になるというハンディまであった。

この企画は会として受けたので、他の会員も協力することになっていたけれど、なにしろ低山担当で、その程度の山でせいかくの休日を潰してもらうのも気がひける。写真にこだわると



天気オンリーで、人様の都合まで加える余地がない。結局、家族という一番効率のいい単位で、いつでもカメラ入りザックが部屋に転がっている状態の中で、ノルマをこなしていった。dの家族向きハイキングに適している山の点では、三男坊が格好のモデルになった。

低山がメインの私は麓からの写真に難渋した。低くて、まわりの蔭になって見えなかったり、どのデコボコに当たるのかが、分からなかったり。麓の人に聞いても分からない。山へ行こうなんてまさしく、都会人の遊びであって、どのデコボコにどんな名前がついているのか、彼等にはホントに暇なことに過ぎないのだった。そこら中の林道を見えるか？と走りまわったり、結局は頂上から、眼下に見える景色の中からスポットを選び、駆け降りて、今度は車でその地点へ走り、「だめや。前山で下半分が見えん。」を繰り返し……。こうして読図力が否応無しについた後半は、「ここなら見えるはず」と走り「やったぜ！」になった。ただ、はまりだすと、「もっと良く見える所」とか、「この間のは色が悪かった」になり、いつまでもピリオドが打てない状態になった。こうなると、職業柄、夫のこだわりの方がひどく、私は車内であきれてふて寝、彼の方が脚立を抱えて崖を登って行くといった場面がくり広げられたり、現像フィルムが戻ってくる度、どれを選ぶかでまた一揉。アッシーもやってもらっている手前……。

また、執筆者中二人が入院というアクシデントもあった。彼等の担当分を、やはり要領をつ

かんでいる私達のカメラが補充することになった。その間には、「石川の自然百景」写真コンテストで2席に入り、ちょっと自信をもった一コマもあった。

95年9月、締め切り2ヶ月前に林代表に全てをお渡しし、ホッとしたような、虚脱状態を味わった。

この分県ガイドは、1年に2回4-12県ずつ発行されていき、あと4県で完結となる。担当編集者は二人いるらしく、片方は要項どおり1ルートに2-3枚の写真で編集しているし、もう片方が1ルートに5-6枚を掲載し、人物も正面を向いていようとおかまいなし。後者の編集をそのように編集方針が変わったのかと勘違いした私達は、また登り直して標識の類を撮影したり、顔がないわけじゃあるまいしと後ろ向き人物しかなかったのを、正面を向いてにこやかに…撮り直しもした。編集者が二人いて、その渋い方に当たったのだとわかったのは、初稿が届いてから…。



風景を私達が写真で切り取る。その写真をそこへ登ったこともない編集者が、どんな基準でなのか、選択してしまう…。自分にとって快心のカットが落とされ、どうということもないのが掲載される。エエ、フィルムを、時間を返せ！舟田夫婦は、声を合わせて編集者をなじり合った。写真集にせよ、映画にせよ、見る立場以上の観点を持たなかった私にとって、そのあたりが驚き、歯がゆさ、そしてあきらめだった。ありきたりだが、本当にいろんな勉強をさせてもらった。

さて、マイナーな石川県がどれだけ売れるのかと思いきや、全県を揃えるマニアもいるので1万2千部を用意すると聞いている。今、書店では、夏山情報誌の横に「石川県の山」が積まれている。それを手にとり、自分の名前を確かめて、ニヤッとしている私はまぎれもなく「一人のおばさん」だ…。

かつて、こんなふうに「かがのと百山」を手にして、私はナカオ山岳会へ入会希望の手紙を出した。それから12年…。本はどんな一人歩きをしていくのだろうか。

「石川県の山」を購入された方へ

…写真については（莫大な時間をかけたのでかわる）、舟田執筆のページ全部と、p6上、左下、p7上、右上、p31上、p37上、p50上、p52上、高三郎全部、p76上、p77上、p79左上、p87上裏表紙上部の4枚を撮影しています。

「石川県の山」未購入の方へ

…著者割引+書籍小包料金+振込料で、1750円より数10円安くなるだけ。書店で注文いただく方がよろしいようです。

もちろん著者サインの欲しい方はこの限りではありません。ご希望の一言も添えて下しくそなサインをし、郵送させていただきます。

富山岳連 '94

ガッシャーブルム I 峰
遠征 (続)

18期 田辺 隆一

富山県下30余りの山岳団体の集合体が富山県山岳連盟で、私はそのうちの一つである十全山岳会(金大医学部山岳部OB会)富山県支部、及び、他の別の山岳会にも所属しています。

組織は、事務局、国体委員会、自然保護委、指導委、遭難対策委、海外登山委などがあり、中でも海外登山委では、国際交流、海外登山の情報収集立案等を行っています(各都道府県にもほとんどあると思います)。

当岳連では、高所登山のレベルアップ、及び若い人の海外登山の経験のために、近年は約5年毎にヒマラヤ遠征を企画、成功させています。

('83ナンガパルバット8125m '88 ブロードピーク8047m '94 ガッシャーブルム I 8068m)

岳連の事業に参加するには、加盟団体の会員である必要がありますが、一時的な預かりの身分での参加を認められることもあるようです。

普段の山行やトレーニング等は、各山岳会、あるいは個人によるものがほとんどで、マッキンレーやチョーオユー等の海外遠征から、四季の剣岳や北アルプス等、各自のペースで行われています。私個人は、冬は数回のリフト付スキー場も含めて山スキー、春は山菜取りを兼ねて登山及び山スキー、7、8月は立山(雷鳥沢、剣沢診療所)、秋は宴会登山…と、一年中スケジュールで一杯…といたいところですが、実際は休暇をとるのがなかなか難しく、アールにひたってしまいます。

さて、昔も今も世の中いろいろ厳しく、長期休暇がとれず参加を断念する人、退社する人、様々です。私の場合は病院への貢献度の高さ故(?)、皆さん気持ちよく送り出してくれ、感謝しつつも、当然当然と思いがあって…。5-6年静かに仕事をしたら、もう一度くらい行かせてもらえないかなあと、思い出にひたる毎日です。

ガッシャーブルムへの道

燃える隊員たち

<6>



田辺隆一さん(41)

隊員の健康預かる

黒部市民病院の麻酔科 医師。医療担当として遠征隊に参加する。顔の半分を覆う立派なひげが治療で忙しく、ベースキャンプにすぎ付けた。このときは隊員の医療活動に加えて地元の村人の治療で忙しく、ベースキャンプにすぎ付けた。このときは隊員の医療活動に加えて地元の村人の治療で忙しく、ベースキャンプにすぎ付けた。

リードマークだ。
一九八三年に黒山岳連
盟隊がナンガパルバット
(八、一二五〇)に遠征

ンブにすぎ付けた。
「今回はぜひ、上へ上が
りたい」という。
今回の遠征では、標高
五千メートルという高い地点に
ベースキャンプを設け
山雄会に所属。黒部市
三日市。婦中町富崎の実
家に両親がいる。

金沢大学医学部に在学
中から同医学部十全山岳
会に所属し、北アルプス
の山々を登った。

高山病

ヒマラヤ登山に高度障害はつきもの。キャラバン中から、ほとんどの隊員が大なり小なり頭痛に苦しめられた。足早に歩くとすぐに息が切れるため、ゆっくりとしたペースで歩くしかない。

キャラバン五日目、ついに佐竹剛彦隊員がダウンした。朝から調子が悪く、遅れ気味で歩いていただけが、午後にはほかの隊員より相当遅

れてしまった。意識がもうろうとした状態でウルドカスのキャンプ地にたどり着くなり、倒れ込んでしまった。

田辺隆一医師に点滴を打ってもらったが、食事ものどを通らない状態。翌日からも何とか歩き続けたが、ベースキャンプに着くまで調子が戻らなかった。

キャラバンを始めたデスコレ村の標高が三、〇四八。このあたりはまだ高度による障害はなかった。標高三、四〇〇に近いパイユあたりから次第に息苦し

ガッシャーブルム
輝く壁に立つ

富山遠征隊の軌跡

5

野戦病院さながら



頭痛に加え顔にむくみ

さを感じるようになってきた。高きがある。頭痛を訴え、田辺医師から薬をもらう隊員が増えてきた。ポーターたちも「風邪をひいてせき

が止まらない」「くつずれができた」と言っただけに薬をもらいにきて、キャンプはさながら野戦病院のよう

う。

顔のむくみも高度障害の一つ。高所へ行くと、小便が出にくくなり、その結果顔がむくんでくる。利尿剤を飲んで小便を出すのが一

田辺医師(中央)に点滴を打ってもらった佐竹隊員(右)。左は佐伯隊長と黒崎隊員(後ろ姿)＝ウルドカスのキャンプ地

番効果的だ。

キャラバン六日目、標高四、七〇〇のコンコルデイアに到着した。パリのコンコルド広場から取った名前だという。ここは氷河の分岐点に当たり、確かに広

大な広場のような地形になっている。

正面にガッシャーブルムルIV峰(七、九二五)が立ちのぼる。左側にはバルトロ氷河は大きく右へ回り込む。左側にはバルトロ氷河から枝分かれしたゴドウィン・オースチン氷河が延びる。この方面には、どっしりとした山容のブロード・ピーク(八、〇五一)、世界第二位の高峰、K2(八、六一)が威容を誇っている。

八千級の山々が居並び、ヒマラヤ登山を目指す者にとっては心躍る景色。高山病のつらさもうくらまされた。

残念ながら、目指すガッシャーブルムI峰はバルトロ氷河のさらに奥に位置するため、まだその姿が見えてこない。I峰にはヒドゥン・ピーク(隠れた峰)の別名がある。

濯 洗

読書はそれぞれが
持ってきた文庫本
を回し読んだ。
みんな洗濯にも

ポリバケツの中に川の水
をためておいて、太陽の熱
で温める。半日ぐらい置い
てもたいして温度は上がら
なかったが、直接川で洗濯

ただ一つの娯楽が
トランプ。黒崎泰
信、川村泰臣、高
田賢一隊員らはよ
く楽しんでた。

冷たさを防ぐために、隊
員たちはいろいろ工夫を凝
らした。

大勢で楽しんだ
時間を過ごした。

河の上を流れる川。氷の上
を流れる水の温度は零度に
近い。ほんのしばらくで手
が真っ赤になり、ちぎれる
ように痛くなってくる。

荷揚げは、三日行動して
一日休憩するペースで進め
た。
休養日にはBC(ベース
キャンプ)のテントで昼寝
をしたり、トランプで遊ん
だり、読書をしたり、隊員

精を出した。空気が極度に
乾燥しているの、日本に
いるときほど汗臭くなるこ
とはないが、洗濯をしない
わけにはいかない。

洗濯場はBCのそばの水

12

輝く壁に立つ
富山遠征隊の軌跡

冷水に手は真っ赤

バケツで川の水を何度も運
び込んだ。とても体を浸す
ような大きさではないが、
ほかの隊員もこの水を使っ

快晴の暑い日を選び、短時
間で済ませるしかなかっ
た。

BCでは毎日、日本語の
つからず、全く聴けなかつ

サッカー好きの松田靖彦
隊員は、アメリカで開かれ
ていたワールドカップサッ
カーが気になっていた。



太陽熱で温める工夫も

するよりは随分ましだっ
たりした。
田辺隆一医師はプールを
作った。石を丸く並べた上
にビニールシートを敷き、
たさに決死の覚悟が必要。

海外向け短波放送「ラジオ
日本」を聴いていた。時間
帯によっては入りにくいこ
ともあるが、通常はかなり
はっきりと聴き取ることが
なびつくりした。

BCへ入って初めて日本
のニュースを耳にすること
ができたのだが、政権交代
で村山社会党委員長が首相
になったことを知り、みん

ニュースは日本の異常な
猛暑、水不足も連日のよう
に伝えていた。向井千秋さ
んが乗ったスペースシャト
ルの打ち上げのニュースも
ラジオで聞いた。

▲
田辺医師
「ベースキャンプ
にビニールシートにた
め水を使って洗濯する

大相撲名古屋場所の生中
継にも耳を傾けた。日本と
の時差は四時間あり、現地
では午後一時から一時間の
放送だった。

国際協力

富山隊が登頂に成功した翌日の八月十三日、ガッシヤールムII峰(八、〇三五メートル)を目指していたボスニア隊の隊員がC1(キャンプ1)で倒れ、動けなくなった。半身がまひしており、どうも脳こうそくらしい。

困ったときはお互いさま。各国の隊員たちが協力し合って病人の救助に当たった。

まず、たまたまC1にいたプリティッシュ隊のドク

ターが付きっきりで看病に当たった。

BC(ベースキャンプ)からはボスニア隊の隊員六人のほかにアングロ・アメリカ隊の隊員三人もC1へ急行した。アングロ・アメリカ隊の三人は第一次アタックで既に登頂を終えており、救助に向かう余裕があった。

ボスニア隊、アングロ・アメリカ隊の隊員たちは病人をスノーボードに乗せて夜通し歩き、十四日朝、ボスニア隊のBCに着いた。佐伯尚幸隊長もBCから出迎えに向かい、しばらくス

輝く壁に立つ

富山遠征隊の軌跡

28

助け合って病人救助



ノーボードを運ぶのを手伝った。スノーボードは、急きよ

手作りしたものを使った。プラスチックのたる状の容器を縦半分に切り、それを

ヘリで下山、病院へ

氷河の上を滑らすには格好のものだった。

病人はすぐにテントの中に寝かされた。意識はかすかにあるようだが、声は出ない。

ここからは田辺隆一医師

ボスニア隊の病人をスノーボードでBCまで

運ぶ各国隊のメンバー。最後尾は佐伯尚幸隊長

の出番。病状を診断し、富山隊が緊急用に準備していた酸素ボンベを使って、酸素吸入を行った。

病人は一応、命に別条はないようだが、一刻も早く病院へ運ぶ必要があり、バキスタン陸軍のヘリコプタ

に出勤を要請。BCの近くのモレーンを平らに整地し、臨時ヘリポートを作った。

正午近くになってようやくヘリコプターが到着し、病人はふもとの町、スカルドウまで運ばれた。

富山隊の近くにBCを設けていた外国隊のうち、ボスニア隊のほかにも、スペイン隊の女性隊員、プリティッシュ隊の隊員二人も体調が思わしくなく、ヘリコプターで下山していった。

約三十メートル離れたK2(八、六〇一メートル)では、遭難が続出していた。チェコ隊は病

気と事故で二人が相次いで死亡し、遠征を中断。アメリカ隊の一人も転落死していた。

その点、富山隊は一人もけがや重い病気がなく、全員無事に帰ることができたのは幸いだった。

「花の百名山」取材の裏話

話が違うでしょ

NHK・BSⅡの「花の百名山」を制作している「ウォーク」という会社から電話がかかってきたのは、昨年(1997)の8月10日ころであったと思う。盆過ぎに白山を取材したいが、どんな花が見られるか?というので、「ハクサントリカブト・・・」などと答えた。翌日、職場にまた電話があり、同行してくれないかという。わずか5日間の夏休みは残り2日、予定外の休みは取りづらかったが、頼み込まれ、承諾してしまった。後で聞いたところでは、白山自然保護センターにも頼んだが都合がつかなかったそうで、期日も迫っており、相手も必死だったのだろう。日は16~17日と決まっていたが、14日になっても詳しい案内がない。仕方がないので、こちらから日程・コース、見られる花などを書いてFAXで送ったところ、担当者は出張しているという。人にものを頼んでおいて何といい加減など思いつつ、よく話を聞くうち、番組を見たこともない私は、たいへんな役を引き受けたことを知った。「単なる案内ではなくゲストとして”出演”していただきたいのです。担当者からそうお聞きになっていませんか?」

ディレクターは呑んだくれ

15日、仕事を終えて、集合場所の市ノ瀬・永井旅館にかけつけた。36才のディレクターに、カメラマン、音声担当、若いアルバイトの4人が食事をしており、私も加わる。ビールを少し飲んで、明日のコースや花のことを説明するが、どことなくうわの空。そのうちディレクターは焼酎を飲みだし、「梅さんは酒もタバコも飲まれるんですか。よかった。」ほかの山で、酒もタバコも飲まない”学者”のゲストがけっこう多く、やりにくかったとのこと。こちらは、変なところを評価されたようで複雑な気持ち。食事後に部屋で打合せと聞いていたので、こちらから催促して部屋に引き上げたが、もう呂律も回らぬような状態で例の「よかった」を繰り返すばかり。とても打合せどころではなく、明日が不安になる。酒の弱い男だと思ったが、風呂でカメラマンが言った。「4時ごろ旅館に着いて、ブランドーを1本空けているんですよ。酔うといつもあれで、すいません。」

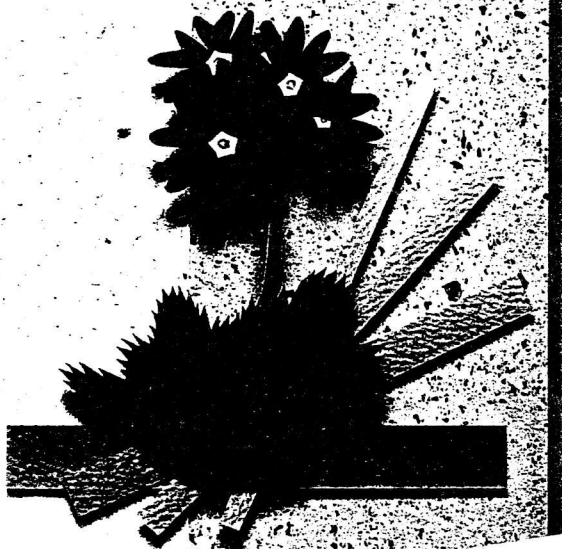
花は取り合い

16日、天気予報は午後から雨。早く高山帯へと焦るが、あちこちでカメラを回し、どうでもいい花まで撮る。やはり、昨夜のレクチャーは無駄だった。酒臭いディレクターはしかし、元気いっぱい。日本山岳会に入るつもりだという。ようやく南竜道との分岐に着いたが、肝心のハクサントリカブトは咲いておらず、雨まで降ってくる始末。アルバイトの学生はTシャツ1枚で装備は皆無。黒いビニール袋を着て?木陰で震えている。結局、彼は室堂で熱を出し、診療所のお世話になった。翌日、御来光は無理ながらもまずまずの天候。クロユリやハクサンコザクラも何とか咲いていた。白山を象徴する花といえば、やはりこれらの花がいいと進言したのだが、すでに他の山のメインとして使われているという。日本百名山と違い、花は取材できる時期に限られる。複数のチームでこなしているのだが、各山のメインの花は、取り合いとなり、いわば早いもの勝ち。結局、白山はハクサンシャジンでいくことにした。観光新道の「馬のたてがみ」付近、「ありました、ありました」などと言いつつ、居もしない人に向かって花の説明ができるほどこちらは役者ではない。おまけに、前もってインタビューの内容は聞いてはいたものの、いきなり「梅さんにとって花とは何ですか?」などという問いには絶句……。しどろもどろになったこの場面は、一部音声のみに編集されていたのがせめてもの救いであった。夕方、永井旅館に戻るやいなやビールを飲むディレクター。いわく「僕のやり方は、台本なし。その場の印象で決めていくんです。」

(19期 梅 典雅)

白山 HAKUSAN ALPINE FLOWERS GUIDE 花ガイド

文・写真/梶 典雅



KAKUBUNDO

あとがき

春から秋の花が一斉に咲きそろう夏の白山。それは、可憐な花たちが競演する舞台といえるのかもしれませんが。鑑賞の仕方はそれぞれでしょうが、ゆっくりと自然の造形の妙にふれ、その名を覚えれば、山登りの楽しみもひとつ増えるのではないかと思います。

そのような目的で制作した「白山の花ガイドブック」も、発行以来8年を経過しました。この間、いくつかのご意見をお聞きし、改訂の必要も感じていました。今回、一部の写真を除き、全面的に内容を改め新版としました。もとより、本書の存在価値は、白山と周辺の山で見られる花だけを扱ったことと、思い切ったポケットサイズにしたことにあると思います。できるだけ写真を大きく、掲載種数も多くして、かつコンパクトなものにしたいという相反する条件のなかで、以前のものより縦に少し長くし、ページ数・種類数とも2割ほど増やすことで改善を図りました。

また、和名に漢字表記を添え、可能な限りその意味を解説しようとしたのは、その花により親しみを感じていただけるのではないかと考えたからです。その反面、形態や生態に関する記述をあえて最小限にとどめたのは、スペースの関係もありますが、ガイドブックとしての機能に徹したということをご理解願いたいと思います。

筆者の浅学非才ゆえ、至らぬ点もあると思いますが、本書が多くの方に利用され、白山を愛する人が一人でも増えるならば、これに勝る幸せはありません。

最後になりましたが、元金大理学部教授の里見信生氏、金大理学部教授の清水建美氏、並びに元白山自然保護センター所長の米山競一氏には、数々の御教示を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

1998年5月17日 著者

子供の頃、山に行くと言うと熊が出るからやめろと母によく言われた。その後百数十回山に登って、熊に出会ったのはたった二回である。昔はともかく、最近は熊の数もかなり減ってきているらしい。数年前の秋、九州の祖母山に一人で登った時、溪谷沿いの鬱蒼とした、今にも熊が出そうな林の中をドキドキしながら歩いたことがあった。帰ってから友人に「九州にはもう熊はおらんよ」と言われて拍子抜けをしてしまった。実際、絶滅したかどうかは解らないが、長年熊は目撃されておらず、もし祖母山で熊に会っていれば特ダネのものであった。熊(ツキノワグマ)は十数km四方にも及ぶエリアを移動し、ドングリやブナの実、ウドやザゼンソウの葉などを食べて生活している。また、まとまった生息域の中に最低七、八十頭いないと子孫を残していくことは難しいと言われている。開発の波が里山から奥山へと及ぶに連れて、森林は道路などによって分断され細分化されてきた。そうなれば相対的に面積の小さい九州や四国では熊が絶滅の危機に瀕しても不思議なことではないと思う。

熊に会った二回の内の一回、それは尋常な出会いではなかった。またそれは悲しい出会いでもあった。平成元年のゴールデンウィーク、富山、石川、岐阜、三県境にある笈ヶ岳に登った時のことだ。この山には登山道というものがないので、無雪期は猛烈な藪漕ぎを強いられ、自ずとこの時期に登ることになる。雪が良く締まっているので、カンジキも山スキーも要らず、つぼ足で十分だ。この時期は熊にとっては受難の季節となる。冬眠から目覚めて間もない熊の胆嚢には胆汁がたっぷり溜まっていて、それを目当てに歩き易い雪の上を猟師が入ってくるからだ。この時の山行は猟師小屋に泊めてもらったので、文句を言える義理でも無いのだが、感じたことを少し書こうと思う。

二日目の朝、私たちは笈ヶ岳をめざし、猟師連中はライフル銃を担いで熊打へと小屋をあとにした。陽光を浴びて輝く雪面を一步一步高みへと登っていく。紺青の空とブナの白い木肌のコントラストが何とも言えず美しい。膨らみかけた冬芽がほんのりと赤味をさして、周りの空気までが薄赤く霞んで見える。頂上への稜線に達した時、谷間からパーンという音が発し、辺りの稜線へと響きわたった。続いて二発、三発。銃声は山の張りつめた空気を掻き回すように谷間から稜線へと駆け登り、再び谷間へと消えていった。「ああ、ついに見つかってしまったか! 当たるなよ! 当たるなよ!」とこの時私は心の中で祈っていた。それは一つには無意な殺生であるように思えたこと、もう一つは今晚熊を食べる羽目になるからであった。

雪山とは言え日差しは強い。頂上での昼の宴が終わる頃には、張りつめていた空気もすっかり緩んで遠くが霞んで見える。どこからか飛んできたホシガラスがオオシラビソの梢に留まっている。フイフイフイとゴジュウカラのさえずり。春を感じながら、緩みきった雪の斜面を気ままに駆け下った。主稜線から派生する小さな尾根の末端に建つ熊打ち小屋に着いた時、もう猟師達は戻っていた。小屋に入るとストーブの上に、祭の夜店で売っている水の入ったヨーヨーのような物が三つ吊るしてあった。はて? と近寄ってしげしげと眺めると、くすんだ緑色をしたそれは風船よりももっとしなやかで、触れると破れてしまいそうな程の薄い膜でできていた。それは初めて見る熊の胆嚢だった。乾燥すると小さくなってしまうが、内容物は「くまのい」として数十万円で売れるそうだ。手招きされて土間から畳に上がると、テーブルの上に横の畑から取ってきたばかりのわさびが摺りおろしてあり、その隣の皿には肝臓の刺身が圧倒的ボリュームで食べられるのを待っていた。下手物好きの友人はさっそく興味を示していたが、私は頭の中が混乱していた。誘われるままに肝臓の前に座ったものの手を出せないでいると、「うまいぞ! さあ!」と催促。喰わず嫌いと思

われるのも頼なので、思い切って口に入れる。「どうや！うまいやろ！」。息もせずに飲み込んだ私は一宿一飯の恩義もあって、顔を引きつけて頷くだけであった。その日は肉よりも専ら内臓が食卓にのぼった。取れた三頭の熊はその場で皮を剥ぎ解体されたが、時間がなかったので腐り易い内臓だけを取り出して雪の中に埋めてきたそうだ。私にとっては悲惨な晩餐だったが、熊肉とイラクサの入ったラーメンだけは美味しいと思った。

陽が落ちて雪深い谷間にはたちまち厳冬のような寒さが戻ってきたが、小屋の中はストーブと宴の熱気で頬が火照るくらいに暖かい。今日の獲物の話に花が咲く。冬眠から目覚めた熊は食糧を求めて急斜面の雪崩の跡に姿を現すという。雪崩で剥き出しになった地面に新芽や昨年の木ノ実が残っているからだそうだ。猟師達はそういう場所を「なばた」と呼んでいた。雌熊は冬眠期間中に出産と子育てをするので、この時期は子連れも多い。母熊と二頭の子連れは「みつびし」、単独の熊は「いちこ」。これも業界用語である。今日取ったうちの一头は「みつびし」の母熊だった。猟師達は子熊が独立して生きていける大きさと判断したうえで、母熊に銃口を向けたのだった。雪面を血で赤く染めて横たわる母熊の傍らで、子熊は「お母さんどうしたの！」と言いたげに、キョトンとした顔付きで寄り添っていたという。私は胸が詰まる思いだった。その気持ちを察するように老練な猟師は言った。「わしらは遊びや金儲けで熊を取っとるんやない。これがわしらの伝統なんや。」確かに彼らは祖父や村の長老達がやってきたことを受け継いでいるだけかもしれない。結果的に「くまのい」や毛皮が現金になることは否めないが、むしろ自然の一員として天敵の無い熊を淘汰することを本分としてきたのだろう。それが猟師の伝統ということなのかなと私は思った。私はこの話を聞くまで猟師達にいささかの反感を抱いていた。しかし熊が減って希少種となった今、害獣駆除という名目でしか伝統を守ることができない彼らも、また被害者な

のかもしれない。

早朝の空は白々としていて、雲のようにも青空のようにも見えた。ピンと張りつめた谷間の空気だけが今日の天気をものがたっている。昨夜の熱気に満ちた宴の様子が夢うつつのように頭の中にこびりついていて。今日は猟師達と一緒に山を降りる日である。猟師小屋は奥深い山懐の、偶然に開けたような平坦地の端に建っていた。雪解け水がわさび畑を通り抜け、サワグルミとトチノキの間を縫ってさらさらと流れていく。この平坦地を通り抜けた流れは幾つもの小滝となって深い峡谷の底に落ちていた。昨日取った三頭の熊は二十kgくらいの肉の塊に分けられ、ビニール袋に包まれていた。その一つを自分のザックに入れて歩き出す。峡谷の中腹に付けられた細い踏跡を辿りながら、今背負っている肉の塊が昨日までは我が子とともに多分幸せに生活していたであろうことを思うと、生命の空しさ、人間の傲慢さを感じずにはいられなかった。

峡谷を抜け里が近くなると、山は本当に穏やかな表情になる。ブナの新緑は目に滲みるように美しい。ヒメアオキ、エゾユズリハ、アカミノイヌツゲ、ハイイヌガヤ、厳しい冬を雪の下で凌いできた常緑低木が、解放されて陽光を一身に浴びている。こんな時、山の厳しさと同時に人里の暖かさ、有り難さがしみじみとわかる。普段、当たり前のようにして過ごしている生活が、どれほど恵まれたものであったことか。そして恵まれすぎた現代社会は己のことしか考えない人間の傲慢と無知の所産ではなかったかなどと考えながら、猟師の村へと歩を進めた。ミズナラの林、カタクリの可憐な花、ホオジロのさえずり「自然もまだ捨てたものではないな」と気を取り直し、村へ着く頃にはいつものように心地良い疲労と満足感が体を満たしていた。



「ワングルは何故衰退（部員減少）したのか」に疑問あり

21期 山口 克己

「やまざと」4号の後半46ページに文芸作品掲載の解説の中で、「ワングル衰退」の原因なるものにさらりと触れられています。

部員減少＝衰退とするところに議論の余地があるようにも思いますが、それはさておき、また、某女史（原文のまま）と久富氏との議論は既に和解しているということですが、関係者の一人として一言言わせて下さい。

某女史（原文のまま）の解析・考察によれば、衰退の原因は執行部の任期が変更されたことにあり、その有力な証拠として、前田先生の言葉を取り上げてあります。曰く、「あんたらがシステムを変えたから上級生が出てこんようになって、活力がなくなってしまったんや」と。

果たして本当にそうなのでしょうか。

部員数は20期をピークに減少し始めたと解析されていますが、少なくともOB会名簿を見る限りでは、各期の部員数は15人程度で、特異的に20人を超えるような期がいくつかあり、各期の部員数が10人前後になったのは最近のことのようです。また、私の記憶では私が現役の頃の4年生でさえ、3年生までに比べれば元々足が遠のきやすかったように思いますが、皆さんは如何だったのでしょうか。

久富氏のコメントでは、20期が任期を変更したようになっていますが、栄えある金大ワングル執行部を僅か半

年で次期執行部に引き継いだのは21期であり、予定より半年も早く執行部を任されたのは22期です。現役当時「体育会系の部にしては議論が多い部だ」と思っていました、21期はもちろんのこと、22期・23期にも任期変更についての議論をお願いしました。その結果、昭和54年4月に3年生執行部へ移行した時も、4年生が完全にワングルの第一線から退くのではなく、リーダー会議長・パーワン審議会議長をはじめとして数名の4年生が任期変更前と同じように両会議のメンバーとして残るような制度にしました。また、数年後には任期変更について見直しをしてもらうようにベルクハイム誌の中にも書き残しておきました。残念ながら見直しが実施されたかどうかは定かではありません。

当時良かれと思ってやったことですが、結果が思わしくなかったのであれば批判されて当然ですし、久富氏も仰っているように現役の方々がやりやすいように改められるべきだし、真に部員減少の原因がそこにあるのなら、是非とも改善して下さい。やはり、いきいきと活動しておられる方が望ましいと思います。

言い訳じみた話になってしまい恐縮です。ただ、「ワングルをあなた達が勝手にいじったから、ワングルが衰退したんだ。あなた達が悪い」と言われているのも同然ですが、そう言われるのならまだしも、「解析・考察」の名の下に21・22期をはじめとする関係各期に「汚名」を着せられるのはご容赦願いたいと思います。

前稿への答弁

某女史こと

15期 舟田 節子

山口さんの原稿は4月中旬頃、事務局鳥越氏に送られてきたもので、その後彼からは、取扱いについては自由にとの電話もあったとのこと。会報にそのまま載せられるようまとめてありますし、こちらが作為的に打ち直したと勘繰られるのも迷惑なのでそのまま掲載しました。

(一応断っておきますが、これまでも事務局で握りつぶしたような原稿は一本もありません。「載せないで」の若干の返信はがきや、年賀状と返信を兼用されたらしきものを掲載したことはありますが…。)

編集者という有利な立場に立っての答弁は好むところではありませんが、半年毎に丁々発止をやるのも、それはそれで、昔の落書き帳みたいでおもしろいかもしれません。読みたくない人には読まない自由があるのだし…。ことなかれ主義やあたり障りなく主義より「まし」とも思うし…。

まず、飲み会帰り同士であった前田顧問と、久富さんの会話がどんな雰囲気で行われたか？それを今はワンゲルOB会というアホ(!)な仕事を一緒にやりながら「実は、以前飲み会の帰りに…」と話してくれた久富さんと私の間にどれだけの敵対関係があったとみなせるのか？ワンゲルOBなら、笑い話で読んでいるものと思っていました。

もちろん飲み会帰りの現場に私がいた訳ではないし、それを口にした久富さんの本意は何かとわざわざ問い質したはずもない…その程度の話。忙しい時間をどうにかやりくりしながらやっていることなのに、わざわざ何期に汚名を着せるために…どうして、そんな受け止め方をするのかな？45年の人生経験により「人は人の器なりに解釈するもの」として、こっちまで同じ土俵に上がらんわ！でケリをつけたいけれど…。

昨年は戦後50年ということで、山岳誌にも戦御登山史の特集が組まれて、なかなか興味深い記述がありました。

若者が山から離れ出したのは、KUWVに限った現象ではありませんでした。どの大学でも山系統の部(組織やトレーニングを必要とするタイプの部)は新人確保に苦勞していますし、社会人山岳会もそうです。部報や会報も発行されなくなり、ポラー形式も廃れていったことが、全体現象として特集の中に述べられていました。

KUWVの部員減もまさにそんな時流に乗ったことなのです。部の歴史をみると、「新2トレ」が「1、2年山行」と名称を変え、春山合宿がポラー形式からラッシュ形式に変わり、オープン登山がなくなり…それらは正確には、何期の、何主将の代の執行部が決めたことと確かめられるはずですが、むしろ時流がそうになっていたのです。決定の揺り戻しがなくそう踏襲されていったということは、その時代の現役の多数の心情にマッチしていた、その代がやらなくてもいづれそうなったに違いない…ことなのです。たえず新陳代謝している大学ワンゲル部の場合、時流は即反映されていくのです。

4年生が卒研に忙しく、就職活動に忙しいこと自体は変わっていないというか、単位制が変わった最近までは大きな変動はなかったし、この頃の就職氷河期、ダブルスクール時代と比べれば右上がり成長の時代に、急に不都合になったとも思えません。むしろ情動的に4年生執行部が受け入れられない時代になった…(このあたり、また言葉尻をつかまえての反論が出るんでしょうか…) よくも悪くもある種の年功序列的なものが消え出した象徴だと私は、「解析・考察」したのです。

3K…汚い、きつい、臭いの他に「組織」も敬遠されて、部員減となり、部員になった者の間でも「組織=命令される、拘束される」部分が、嫌われていったように見受けられます。こういうことは、社会現象として、多くのOBが職場でも体験されているのではないのでしょうか？



単なる「助言」「意見」が、「口出し」と取られ、二言目には「圧力をかけた」「干渉した」の言葉が返ってくる…いつの時代にも世代間ギャップはありました。それでも相手の立場を尊重する、相手の価値観にも一目おくといい良識はほどほどに働いていたと思う。「文化」そのものが、その積み重ねでやってきたはず…です。

そんな人間としての智慧プラス儒教思想の年功序列がひっくり返ったのが、何といても「終戦」。その後いくつかあった歴史の「トゲトゲ」部分のうちの一つは確かに「共通一次」で象徴されるはず。それはまさしく、21期山口さんが執行部の時代の1月のことでした。一大学の一ワングルにも、見事に世相が反映されている点非常におもしろいと思っています。

ですから「見直し」だの「改善だの」?? 新人勧誘をやって何人かが入った。本人達が入りたくて入った。誰も部のために入ってくる訳ではない。彼等の価値観で彼等のやりやすいように…、そうにしかならないし、そうやっていると思っています。

さらに「21期が決めた」などと…そういう表現そのものにも、私は時流を感じるのです。ではそれより上の人は何も感じなかったのか? 「20期が決めたかのようなコメント」との抗議ですが、20期は現役最上級生としての責任がありました。もちろん卒業間近の彼等は、現役の望む方向にと見守るしかなかったのですが、「部

をつぶさなくてよかった」の気持ちを洩らしてもあります。何か視線が上を見なくなった時代と…いったものを私は感じてしまうのです。

また、OB数は現役時代の活動の実数を示すものではありません。例えば私の所属する15期は、新歓で71名、新トレでは42名いましたので、OB名簿の20名では状況がわかりません。発足の頃には1学年に100名近くが登録された期もありました。それで活動の実数を示す指標として夏合宿の参加者数を適当とし、これを35周年記念誌の上巻p. 1-10に掲載しました。昭和35年からずっと60から80名代で前後し、久富さんの代の90名をピークに、減少が始まっています。

それが、21期の頃にあった事。それが丁度世相として若者が組織離れを始めた頃であったこと。その組織離れが、ワングル内部では、執行部が4回生から3回生へ変更という形で現れたらしいこと…以上が某女史の「解析・考察」で、久富さんにせまった理由でもありました。

そしてまた、彼が単に無人島への憧れだけで、あれを書いたのかといえ、やはり時流をもどかしい思いの中で見守るしかなかったOBの心が前提になければ、読みとれないものがあります。それで、「解説」も「コメント」もつけています。私が「解析・考察」の名の下、特定の期に汚名を着せたなど、それこそ濡れ衣です。

35周年記念誌のうちの上巻は、その時代の執行部がどう考えて部を運営していったかがわかるようまとめました。10周年誌では、OBになってからふり返っての時代の考察となっていました。私は現役時代の声そのままを再掲の方針にしました。現役のその当時にどう考えて運営していたのかの方に私は関心があり、読み手の各位にも、考察を加えないストレートのままを読んでほしかったのです。

議論髣髴の中で、部は運営されていきますし「組織」と「個」の根本的対立もずっと抱えこんでいます。でもどちらかと言えば「ワングルのなもの」はあまり変わっていない。かつては時流そのものがワングル的であり、時流に乗っ

てワンゲルも誕生しました。それが、時流の方が変わり、ワンゲルはむしろ時流とは逆行の価値観に存在することになりました。いつでも部は揺らぎ続けてきました。部がたまたま抱えた問題というよりは、時流と「ワンゲル的なもの」の軋みに喘ぎ続けてきたように眺めています。

最後に、あの、私がいへん評価している25周年後の「OB会設立運動」の時も、山口さんは、批判あるいは再考を促す文書を送ったと聞いています。「21期に汚名云々」ではなく、まずOB会そのものを山口さんは受け入れられないのではないのでしょうか。「記念山行の参加費が高い」とか、枝葉末節を細かく批判するより、OB会不用論か何か、もっと根本的な所で持論を展開していただけないのでしょうか。

原稿をお待ちします。

p59、60は、「自然人」NO.34
'96.1.1発行より



平成7年秋、犀川倉谷の山小屋で開催された「月見の宴」

役にもどうか伝わり始め、石川の山への関心も、少しずつ復活してきたようだ。二度とない青春に、石川の自然の美しさ豊かさを、是非重ねていつてほしいと願っている。

見が多かった。が、今の就職氷河期と同様に、受け入れ育てる体制も不足していた。しかし私の代に女子はサポーター隊に混じって参加し、その後ポラー方式がラッシュ方式に変わった時には共に頂上を踏むようになった。今は女子がリーダーとなって厳冬の甲斐駒に登っている。

この他にも、ワンゲル活動の啓蒙を意図したオープン登山がなくなったこと、山の歌が歌われなくなったこと、個人山行（部の承認をとらない）が容認されるようになったことなど、やはり世相の反映と思われる変遷が見られる。

しかしながらワンゲルの場合、今も、自分が一人前になり、もっと活動を広げたい時に、それをこらえて新人の育成に多くの時間を割いている。

付いていく山行と連れていく山行のギャップに悩み、リーダーの責務を果たして卒業していく。「人を愛し、自然を愛し」の創部以来の精神の方は、世代や変遷を超えてしっかりと受け継がれている。さて、引き続きOB会事務局長に横滑りした私はというと、子育て一段落の十一年前に金沢ナカオ山岳会に入会している。途中で三男誕生というハプニングもあったが、「社会性ある登山」「生涯登山」の会のスローガンに助けられ、配慮もいただいて山行を続けることができた。OB会のお世話もこのスローガンに沿ったものであり、少しでもお役に立っていききたいと思う。幸い、労をとわぬ気のいいOB仲間にも恵まれ、楽しく事務をさせてもらっている。

OB会発足と同時に、犀奥倉谷での山小屋修復も始まった。今秋は山小屋を利用しての「月見の宴」が開催され、多くのOBが高三郎山の麓で、懐かしい一夜を楽しんだ。

ちなみに、この高三郎のクラコシ尾根コースも、犀滝へ至るコースも、金大ワンゲルが拓いた道である。高三郎山と見越山の間の小高原はワンゲル平が通称とされている。山小屋と白山を結ぶ長大な尾根ルートは、金大ワンゲル究極のコースとされ、春と秋に八度の踏破が行われてきた。昨年は夏合宿に始めてこのルートが加わり、真夏のヤブ漕ぎを敢行した現役達には、OBからも感嘆の声と拍手が送られた。

県内の各界で活躍するOBの情報や経験が、現

ワングェル三十五周年に見る変遷とOB会

舟田節子 金沢大学ワングェル部OB会

金沢大学の角間キャンパスへの移転を契機に、金沢大学ワングェル部では、ようやくOB会が発足した。

実のところOB会は何度も発足しながら挫折を繰り返してきている。この機会を逃せば二度とOB会は作れないかもしれないという危機感により、今回はOBの七割強からの賛助金を集め、二割が参加する総会を開催し、年二回の会報発行を含む運営体制を整えることができた。

三十五周年記念誌は、その総会に先駆けて編集、発刊したものである。三十五年分、総五百名のOB相互の違和感を薄め、意識をより合わせる事が第一の目的であった。高邁な志に反して、仕事や家庭を持つOBには編集会議を持つこともままならない。結局独断と偏見で押し切って、総会に間に合わせた悔いが、編集長を務めた私には今も残っている。とはいえ、内容のほとんどは部が毎年発行してきた部誌ベルクハイムからの抜粋であり、各冊から二十ページ前後をコピーし、項別に配列し直す手法をとった点では、そこそこの公平さを保ち、その時代時代の現役の姿を反映できたのではないと思う。

戦後五十年の今年、歴史を振り返る企画がたけなわだが、一大学の一部活動にも世相は色濃く反映されている。毎年学生が交替していく点では、

過去をひきずることなく、その時代がすぐ飛び込んでくるといった印象がある。その変遷のいくつかを紹介したい。

金沢大学ワングェル部の発足は、昭和三十三年。平成天皇御成婚の前年にあたる。当時の学生会館にあたる尾山クラブの二階で、会津若松出身の二人が「我と来て、遊べや金の無いスズメ」と檄を飛ばしたのが始めと聞く。ユースホステル活動も隆盛を極めていた頃のこと、たちまち学内一の大世帯となった。今は、「汚い」「きつい」「臭い」の三Kの最先端を行く部として、新人勧誘にも苦戦し、往時の二分の一弱で低迷している。アウトドアがブームといっても、見掛けのいいサイクリング部などに人が流れてしまうのと、少ない部員に、部運営のための負担がさらにかかることになり、なかなか挽回は難しいようだ。発足の頃、服装はまちまち。帰省の度に秋葉原へ寄って米軍放出のシユラフを仕入れて来る者がいたり、はたまた炭俵をエアーマットがわりにしたり……。今、万年金欠にかわりはならないが、服装はファッショナブル、装備は最新式、部員の三分の一は車を所有といった環境にある。そんな現役達の山での食生活はとなると、肉と野菜をいためて煮た後、何になるかはそれから入れる〇〇の素次第……とかで、レトルトパックも

加わり始めている。フリーズドライが出回り出した私（十五期）の頃は、財布も胃袋もそれでよしとせず、天麩羅や巻き寿司なども作られていた。その頃、突然昼食メニューに登場した耳パン（パンの耳の袋入り）は、日持ちがするのとタダ同然の値段で一世を風靡したものだった。さすがに人前で食べるのは躊躇され、雄大な景色を前にこそこそと食べねばならない屈辱は、右記の長所を圧倒し、今は消滅している。さらに昔の創世記となると、生きた鶏が食材に出てくる。自前で歩いてくれるし、新鮮さはいうまでもない。その廃鶏が、久々の外の空気に卵まで産み落としてくれた時、先輩方は命乞いをされているようで、彼女を絞める手が鈍ったという。

では活動山域はどうなっているかといえば、地元の山を離れる傾向が出ている。地味な山より、有名な山、恰好いい山へ行きたいという嗜好の変化が最大要因のようだ。地元の山では、まず医王山からは、かつての有料化で離れた。続くホームグラウンドとした犀川源流山域からは、小屋（昭和三十八年犀川ダム建設時に廃屋を解体し、倉谷の高山に建てたもの。現在は二代目）作業の衰退とともに離れていった。また春山合宿も、もともとは地元の山ゆえに積雪期のチャレンジも敢行するとされ（雪山は山岳部の領域であってワングェル的ではないの反論があった）、白山をめざして始められたものだが、今は雪が軽くアプローチも容易な後立山連峰に変わっている。

この雪山に関して、女子参加が拒否されていた時代がある。それまでも女子部員論は前述の部誌でも特集が組まれ、部員としての自覚を促す意

返信のアレコレ

(23期同期会通信より転載)

・浅輪 郁代 (8/9でOK)

中川君に電話したあとすぐにこのハガキが見つかりましたので、一応、正式に出します。
子供が2人増えるかもしれません。

→ 待ってるぞい!

・石地 隆司 (8/9はやや難)

10日が仕事なので、夜のみならOK
子供が4ヶ月なので、嫁さん・子供は無理かもしれない!

→ 幼児の参加も歓迎!
(最も、お父さんに似てなければ無理かも?)

・宇野 寿洋 (8/9はムズイ・・・)

南竜でテントしよう!
ボッカは私にまかせてくれ
体力に自信あり

→ 福井から日帰り出来っぞい!

・小久保 光将 (殆ど暇)

お世話になります。
体力に見合った子供と楽しめる企画を期待します。

→ 近くに、「恐竜館」、「手取川の河原」があり、
子供とも楽しめるぞ!
あとは、お父さんの体力次第だ!

・興井 隆 (8/9でOK)

私本人は、体力/気力共に充実しており、白山登山は可能ですが、次男が3才の由、南竜山荘泊りの可能性が大了。
御前山ロッジはどこにあるの?

→ パンフを同封したぞい!

・窪川 淳一 (8/9でOK)

いつも良くやって頂いて感謝しています。

→ これも、暇がなせるワザだ!

・小坂 陽克 (暇なし)

仕事の都合で、不可の可能性が大きいです、上記のとおりとしました。(今後の都合次第)
皆さんによろしくお伝え下さい。

→ たまには、暇しんかい!

・鈴木 康之 (ムズイ)

今年の夏休みに海外研修(ニューヨーク)を計画しているので、出れそうにありません。
皆さんによろしくお伝え下さい。

→ 国外出て、日本の恥さらすなヨ!

・高橋 智栄子 (8/9で、多分OK)

金沢衆のいつものきめ細やかな行動に感心しております。
今回は金曜日ということで、私にとってちょっと苦しいのですが、何とかしたいと思っています。

→ ナリ(中川)は、相変わらずザッパです・・・

・竹内 勝信 (8/16がいい)

参加できるかどうかは未定ですが、子供も楽しめる会にして下さい!

→ あとは、おじさん達の体力次第です!

・辻 政孝 (8/16がいい)

16日なら参加できるかもしれない

→ 君の体力なら、夕方に駆けつけ、明朝出社も可能なハズでは?(愛知県から・・・)

・戸水 利紀 (8/9がOK)

買い出し、及び、その他準備、何でも承ります。

→ じゃ、南竜までの枕木ボッカ!

・中川 晃成 (8/9、16がOK)

すばやい準備ありがとうございます。
楽しみにしております。

→ 当日の買い出しの程、宜しく!
ところで、新居(4月引越)の案配はいかが?

・名倉 均 (いつでも暇)

ギョエー~~~~と!
もしかして、3人目できたかも・・・

・宮西 康之 (8/9がOK)

期待しております。
いろいろと御苦勞ですが、よろしく願います。
ロッジの情報等あれば、送付いただきたい
参加メンバー(途中経過)を知らせて欲しい

→ 知らせるぞーい!

・村井 匠 (8/9がOK)

いつもお世話になっています。

→ 来年は、富山衆で宜しく!

・竹内 和彦 (8/9、16がOK) ← 21期

もしかしたら家族連れになるかも?

・桜井 俊一郎 (8/2、9がOK) ← 22期

勝山から白峰は近いので何か手伝う事があったら、連絡して下さい

→ では、子供受けを狙って、当日、勝山のカブト虫/クワガタを宜しく!

・坪井 陽典 (ムズイ)

← 24期

せっかく誘っていただいたのですが、7月ごろに長期に渡り仕事を休んでしまう関係で、8月は、ちょっと休みがとれない状況です。
8月24、25日は、24期の方がおり、これに行かないわけにはいきません。
非常に残念ですが、今回は行けそうにありません。

以上 アレコレでした!

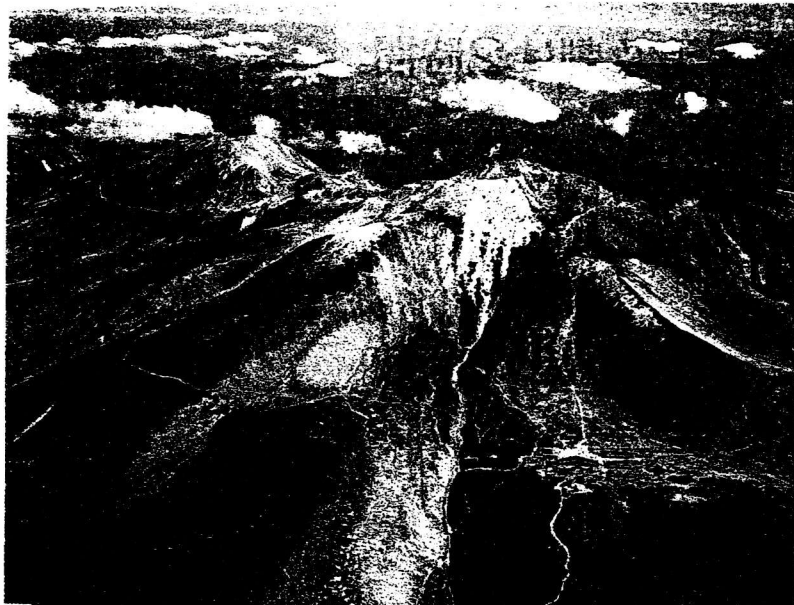
「環白山観光圏」を発信

石川、岐阜県共同で新年度から

富山、福井も協力

4県41市町村
エリアに設定
まず回廊ガイド

知事裁定500万円



周辺4県交流の「壁」となっていた白山。共同の観光資源としての活用が始まる＝本社ヘリ「まなづる」から

石川県は新年度から、岐阜県と共同、富山・福井両県と協力して、白山を中心とした四県にまたがる広域観光ルートを「環白山圏」と位置づけ、全国に発信する。白山ろくろの山岳景観、貴重な動植物、独特の山村文化など「自然と歴史」をテーマとした観光資源を、広域ドライブコースで有機的につなげ、観光客の動機づけを図る。初年度は、石川、岐阜両県で環白山広域観光推進委員会を組織し、その魅力を紹介する「白山回廊ガイド」を製作することとし、十四日の石川県当初予算案知事裁定で五百万円の計上が決まった。

石川、岐阜両県はこれまで、機性に恵まれ、恐竜化で、白山スノーランドでつ、石の分布、世界遺産の白山、なごりながら、直接交流は、郷・五箇山合掌造り集落、少なかつた。昨年二月に両県知事が初の懇談会を開き、広域観光ルートの形成を申し合わせ、交流の「壁」となっていた白山を観光資源として活用する検討が始まっていた。

石川県によると、気候風土、生活風習、信仰などの共通性、さらに国道8号、156号、157号、158号の各線を利用した回遊性から、四県の白山周辺四十一市町村を「環白山圏」に設定。推進委の事業には、富山、福井両県も協力することになった。

白山回廊ガイドには、多いと話している。

さらに、推進委は独特の白山文化と異文化の交流による国際音楽祭や滞在型セミナー、環境美化を核とする「エコリズム」の商品化なども企画している。石川県観光推進課は「観光客にとって県域は意味がない。一つの地域として、さらなる広域観光ルートの形成を目指していきたい」と話している。

新年度から都市公園整備

金沢城跡 112億円で取得

谷本知事発表

石川県は十五日、国有財産の金沢城跡二・七畧を、北陸財務局が提示した百十二億円で買い取る、と発表した。会見した谷本正憲知事は「県民が納得できる適正な価格」と述べた。本年度内に売買契約を交わし、新年度から都市公園として整備する。谷本知事はまた、同公園を主会場に平成十三年(二〇〇一年)度の誘致を目指す全国都市緑化フェアを機に「本格的に県民に開放したい」との意を受け、本年度三月補正に計

上する予定。残る三分の二についても、大半は元利償還に交付税措置のある有利な起債を活用し、谷本知事は「県民の負担にならないよう努力する」と強調。県が「昨年六月に策定した城跡整備計画は、埋蔵文化財調査、石垣の修復、公園の名称は「県民から募

う。県庁跡地との整合性も課題 石川県政の懸案だった金沢城跡取得がこの時期に終わったことは、バブル崩壊後の地価下落や国の二次補正に伴う財源確保という追い風があった。城跡の特殊性に配慮した北陸財務局の評価は例のない城跡鑑定に一つの目安をつくれたことで意味深い。谷本知事が表明した五年後の全面開放には、十九年計画の公園整備を前倒したい意向がにじみ出た。

白山の植物を保全

県種子保存に調査費



白山の貴重な高山植物を保全するため、新年度から始める種子保存事業。写真はハクサンコザクラ

石川県は十五日、白山の貴重な高山植物を保全するための種子保存調査事業費として、知事裁定中の新年度当初予算案に百五十万円を計上することを決めた。白山は、中部山岳地帯などとは離れた独立峰で、高山植物も狭い範囲にしか分布していないため、山火事などによる絶滅の可能性が高い。また、科学技術庁が過去三年間にわたり白山で進めた調査の結果、遺伝的

に白山特有の種がいくつもあることも分かった。そこで、ハクサンコザクラ、イウキキョウ、ガンコウランなど計二十種の高山植物を対象に、石川郡吉野谷村の県白山自然保護センターで種子の保存方法を調査・研究することにした。期間は平成十二年度までの五カ年。▽年五種ずつ現地で種子を採集し、生育地の現状も併せて調査▽温度や湿度などの条件を調べて

の種子保存実験▽無菌室での発芽試験―などを計画している。科技庁の調査時に同センターに入った冷温室を使い、高圧蒸気滅菌室や無菌室用のクリーンボックスなどを新たに購入する。県環境部は、これらの調査・研究を通じて種子の確実な保存方法をつかみ、将来的に高山帯の植生復元のための苗の供給体制を確立したいと考えた。

埋蔵文化財の調査状況次第で史跡公園化の要請が高まり、跡地活用が制限される可能性も否定できない。重要文化財の石川門、三千年長屋の維持、管理が県に委託され、兼六園同様に有料化するのか、無料かの判断も迫られる。もちろん、自然を守ることも忘れてはならない。歴史と自然、スポーツやイベント、相反する利用価値をどう考えていくか、県庁移転後跡地利用との整合性なども課題となる。(報道部 山本義之)

元復園庭丸院泉玉堀もい

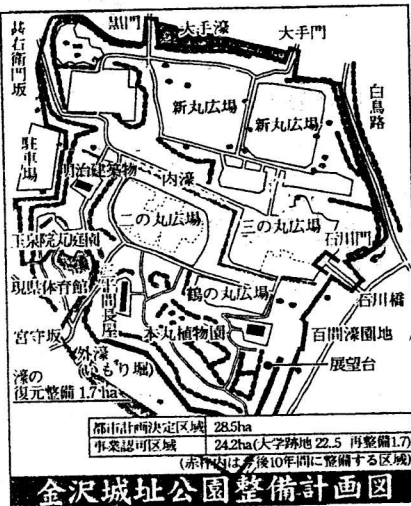
金沢城址公園整備方針固まる

石川県は、金沢市の金沢城跡で本年度から始める「金沢城址(じょうし)公園」整備事業の主な方針を固めた。江戸初期に掘られた「いもり堀」(外堀)や、加賀藩主・前田利常が整備した「玉泉院丸庭園」など遺構の復元が、目玉。城跡に豊富に残る埋蔵文化財については、当面予備調査にとどめ、同公園を主会場に二〇〇一年(平成十三年)の開園を見込む全国都市緑化フェア後に本格着手する。

埋文は段階的調査

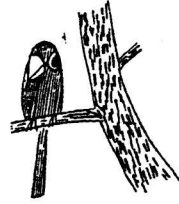
本格着手は2001年以降

総合公園として都市決定された金沢城址公園は、金沢城が築かれたこととはほぼ同じ江戸初期に掘られた外堀(そとほり)公園七・八分を含む約二八・五公頃。このうち四・二公頃が、現在の県兼六園テニスコートとなった。玉泉院丸庭園は寛永十一年(一六三四年)、二の丸御殿や辰巳用水完成を機に、泉涌、築山などが整備された。兼六園が金沢城の外堀な遺構があることが分かった。その位置付けに対し、同庭園は由緒正しい内庭だった。明時代に入ってから荒れ、旧陣地の馬場にもなっていた。復元するには庭園跡地に建つ県体育館の移転が課題となる。一方、絵図や資料から、城跡には御殿や門の跡、加賀藩の行政施設跡など膨大な遺構があることが分かった。そのため、今すぐ本格的な埋蔵文化財調査に取りかかっても全国都市緑化フェアまでに終わることには不可能なため、段階的に進めることとした。県は、同公園を「自然の歴史、文化財の保護・配座し、緑と空間をいかした県民憩いの場」とする考え。植物園をい早く整備、開放するほか、二の丸、三の丸、新丸跡を広場とするなど、構造物は休憩所や展望台にとめる方針だ。



主将の挨拶と部の近況

39期 老田 浩章



ワンダーフォーゲルという聞き馴れない部の名前に目が留まり、どういう活動をしているのかと気になった。小学校のころから父親によく白山に連れて行ってもらっていたので、登山に関しては少しなりにも知識があったため入部することにし、現在に至っている。わたしは登山にはワイルドな一面が見られ、またひとつ間違えると死亡事故につながるという性格上山での行動に慎重という点をみても登山には危険、男らしさというイメージをもっていた。しかし、近年のレジャーの増加やアウトドアブームによる登山の普及によってか、最近ではたくさんある娯楽の一つとして、昔に比べよりたくさんの人に親しまれるなどソフトな面を感じるようになった。そんな中でこのワンゲルの主将を努めるに当たり、わたし自身は今でもそんなに登山の知識を人に教えるほど詳しくはなくて最近になってやっと山の本当のすばらしさというものに触れることができるようになったと思うのであまり偉そうなことを言えた身分ではないが、登山を初めてやる人などに、少しでもその醍醐味などを感じてもらえればと思いなんとか頑張っている次第である。

部の近況については今年の1年生は10人の入部となり、近年では10人前後の入部に落ち着いている。今現在の部の人数は4回生が14人、3回生が9人、2回生が8人、1回生が10人と全員で41人である。今年の1年生入部からの行事としては上回生のみ参加の5/11, 12の雪上訓練、5/18, 19の歩荷トレ、5/31, 6/1, 2の新入生トレーニング山行、6月下旬の第一回トレーニング山行、7月上旬の第二回トレーニング山行、そして8月上旬には夏合宿本番となります。今年の新入生トレーニング山行は山道整備に入る前の高三郎山は山道の状況が今までより一番悪いく、それに加えてダムから廃村までの道がとても歩きにくいということを考えて今年1年のつもりで場所を医王山にしました。今年の夏合宿は北海道、北アルプス縦断(針ノ木-槍ヶ岳-予定)、横断(燕岳-槍ヶ岳-薬師岳)、南アルプスの4partyがあり、普段の練習はpartyごとに走ったり、筋トレをしたりしています。

95年度行事及びP. W.

- *立山山スキーPW 11/25-26
悪天によるバス運休のため中止
L宮本 sL宇根 吉原 西田 小西 黒須
- *冬合宿偵察山行 僧ガ岳 12/3-4
金沢一宇奈月一平和の像一 $\hookrightarrow$ 1450m一宇奈月
L宮本 sL佐川 金古 宇根 小林 三浦 小泉
- *冬合宿 僧ガ岳 12/27-29
金沢一宇奈月一平和の像一 $\hookrightarrow$ 1043m一宇奈月
cL宮本 scL佐川 (含む3年13名 2年9名 1年7名 前田顧問 計30名)
- *甲斐駒・仙丈PW 1/4-7
金沢一横手駒ヶ岳神社一五合目小屋 $\hookrightarrow$ 一甲斐駒ヶ岳一北沢峠 $\hookrightarrow$ 仙丈岳一戸台山荘
一金沢
L金古 sL小林 石川 友野 小泉
- *スキー合宿 1/10-13
妙高高原・赤倉温泉
L西田 (含む4年5名 3年8名 2年5名 1年8名 計26名)
- *雪上訓練山行 医王山 3/7-8
金沢一医王山スポーツセンター一西尾平 $\hookrightarrow$ 一白はげ山一タ霧峠一スポーツセンター
L吉原 sL小西 老田 前川 中野
- *1.2年山行犀奥偵察山行 3/2-3
金沢大学一芝原一吉次山 $\hookrightarrow$ 一高尾山一白雲楼ホテル
L川本 sL西田 山本 山口 新堀 西馬
- *春合宿偵察山行 爺ガ岳 3/6-8
金沢一林道ゲート一 $\hookrightarrow$ 扇沢出合 $\hookrightarrow$ 一林道ゲート
L小林 sL三浦 宇根 佐川 友野
- *1.2年山行鉄崎山偵察山行
金沢一極楽坂スキー場一大品山 $\hookrightarrow$ 1756m一栗巣野スキー場
L岩倉 sL福田 藤牧 坂本 山本
- *春合宿 爺ガ岳 3/17-18
扇沢出合で雪崩発生のため、中止。
cL小林 scL三浦 (含む3年10名 2年6名 1年3名 計19名)
- *1.2年山行
<犀奥 吉次山・高尾山> 3/12/14
金沢大学一芝原一吉次山 $\hookrightarrow$ 一高尾山 $\hookrightarrow$ 一白雲楼ホテル
L川本 sL西田 小西 上田 掛布 中野
- <鉄崎山> 3/25-26
金沢一極楽坂スキー場一大品山 $\hookrightarrow$ 1429m一栗巣野スキー場
L岩倉 sL小泉 西田 後藤 前川 高岩
- <上高地> 3/25-27
金沢一沢渡一中ノ湯 $\hookrightarrow$ 一小梨平 $\hookrightarrow$ 一明神池一沢渡
L坂本 sL小西 老田 山崎 加藤 村井 小川
- *白毛門PW 4/1-3
金沢一土合一1153m $\hookrightarrow$ 一白毛門一土合
L坂本 sL小西 金古 友野 三浦 佐川



96年度行事及びP. W.

- *高三郎PW 5/4-5
金沢大学一犀川ダム一B. H. $\hookrightarrow$ 一犀川ダム
L小西 sL西田 三浦 宇根 佐川 友野 中野

- *雪上訓練山行 5/11-12
金沢一立山駅一雷鳥平一剣沢小屋一雷鳥平一立山駅
c L小西 s L小泉 (含む4年3名 3年7名 2年3名 計13名)
- *新トレ偵察山行 医王山 5/25
金沢大学一前山一三蛇ガ滝一ナカオ新道一前山
L老田 s L西田 (含む3年6名 2年5名)
- *新入生トレーニング山行 医王山 5/31-6/2
金沢大学一医王の里一白はげ山一三蛇ガ滝一ナカオ新道一夕霧峠一医王の里
一金沢大学
c L老田 s L岩倉 (含む4年4名 3年8名 2年7名 1年8名 計27名)

夏合宿

今年は4パーティー出ることになりました。

- *北海道パーティー 6泊7日 8月上旬
L西田 s L後藤 山崎 村井 森田 田村 谷本
旭岳温泉一旭岳一トムラウシ岳一オアタテシケ山一十勝岳一十勝岳温泉
・第1回トレーニング山行 口三方岳 6/29-30
L西田 s L老田 後藤 山崎 小川 砂塚 田村 森田 谷本
・第2回トレーニング山行 白山 7/13-14
L後藤 s L西田 山崎 前川 森田 田村 谷本
別当出合一南竜ガ馬場一室堂一御前ガ峰一大汝山一室堂一別当出合
- *北アルプス縦断パーティー 7泊8日 8月上旬
L小泉 s L岩倉 上田 中野 竹内 長谷川
扇沢一針ノ木岳一蓮華岳一烏帽子岳一水晶岳一双六岳一笠ガ岳一新穂高温泉
・第1回トレーニング山行 人形山 6/29-30
L小泉 s L岩倉 上田 中野 高岩 竹内 長谷川 佐藤
・第2回トレーニング山行 白山 7/13-14
L上田 s L小泉 岩倉 中野 長谷川
別当出合一殿ガ池ヒュッテ一室堂一御前ガ峰一室堂一別当出合
- *北アルプス横断パーティー 7泊8日 8月上旬
L老田 s L川本 小川 高岩 林 佐藤 砂塚
中房温泉一燕岳一大天井岳一槍ガ岳一雙六岳一水晶岳一黒部五郎岳一薬師岳一折立
・第1回トレーニング山行 他のパーティーと合同
・第2回トレーニング山行 白山 7/6-7
L小川 s L老田 川本 村井 林 佐藤 砂塚 竹内
別当出合一南竜ガ馬場一室堂一御前ガ峰一室堂一別当出合
- *南アルプスパーク 8泊9日 8月上旬
L坂本 s L小西 掛布 前川 加藤 市山 得田
塩川一三伏峠一荒川岳一赤石岳一聖岳一茶臼岳一光岳一易老渡一本谷口
・第1回トレーニング山行 人形山 6/22-23
L坂本 s L小西 掛布 前川 加藤 村井 市山 得田 林
・第2回トレーニング山行 白山 7/13-14
L掛布 s L小西 坂本 加藤 高岩 市山 得田
別当出合一南竜ガ馬場一室堂一御前ガ峰一室堂一別当出合

その他の予定

*小屋作業 9/21-23

cL

*冬合宿 12月下旬

*スキー合宿 1月上旬

*4回生追い出しコンパ 1月下旬

*春合宿 3月中旬一下旬

*1.2年山行 3月下旬-4月上旬

2 学年暦

平成8年度の授業及び試験期間は次のとおりです。

☐ 授業期間 ☒ 試験期間

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
教養的科目	4月12日(金)			7月22日(月)				10月1日(火)		1月13日(月)	2月4日(火)	
文学部	4月12日(金)			7月22日(月)				10月1日(火)		1月13日(月)	2月3日(月)	2月18日(火)
教育学部	4月5日(金)			7月29日(月)			9月2日(月)	10月8日(火)		1月9日(休)		
法学部	4月12日(金)			7月22日(月)			9月2日(月)	10月1日(火)		1月13日(月)	2月3日(月)	2月18日(火)
経済学部	4月12日(金)			7月22日(月)				10月1日(火)		1月13日(月)	2月3日(月)	2月18日(火)
理学部	4月11日(木)			7月10日(休)			9月2日(月)	10月11日(金)		1月13日(月)		
薬学部	4月11日(木)			7月22日(月)			9月2日(月)	10月1日(火)		1月13日(月)	2月13日(休)	
医学部	4月11日(木)			7月3日(火)			9月2日(月)	10月1日(火)		1月13日(月)	2月13日(休)	3月13日(休)
保健学部	4月12日(金)			7月22日(月)	8月5日(月)			10月1日(火)		1月13日(月)	2月4日(火)	
工学部	4月4日(木)			7月22日(月)				10月1日(火)		1月13日(月)	2月12日(木)	

現役と打ち合わせをしても今一ピンとこないで、息子の学生便覧からコピーしてきました。同じ金沢大学といっても、夏休み、秋休み、歩調が合わない体制になっているようです。

北アで雪崩 大学生不明

十七日午前九時ごろ、北アルプス穂ヶ岳(二、六六九m)に登山中の国際基督教大学(東京都三鷹市)ワンダーフォーゲル部五人、パーティーのうち、増玉県浦和市の同大教養学部三十八日午前五時ごろ、同書員

1996年(平成8年)3月18日(月曜日)

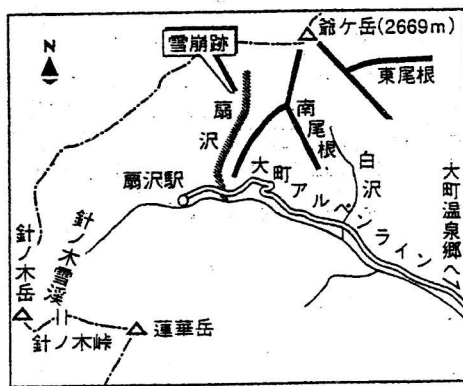
信濃毎日新聞

や同大OBの約二十人が地上から捜索に向かう。同書の調べで、尾根の取り付き点を探していた同パーティーが扇沢谷に十分ほど登ったところ、沢の上部で雪崩が発生。五人はザックを抱け出して避難しようとしたが、逃げ遅れた穂ヶ岳さんが巻き込まれたらしい。同パーティーからの連絡を受けて下山した登山者が大町署に通報した。

同日午後三時前、県警ヘリで現場一帯を偵察した同書員によくと、雪崩はりょう線直下から扇沢に沿って滑り落ち、先端は大町アルペンライン付近まで達している。雪崩は幅が約二百メートル、長さ約二キロに及ぶ。

登山計画書などによると、五人は十七日、同ラインの冬季ゲートまで行き、徒歩で扇沢に向かった。同ラインを通じて作業員らを扇沢駅まで運んでいる関西電力は、昨夜からの雨で雪崩の恐れがあるため、バスと雪上車の運行を朝から見合わせていた。同駅前では同パーティーを指導した芝波

田・美・大町山案内人組合長は、入山を延期するよう呼び掛けたという。



重い雪：手が出せない状態

救出に向かった信大生国際基督教大学のワンダーフォーゲル部のメンバーから助けを求められ、三〇番通報や行方不明の菊池拓哉さん(三)救出のため現場に行った信大ワンダーフォーゲル部のメンバー十五人は十七日夕方下山し、二

沢全体を埋めやうと雪崩が発生している。雪は雨でかなり重く、手のつけられない状態じゃなかったと話した。

ノースエド内でテント泊していた。午前八時ごろ、国際基督教大学メンバーがテントの横を通った際、二天候が悪いのにと思ったという。その二時間後の午前十時、同大の一人が助けを求めて、テントに飛び込んで

行事に追われてしまい、一年近く前に機器を予約といった発想にはなれないようです。

しかし、5月の雪上トレは今年2年目。冬合宿、春合宿とも、雪山を離れる徴候はありません。中高年登山者が山にあふれるようになった今、昔以上に雪山は若い心を魅きつけるのではとも思われます。

雪山へ行くのであれば、神頼み以上のことを、工夫できないものでしょうか? 「転ばぬ先の杖」とのことわざもありますが。

これは、今号15p 中の33期奥出さんが送ってくれた新聞記事コピーです。この雪崩事故のため春合宿は中止になりました。

雪崩ビーコンもアマ無線の話も、あれっきりになっています。

一応「親切」に「現役が望むのであれば…」と言いつけてきてはいるのですが、どうも今の体制では、来年度のことまでは関係ないし、現実として「3年生=執行部=リーダー」の結果、目先の

OB会会計報告

(平成 7年12月 1日～平成 8年 6月30日)

会計 23期 鳥越

《 収 入 の 部 》

OB会費	74,000
月見の宴会費	5,000
リフレッシュ会寄付	25,000
預金利息	18,765
計	122,765

《 支 出 の 部 》

OB会報(やまざと) No.4制作費	44,950
〃 郵送料	114,240
OB役員会	57,950
リフレッシュ会案内郵送料	56,580
〃 案内制作費	25,225
〃 作業用道具代	97,878
〃 食費	21,044
〃 備付用救急品	7,534
〃 その他	15,827
役員等連絡費	19,320
文具費その他	20,588
計	481,136

《 差 引 剩 余 金 》

前回(7.11.30)現在繰越金	2,008,518
収 入 の 部	122,765
支 出 の 部	481,136
差 引 合 計	1,650,147

以 上



<事務局より>

*OB会費納入者一覧は、掲載いたしません。

*今号に、振込票と振込お願いが同封されている方は、会費未納です。よろしくお願いします。

同封物のない方は、納入済ですので、枕を高くして会報をお読み下さい。

会費未納者対策については、その筋のエキスパート鳥越氏が秘策を練っています。私は銀行さんの表の顔しか知りませんが（もちろんトリさんについても）、「取り立て」の時はどんなノウハウがあって、どんなお顔になれるのか（ワー、見てみたい！）。そういえば、1期仙田先輩は、銀行員時代、管財人として多くの破産処理に辣腕を奮われたと聞いております。転勤の折りには、「お蔭で死なずに済みました」と見送りまで受けられたとか…。はじめははじめ、心は心がやはりワンゲルOBには…。

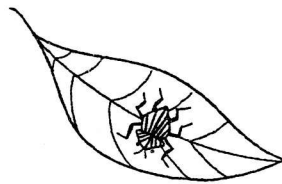
ともあれ、「秘策」は「秘策」として、プライバシーを尊重すれば、その分、事務局員が蔭でやる仕事が増えてしまいます。速やかな完納をお願い申し上げます。

<部誌BHのこと>

先日、ノウハウゼロで困り切っている西馬編集長と、編集会議（二人だけ）を持ちました。編集方針をたて、やることをリストアップ。プリントショップ多田とも渡りをつけ原稿をうつ段階に時間を食うからと、整理のついた原稿については手渡し、発刊の見込みがたってきました。

前回、私は、現役の部誌発刊を援助していきたい…と書きました。しかし、これもピンボケだったようで…。今の現役にしてみれば、それはかつての現役がやり残していった仕事であって、自分達の責任??の感覚になるようです。それこそ「何期が悪い」と言う為にこれを打っているのではありません。仕事をやり残していったのは、誰も責任を持たない状態になっていく…の繰り返しを、今後のためにも処理しておきたい。OB会費からのご協力をお願いしたいと思います。

今回、現役からの原稿はきれいにワープロ打ちされた、そのまま印刷原稿にできるものを受け取りました。これだけ機器が便利に安価になった今、やればできないことはない。何より当事者達にとって価値あるものになるはずの活動の記録を、是非残して欲しいと思います。



—秋の山小屋酒場のご案内—

*日時 9月21日(土)より
23日(月・祭日)



- ・期間中、日帰りから3日間まで、出入り自由です。
- ・現役も同一期間に、金沢市からの補助金を受けての旧道補修作業を行います。(1089p 付近に前進基地を設け、作業の予定)

*作業予定

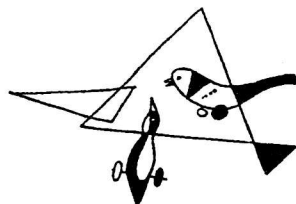
- ・資材運搬
- ・小屋周辺…水場の整備、トイレ整備 (CL 13期 辰野 隆義)
- ・登山道修復…旧道整備 現役と一緒に作業 (CL 18期 岡部 伸一)

*参加申し込み

- ・8月末日までに、同封返信葉書にてお申し込み下さい。
一言通信欄(申し込み専用の書式にはしてありません)に、
参加可能日、遠方でJR等利用の方は到着見込み時刻と出発見込み時刻、
小屋周辺参加か、登山道修復に参加か、高三郎登山希望か?活動希望を
書いて下さい
- +「山小屋酒場」の精神は、「楽しくお酒を飲む」にあります。
作業は強制されませんが、できれば一緒にいい汗をかいていただき、よりおいしく健康的に飲めたら…と思っています。
- +小屋作業をどう捉えるかについては、各自の気持ち次第です。小屋周辺チーフと、登山道修復チーフがいますので、それぞれの企画にご協力下さい。
- +基本的には、気楽に参加できる企画に育てていきたいと考えています。その時の体調や気分次第…など、構えず参加していただきたく思っております。
しかしながら、「テント、食糧・機材のボッカ」「足の確保」など、いきあたりばったりではすまない面はつきまといます。まずは、締め切り厳守、迅速な連絡にてご協力下さい。今回はアマ無線も備え(現在確認は、現役2機、OB2機)、兵隊不足の方は智恵とキャリア、文明の利器で補おうとしています。

- +参加希望者には、9月10日頃、封書か電話にて、詳細をお知らせします。

編集後記



「ほやから、登れんくらいなら、＜立山バス＞なんて名前にせんと＜室堂バス＞にすりゃいいかや！」

たしかに、彼女の口にした室堂停車時間では、「立山」往復は難しいようでした。ここは某山登山帰りのバスの中。年季の入ったオバタリアン二人が、夏の予定を歓談中。「そんなもん、＜立山バス＞ねんもん。登ってくりゃいいわいね。バスなんか待たしときゃいいわいね！」

彼女達は「立山」という名詞に固有名詞としての厳密さを求める割には、その「立山」には「雄山」という固有名詞があることは知らないか、気にはしていないようでした。「バスに間に合わんかや。どいて、どいて！」と駆け下りる（それも無事ならいいけれど）姿を想像して…。

「ありゃりゃ」おじいさんが家から飛び出してきました。彼が少しでも外の空気をと、河縁の柳の枝にかけた巣箱では、すでにメジロはショック死していました。巣箱の中でオロオロしていた蛇を、彼は棒で突つき出し、したたかに打ち据えて死骸を浅い川にほうりなげました。「キカンやっちゃ！」とののしりながら…。

キカンやつ生活圏に、お供えのごとく巣箱をぶらさげたのは誰だったというのか…。

夏休みの予定表、週4回の時間帯の中から、都合のよい2回を選んでくるように、塾の生徒に渡しました。ある親は4回全部に○をつけて戻してきました。夏休み中は暇で全部都合がつくから、勉強させておいてくれというわけ…。

ワンゲルOB会の仕事はそれなりに手間暇をくうけれど、こんな日常のもろもろを忘れさせてくれる、心晴れる時間です。とはいっても、大先輩の行状に???、!!!の続く私は、結局のところは前記の人達とは五十歩百歩のところの俗物です。

かつてKUWV教をうちたてられた教祖様は、続くOB編で教義をまっとうすべく倉谷で御修行中です。この夏はカメ虫ともオロロとも仲良く過ごされて、皆様のお越しを楽しみに待っていらっしやいます。

尚、OB会報の発行時期は、ボーナス時期とからませる必要もなくなり、事務局員の手のあく時期を優先しようということで、8月と1月（or 2月）に変更します。



OB会報「やまざと」 '96夏号
(5号)

発行日 平成8年8月

発行者 大島 良治

編集責任者 舟田 節子

印刷 中川 晃成

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

事務局 金沢市橋場町10-49

☎0762-22-9288